

られた。自分も不敏ながら弟子としてこの同じ道を歩む者であつて、この和平運動は決して日本の圧迫に依るものではないのである。然るに孫文先生が生涯を賭けて完成された国是は三民主義であり、その象徴は青天白日旗である。万一にも自分がこの際三民主義の修正、青天白日旗の変更を承諾すれば、それは孫先生の弟子たる道に反き、同時に中央政府樹立も日本の圧迫によつて行なわれたという証拠になる。これでは和平運動の自殺である。切に日本政府の再考を促したい。汪はこういう申し入れを行なつた。

結局のところ、日本政府も三民主義の理論を日本人の手で修正させるといふ訳には行かぬので、この方は有耶無耶のうちに立ち消えになつたが、青天白日旗の方はそれだけに一層あとまで尾を引いて、しばらくの間はげしく紛糾した。最後には、周仏海ひとり交渉のために東京に残して、あとの一行はこのまま上海に引き上げようかという瀬戸際になつて、ようやく妥協案が出来上つた。

その晩、私は汪に呼ばれて古河邸の会議室に入つて行つた。そこでは周隆庠が大きな卓のうゑに真白いワットマン紙をひろげ、画学生のように腕まくりをして水彩画の絵具を溶かしながら、今しがた決定したばかりの妥協案による国旗の原図を描いていた。見ると、青天白日旗は今までのとおりであるが、竿頭の金いろの玉飾りのすぐ下に黄いろの三角形の小布片を臨時に結びつけて、「和平反共建国」という六文字を書き入れる意匠のものになつてゐる。汪は子供の幼稚な遊びを傍観するように笑いながら、まん中の椅子にゆつたり腰を下ろしてゐた。が、血の気の多い周仏海は黙つてゐない。彼は私が卓の上をのぞき込んでゐるのを見ると、いかにも失望したやう

に声をかけた。

「やあ、この凶案はどうですか。——どうも、この三角の豚の尻尾のやうなものが気に入らな

ね」

「三角形も三角形だが、この黄いろというのは差し支えないのかい。黄いろは清朝の旗の色じゃなかつたのか」

「じゃあ、骨董なみに大清乾隆年製とでも書き入れますか。そして上野の博物館に納めますかな。はムムム」

「なるほど、こうやってよく見ると、紐でむすんであるから、すぐに外せるようにはなつてゐるんだね。そこが興亜院（中国外交を扱う官庁）の最後の譲歩の記念なんだろう」

「とにかく国慶日や、孫先生の誕生日などにはこの尻尾を外したいね。——うちの子供に、なぜ国旗を変えるの、と聞かれても困るからな」

この時はじめて汪が笑いながら中国語でわれわれの話に加わつた。彼は明治時代の留学生だから、他人の話す日本語の大部分はわかるのである。

「まあ、一旦きめた事だから、この際は約束を守っておきましょう。しかし、せいぜい一年ですね。一年以上になつては、この連中が到底黙つてはいけません。その際は腹をきめる時があるでしょう」

私は思わず顔をあげた。汪は白い絹の中国服をくつろいで着てゐた。あの仏印河内の艱難の多い日に、はじめて私の前にあらわれた時と同じ瀟洒な白絹の長衫であつた。

福沢諭吉の「瘦せ我慢の説」

いよいよ汪一行が上海へ引き上げるといので、われわれ内輪の関係者は庭内の亭おすまやで立食の酒パーティー会パーティーに招かれた。その亭は母屋からイタリヤ風の平地の庭を二段ばかり下りた薔薇園の真中まなかにあった。丁度花ざかりで、重たげな枝々の熟れたような匂いが亭の軒下まで漂っていた。私は影佐から「ちよつと居残るように」と耳打ちされていたので、薔薇の木の間の小径をパーティーの済むまであちこち歩いていた。

影佐の話というのは、一行が上海に帰るとすぐにも折衝のはじまる「内約」の事であった。「内約」というのは正式の和平条約の下地したじになる日本政府と汪側との予備的取り定めであつて、原案は目下興亜院の手で執筆中だという話だ。

「君、こんどは相当の覚悟が必要だぞ。興亜院からわし等に示して来る原案というのは、到底吞めないような手敵しいものらしいよ」

「それは誰の話かね」

「実はここだけの事だが、堀場中佐からの注意だ。堀場も原案執筆者のひとりになっているんだ。

——そこでわしは堀場に訊ねて見たのだ。仮にその原案をこつちが呑んだとしたら、全面和平促進にはちつとはプラスになる面も出るのかどうか、とね。——ところが堀場の云うには、『とても、とても。逆に和平が絶対不可能な事だけは保証する』と、こうなんだ。わしはこういう場合

の堀場の勘かんは信用しているからな」

二人とも憂鬱ゆううつになつて黙つてしまつた。

「わしは今度こそこのカーキーの軍服を着ているのが恥かしくなつたよ」影佐がしばらくして、また話をもとに戻した。「これも堀場の話だが、仮に汪さんが売国奴にならないだけの最低の線を六十点とすると、興亜院の原案は平均して三十点そこそこだろうという話だね。そういう原案が北は満洲から南は海南島の端まで、地理の順序にしたがつて何十カ条かずらりと書きならべてあるのだそうさ。そうなる、これからざつと今年一ぱい、毎日一つ一つの条項ごとに三十点ずつ修正をやつて、点数を取り戻して行かなければならない計算になるんだな」

「そりゃ大変な大事業だ」

「そうなんだ。ナポレオンじゃないが、どうやら不可能を可能にするような離れ業を考えなくちゃならんだろうね」

一体、それまでこの男の健康が保つかな。——こう考えて、私は思わず影佐の蒼白い頬を見守つた。

「ところで君はこれからどうする」と、影佐が改まって私にたずねた。「つまり、これから上海に帰つた後の君の計画を聞いているわけだ」

「どうすると云つて、乗りかかつた船じゃないか。とにかくその『内約』を仕上げるまでは手伝うよ。どうせ僕には東京に本職があるから、いよいよ正式の平和条約交渉という時には、法規上から云つても日本側の代表委員になる資格はないのだから、この『内約』が最後のお手伝いだ。

——随分早く、この一年は経ってしまったね。あつと云う間に過ぎてしまったな」
「それでは、君は、本当に手伝ってくれるのか」

影佐がいかに感慨深そうに、ひと言、ひと言、力瘤を入れて云った。青天白日旗に関しての紛争でここ二十日あまりの不眠不休の奔走に加えて、昨夜このかた新しく降りかかって来たこの「内約」の難題のために、影佐はひとり思いあぐんでいたらしく、私の何でもない返事に対しても、過度の感動のいろをあらわしていた。

「——それで、わしも、安心したよ」

影佐はゆっくり、独り言のように云った。

「手伝うも何にも、君の本当の相棒はもう僕しか居なくなってしまったじゃないか。松本や西のような古い仲間が汪さんの政府樹立の方針には批判的だし、ちよつと隔たつた立場に立ち戻ってしまっているからね。——なるほど、あの連中としては尤もだろう。しかし僕は馬鹿の一つ覚えで、『内約』の出来るまでは必ず手伝うよ。——僕は親不孝の息子だが、僕のオヤジは福沢諭吉先生の『瘦せ我慢の説』という訓戒を一生奉じた男だ。福沢先生はあのように明治の新知識の第一人者だったが、それでも先生は徳川幕府の恩を受けた勝安房や榎本武揚が朝廷との戦に敗けたとなると、忽ちケロリとして明治政府の大官になりすました心事を、口を極めて卑しんで居られたのだ。——そして僕のオヤジはこの説の信奉者なのだ。それで、僕も今度は一とつ福沢流を真似て、君と一緒に歯を喰いしばって瘦せ我慢をしようかと思っている。どうやらこの和平運動の前途には困難が増して来たが、成功すれば勿論このうえ無し。失敗しても君と一緒に失敗する

よ。人間の一生にはそんなにいろいろ器用な仕事は、沢山出来ない筈だ」

ふたりは東京の名残りに銀座の江戸前料理の晩食を楽しみに出かけた。同じ東京でも鄙びた王子滝野川の町外れから尾張町の大通りへ出て来て見ると、昼間のように感じられる明るい灯の下を、驚くほど派手な身なりの通行人が、まるで祭でもあるかのように、ひっきりなしに舗道を歩いていた。

「おい、みんな、戦争の戦の字も考えた事のないような顔をして歩いているな」影佐はいかにも不審そうに私を振り返った。「それとも、わしらだけがシャチコ張って、一人相撲をとっているのかな」

「そのとおり。たしかにその気味があるよ」と、私も苦笑しながら影佐を揶揄した。「この連中は中国とか蒋介石とかいうものを一向憎んでいないようだよ」

私は擦れちがう人の流れの間を縫いながら、大谷邸の僕婢たちの康に対する毎日の和やかな空気を説明していた。

その同じ縁側の飛び石に足を投げ出して、今は影佐が浴衣がけで書類に目をおしている。彼の眼は喰い入るようにその部厚な書類のうえに落ちていて、私が遅ればせにその離れ座敷に入っ
て行った時も、しばらくは顔を挙げないほどである。客に気をつかう影佐としては珍しい事だ。

過酷な和平条件

興亜院の誕生

そこは小さい庭だが、風知草に滴が光って見えるほど打ち水がたっぷり撒かれてある。日がまだ空に残っているので、竹垣へ蔓をのぼした朝顔は花を閉じているが、それでもみどりの葉の濃淡が美しい。この小さな裏庭にはこの女主人の丹精がこもっている。女主人はほんのわずかな合間でも、この縁側に坐って故郷の長崎を思い出すらしい。いじらしい、空しい願望である。なぜならば垣根のすぐ向うには市街戦の爆撃でやられた煉瓦の壁の残骸が無慚にも聳えてこちらを覗いている。

しかしこれは無理もない。東京の興亜院から汪精衛に対して実に過酷な和平条件をつきつけて来たからである。

「やあ、遅くなりました。それが問題の『内約』かね」私も早速浴衣一枚に着替えながら、影佐の背中に声をかけた。「首尾はどうです。よほど手厳しい内容のものか」

「うむ。手厳しいにも何にも、話にならないのだ。——勿論わしも今は戦争がつづいている事だから、この『内約』にも多少は戦時の過渡期の取り定めというような条件が入ると覚悟はしていたがね。今ここで読んで見ると、この書類の七割ぐらいはその戦時の要求というやつで埋まっているのだ。そのうえ、秘密協定の手厳しいのが、あちこちに八カ所も臆面なくのさばっている始末だ。これじゃあ和平実現どころじゃない。汪さんは中国国民に不明を恥じて詫言なければならぬよ。執筆者の堀場中佐でさえ、あまりひどいので、冷却期を置いて再検討しようと言張しているそうさ。とにかく、近衛さんも興亜院などという大変な役所をつくってしまったものだな」

一体、この興亜院という役所はどういう事情で誕生して、どういう仕事をする所なのであろうか。これは主として宇垣外務大臣が内閣参議であった時代に熱心に主張したものである。宇垣は、外務省が現在のままでは到底大きい国策を担当するに足らぬとして、中国に関する外交をすべて外務省の事務から外して、総理大臣を総裁とする強力な中央官庁に委譲すべきだと主張したのである。そこで仮称「対支院」設置という気運が盛り上がり、近衛も熱心に取りあげてこれを企画しはじめた。ところが宇垣が外務大臣に就任すると、忽ち態度を一変して、外交の一元化を唱え、

「対支院」の設置に反対しはじめた。実は理屈はこの方が正しいのだが、宇垣の態度がよろしくなかった。宇垣は湘南の葉山に特定の新聞記者を招待して、オフ・ザ・レコードだと称しながら、近衛の措置を相当露骨に批難した。こうなると事柄の善悪よりは、このような態度をとる外務大臣をそのまま内閣に残しておいてよいかわるいか、という問題の方が先きに立ってしまった。ことに近衛が信頼している米内海相や池田(成彬)蔵相が激しい語調で「人間としての宇垣」というものを徳義的に批難したので、「対支院」の本質に関する冷静な再検討は行われぬままに、宇垣の退陣だけが急速に実現した次第であった。これは宇垣の不徳と云われても仕方がない。

ところがよく考えて見ると、当時の日本の政府の仕事のうち、中国に関連のあるものを一カ所に包含するという事になると、実に歴大な役所が新たに出来上るのである。そして外務省は勿論のこと、陸軍、海軍、大蔵その他の各省から部長課長クラスが選手のような形でこの新官庁に送り込まれて来るのだから、勢い汪一派を相手に国家の権益を図る「獲物の争奪」という形になって来る。そして各省もまたその争奪戦の応援団という意気込みになる。これは誰の罪でもない、機構の罪である。影佐や堀場を苦しめたあの苛酷な「内約」の要求も、みなこの日本の官庁独特のセクショナリズムの飛沫を浴びたものに他ならない。そのうえ、「影佐ひとりがいい気持になって和平の花形に納まっている。怪しからん」という嫉視の動きも無視は出来ない。これでは汪精衛と日本政府との間に板バサミになっている梅機関こそ堪ったものではない。

梅華堂の友情

私はここでついでに、いつも興亜院の敵役にまわって火花を散らす場面を引き受けている梅機関のことに触れて置こう。

梅機関は一風変ったオフィスであった。影佐はこの梅機関を世間の所謂特務機関と混同されるのをひどく嫌って、彼の仕事を梅華堂とみずからも名づけ、世間でもそれが通り名になっていた。梅華堂がどう一風変っているかという、実は代表者の影佐の指揮命令の及ぶ範囲は同じ陸軍から選ばれている矢萩中佐以下の四人だけであった。あとの顔触れと云えば海軍から来ている須賀少将と扇少佐、これは海軍省から俸給をもらい、任免は海軍の手に握られていた。外務省から新しく興亜院に移って梅華堂に送られて来た矢野書記官と清水書記官も同様である。その身分一切は興亜院に属していた。そして私はと云えば、これはいずれの役所にも所属していなかったのだが、今度は公文書を扱う資格を与えなければならぬという意味で、あらためて興亜院の囑託になった。私に関する経費は最初に風見書記官長からかためて与えられたほかに、近衛さんの心入れで住友本家に買い取ってもらった宋板や元板の古典、それに古墨や古筆で得た金を食ひ扶持にしていた。ともかくも、こんな風の法的束縛のない寄り合い世帯ではあったが、それだけに梅華堂の万事の基礎は堅い友情で結ばれていた。みんな結束して影佐という男を助ける気持であ

った。梅華堂の友情は外部からの艱難に出会うと、一層意地にも結束の度合いを加えるといううな友情であった。自然、梅華堂にはかつて一度も内紛というものが無い。影佐はこの事を生涯の自慢の種にして感謝していた。この梅華堂が汪精衛一派と日本政府との間に立って、和平運動に関する事務の一切を毎日取り扱っているのである。

こういう立場の影佐だから、この夕方の離れ座敷でも、さし当り眼の前にいる私に向って鬱憤をぶちまけるより方法がなかった。

「これは君、もう日華交渉じゃない。立派に日本と日本との交渉になってしまっているのだな。こんな風では汪さんは、蔣に対しても中国国民に対しても売国奴になりかねないよ。そこでわたしは今日から一生一代の防衛戦をお始めるつもりだ。彼を知り我を知るは兵法の始めだからな。わたしもあの孫子の筆法で行くのだ。わしのカーキ服の御奉公もいよいよこれでお終いだらう。

——それで、ひとつ君に折り入って頼みたい事があるのだが」

「何だね。細かい事は僕には向かないよ」

「いや、雄大な仕事だ。上海を股にかけて横行するという仕事だ」と影佐は笑っていた。「他でもない。君には御苦労さんだが、僕が毎日わざと『内約』の折衝の会議を夕方早目に切り上げるから、そのあとで、ひとつ周仏海の家までコッソリ通ってもらいたいのだ。そしてその晩のうちに二人で懸け引きなしに双方の理想に近いような妥協点を見つけ出してもらいたいのだ。その結果を翌日の会議でわしが何気なく新提案として持ち出す、こういう寸法だ」

「そいつは大変だな。そうなる僕に暗殺横行の上海の端から端へ毎日同じ道を通うという事になるのか」

「すまん話だが、それをやって貰いたいのだ」

「さあ、そいつは第一、周仏海とうまくコツが合うかどうか。これはちょっと考えさせて貰おう」

「弱ったな。君以外には人がないのだがな」影佐は事実非常に困ったような顔を見せた。「まあ、興亜院の横暴を防ぐためにも、是非色よい返事をしてくれ。——それと、今わしの心配している事は汪側の様子だ。失望のあまり脱落者でも出来はしないかと心配しているのだ。君は康紹武との連絡はいいのだろうか」

「ああ、始終マメに呼びかけて来るよ。——それで一つ相談なんだが、康君は最近競馬場の前のシロスというナイトクラブに何度も僕を招待して来ているが、これがちょっと問題なのだ。その主人は謝という杜月笙の子分で、上海の青帮のうちではなかなかの顔だそうだ。——これは僕の第六感なのだが、康君はどうも杜月笙とは何か連絡があるのじゃないかな。というのは、あの用心深い康君がこのシロスへ行く事はあまり恐がっていないのだ。この点が僕にとって安心なのか、それとも警戒すべき事なのか、ちょっと見当がつかない。君はどう思う」

「どう思うと云って、そいつは君が今後康をどう扱って行くかの問題によるね」

「僕としてはやはり最後まで康君を和平陣営から引き離さないように努力したいのだ。——ただ、機密保持の問題もある事だから、念のために『内約』の書類の保管だけは厳重にしておいて貰い

たいね」

「そいつはむしろ中国側に注文が強いくらいじゃないか。香港で機密が洩れて以来、みんな用心しているからね。それで、こんどは毎日会議が終ると矢萩と梅思平が幹事になって、関係書類は全部そのまま手元にあずかって、翌日の会議の席上でまた配るといふ事にしたそうだ。個人個人の書いたメモも全部会場に残して行って貰うのだそうだ」

「ふむ。多少不平を云う者も出て来ると思うが、この場合手堅いに越した事はないだろうな」

「それで、康の話に戻るのだが、わしも一度は癩癩を起こして彼を叱責した事もあったが、あれはわしの行き過ぎだ。やはりこれは君の意見に従うよ。しかし、ちょいちょいナイトクラブに招かれるようでは話が少々物騒だから、丸山のほかに松尾でも川島でも、河内へ伴れて行った憲兵の組は目立たぬように君の護衛に当らせて置こう。君はシロスでもクロスでも、思う存分に康と連絡をとりたまえ」

ところが、これで私は影佐から恩を着せられた形になり、周仏海の家毎晩出かける方の話はどうとう懇望に負けて承諾させられてしまった。影佐もなかなかの外交官である。しかしこのために私の身辺は急に雑事が殖えて行った。私はいろいろの伝手を求めて工部局（共同租界におけるイギリス人経営の事実上の市役所）に日参した。そして口実を設けて交通課から自動車の番号札の番号の違うやつを五組ほど手に入れる事に成功した。これも周仏海の家毎旦安全に通うための準備体制である。私が急に南京路のキャセイ・ホテルに居所を移したのも、これによって共同租界の市民権を獲得して、それに伴うさまざまな便宜を身につけておこうという覗いに他ならなかつ

た。私は毎日つづく大暑のなかで汗びっしょりになりながら、移転したばかりのホテルの重々しいイギリス風の石造りの玄関を忙しく出入りした。

原田熊雄の流儀

このキャセイ・ホテルに引越して間もなく、東京から私にあてて電報が舞い込んで来た。「スグオイデコウ。カザミ」

丁度東京では第二次近衛内閣の組閣のはじまろうという時であった。が、勿論この電報は近衛さんの代理としての風見ではない。私にはそういう関係は近衛氏に対しては無いのである。しかし、ともかくも風見には恩義を蒙っているの、私は影佐と日高公使に断りを云ったうえ、一週間ほどの暇をもらって東京へ出て行った。

東京では私の想像したとおり、風見書記官長時代に世話になった中堅若手の連中が築地の有明館という旅館に集って、私の到着を待っていた。そして代る代る云うには、

「今度の近衛さんの組閣では、まだ風見氏には組閣本部から何の連絡もない。それでだいたいぶん批難の声もある。何と云っても第一次内閣の時代には風見氏が新聞社出身で報道陣との連絡のよかつた事と、陸海軍当局とのあの淡泊な気性の折衝とが成功して、総理のためには第一の防禦の壁になっていたこととは否定出来ない事実だ。それを今度のような仕打ちなので、『やはり公卿というものは冷たいものだ』と憤慨する者も出て来ている。それで、あなたから一度近衛さんに風見

氏を推薦してもらいたいのだが」

という註文であった。そこで私は、

「それは一応御尤もだ。私も風見さんに恩義を感じているからこそ、すぐに上海を發つて来たのだ。——しかし、実は私も組閣の手伝いを勤めた事がある。しかもそれは自分の家での組閣だったから、こういう折の人情の機微には少しは体験もある。——こういう折に新首相の頭を占める事柄は、傍からの進言をいちいち取り上げては切りがないぞ、という心理なんだ。それともう一つ、来訪者に対しては必らず、その人自身にポストについての色気があるんじゃないかと疑いやすい事だ。たとえば僕の場合は、風見さんを材料に使って僕自身の運動をするのじゃないかと見られやすい事だ。殊に近衛さんは人の心理を細かく分析する人だから、一層そういう危険があるのじゃないかと思う。——ところが僕はいま上海に本務があつて、休暇も実は一週間しか取っていない。下手にここで動いて、上海の和平交渉に差し障りを起したくない。僕は風見さんへの感謝という気持から、東京にはまだ四五日はいるが、今の頼み事は他の人に是非やっけて貰いた

す」

ところが、二日ほどしてまた同じ顔触れが私を訪ねて来た。「どうも、この前はああ云って断わられたが、その後も近衛さんの気持がさっぱり掴めない。まことに濟まないが是非近衛さんの私邸の方へ出かけてくれ」という懇望である。それで私も、

「それならば仕方がない、行って見よう。しかし、風見さんが承知のうえだという事でなくては

困る。それと、誰か一人二人、僕と一緒に来てくれるならば行こう」

という条件を出した。しかし私としても、近衛首相が今度の組閣では第一次にくらべると趣向をガラリと変えて、国内に強まりつつある右翼的な一方の風潮に歩調を合わせようとしている態度に対して、ひそかに強い批判を抱いていた。やはり有明館の連中の云っているように、公卿数百年の伝統である外部勢力の不均衡を利用すると批判されても仕方がない。——これが私の近衛邸へ出かける気持になった直接の動機である。

しかし、誰も人の家に押かけていきなり注文をつけるという事は苦手だにがてと見え、その晩遅く近衛邸に着いた時は、他の同行の連中は急に用事が出来たような振りをして廊下で立ち話をはじめてしまい、結局気がついて見ると、私ひとりが近衛さんの寝室に入る破目になっていた。近衛さんはひとり白緋の薩摩上布を着流して、素足のまま寝台のうえに寝ころびながら、英文の書物を気楽に読んでいた。

「よう。久しぶりだね。今は東京？」

近衛さんは、私を見るなり声をかけた。

「実は上海にいたんですが、風見さんの仲間から電報を受け取ったので、一週間ほど暇をもらってやってきました。お疲れのところを夜中わるい時間にあがって相すみません。はてな、他にも二三人一緒に来ているのですが、廊下でぐずぐずしているのかな」

近衛さんは鋭敏な人だから、すぐ意味が分ったようだ。そして、
「他の者は来ないでもいいよ」

と云った。

私は風見の門下生が連日有明館に集っている話をして、同時に風見の入閣の問題を鄭重に頼んで見た。

「ああ、そういう事か。別に深い意味というほどの事はないが、第一次内閣はどうも左翼青年の集りのようだったという批難も出ているので、今度は右翼の方の人々を抜擢しようと思っ
「んだ」こんな卒直な話を近衛さんは淡泊にしてくれた。「有明館にいる連中の騒いでいるのは、きつとその事なんだろう。一体どんな批評をしているんだ」

私はただ笑っていた。

「大体、どんな事を云っているんだい」

「まあ、あなたから見れば勝手な話だとはお思いになるでしょうが、みんな、やはり冷たい人だ、などと云っているようです」

やはり、このひと言が悪かった。私は近衛さんの顔色が一瞬変わったのを見て取った。しばらくして、近衛さんは非常に不機嫌な声で吐き出すように云った。

「風見君をどこかへ一枚入れて置けば、それで文句はないんだろう」

「どうか、そうお願い致します」

私は鄭重に頭を下げ、寝室を出た。

二日ほど経って、風見氏は司法大臣に任ぜられた。

それから更に一兩日後の事だが、私は原田熊雄の家に急に呼び立てられた。当時原田は長年にわたって元老西園寺公爵の秘書を勤めていた。原田の父君は森鷗外の少壮留学時代の唯一の心友であつて、母系にはドイツ人の血を受けていたから、原田は明朝卒直、生活も氣質も交際も万事が西欧風であつた。いつも若々しい白哲の丸顔で、中年からやや肥り過ぎの氣味があつたが、およそ陰影というものに縁のない男であつた。世間の一部では原田を「西園寺さんのおかげで偉くなった男」と思い、そのように取り沙汰もして、やや喜劇的な存在のように扱っていたが、私はその評価に反対である。およそ原田ほど西園寺に忠実に奉仕し、そして西園寺というものの当時の重要性を通じて国に奉仕した者も少ない。なるほど原田は生れながらの卒直居士で何事も齒に衣を着せぬ主義であつたから、その意味では各方面に相当の被害者も出たであらう。また彼は、「電話を背中に背負っている」などと陰口をきかれるくらいに朝夕軍人や外交官との連絡に つめて、いちいちそれを西園寺に報告していたから、自分の意見のない軽いやつだと冷嘲する者もあつたらう。しかし何者も原田の誠実を否定する者はなかつた筈である。万一にも原田にむかつて嘘を吐き、原田の世話好きな暖かい一面を悪用しようとする者があつたとしたならば、その男は何よりも先ず衆坐の面前で原田その人から、「貴様は俺に怪しからん事をしたな」と直接一喝を喰らつたであらう。原田はこんな時に他人に後始末を依頼するような男ではなかつた。永年原田と交際している者はみな次第に原田のこの流儀を知つて恐れた。原田は近衛とも木戸とも学習院の学友であつたから、この流儀で二人と毎日のように氣楽に落ち合い、そして遠慮のない苦言を呈していた。原田の言動には子供の自由画のような幼稚な外見と、ま的をピタリと射る純粹な觀

察とがあつた。多くの人はその幼稚な外觀の方を笑い、その觀察の純粹の方を低く評価した。原田はまた近衛や木戸のような大人が隠して置きたい事柄をも、ズバリと見たままをしゃべつたりした。こんな風で、近衛や木戸にとって原田は時おり閉口させられる友であつたが、しかし無くしてはならない大切な友であつた。近衛や木戸には出来ない一つの役割が原田にはあつた。この原田も敗戦に近い日に、平和主義だという理由で憲兵の日々の見廻りを受けながら、病床で国を憂えたまま死んで行つた。しかし原田は自分の生涯をかえり見て悔はなかつたらうと思ふ。原田はまことに神に愛される人間であつた。

話は外れたが、私は原田に呼び立てられて、早速彼の家に出かけて行つた。ところが原田は私を見ると、いきなり例の卒直さで、高飛車にこう訊ねた。

「おい、君は自分で逋信大臣になる運動をしたか」

あまり藪から棒なので、最初私は冗談かと思つた。

「え？ ついこの間逋信参与官をやめたばかりで、今度は一足飛びに大臣ですか。少し早過ぎやしませんか」

こう答えたところが、忽ち昔から馴染の雷が落ちて來た。

「おい、今日は真面目だぞ。貴様に洗いざらい忠告してやる」

「はあ、冗談じゃないのですか。それなら真面目に聞きましょう」

「近衛の話だと、君は西園寺公一をそそのかして、外務大臣に松本重治、逋信大臣に犬養健と推

薦状を書かして、自分も公一と一緒に近衛邸へ行ったというじゃないか。近衛が随分怒っていたぞ」

「近衛さんは自分でその推薦状を読んだというのですか」

「そうだろうと思う」と、原田は少し曖昧に答えた。「何しろ近衛は馬鹿に怒っていたから」

「これは熊さん、よく考えて見て下さい。僕は政友会所属の代議士ですよ。政党というところは大臣を新内閣に推薦する時は、総裁か総裁代理としての幹事長だけが総理大臣に候補者を申し出る役をするのですよ。いろいろ運動はあるでしょうが、結局のところ、代議士が自薦出来る筈のものじゃありません。僕は代議士になってから参与官に推薦されるまでにまる七年かかっていました。それをついこの間辞めたばかりじゃありませんか。この事から考えても、その話の嘘だという事がお分りでしょう。まして公ちゃん(西園寺)が政党の人事に嘴をはさむ筈がありません。公ちゃんは若い、イギリスで勉強しただけあって、そういう事には非常に慎重で、理智的ですよ」

「じゃあ、松本重治を外務大臣に推薦した事もないというのか」

「ありませんね。そう云えば、近衛さんと二人きりで居た時に、『松本を内閣書記官長としてどう思うか』と聞かれた事がありました。それで僕は、『松本なら適任だ。どの方面とも摩擦はないし、第一印象がフレッシュだ。それに中国との和平運動の張本人だし、僕としても一番ありがたい』と云ったのです。近衛さんは黙って考えていました」

「ふむ。もう一つ。——君は多田という軍人を使って、政局の様子をさぐらせた事があるか」

「まるで訊問ですね。多田というのは参謀本部の少佐のことでしょう。これは公ちゃんも友人で

す。至極善いやつなんですが、われわれの仲間では多田教授とか仏の多田さんとか云う渾名で呼んでいて、彼の日華和平の原則論にはいささか当てられ気味なのです。とても、とても、人に会って政情の匂を嗅ぐなどという器用な事の出来る男じゃありませんよ。あなたもほんの四五分でも会って御覧なさい。すぐ分りますよ。——これも近衛さんからの注意ですか」

「まあ、そうだ」

「驚きましたね。一国の総理大臣が少佐の事を気にするんですか。情ないですな。——それで、仮りに多田にそんな事をさぐらせたとしたら、私の目的はどういう所にあるんですか」

「それは君が岩畔大佐(陸軍省軍事課長)のロボットになって、毎日組閣の様子を彼に知らせているという事になっているんだ」

「ああ、それで今日の話全部がまったく嘘だという事がハッキリしましたな。私は岩畔氏とは口を利いた事ありません。それどころか、岩畔氏と私たち中国問題関係者とは妙な事から、今ひどい対立をしているのです。というのは、私たちは中国人所有の工場や商店や住宅はすぐにも返すという約束をして、この文書は政府の代表として署名が行われてあるのです。ところが岩畔氏は、広東にある一番大きな製紙工場の設備をそのまま北海道に移したい、そして共産主義を転向した二人の知人にこれを與えて元氣をつけてやりたいというので、大変紛糾していたところが、とうとう強引に機械全部を北海道に移してしまつたのです。そんな訳ですから、今は岩畔氏に電話で連絡するどころの話ではないのです」

「ちよつと話が違うようだね。——しかし君はどうして松岡洋右から『悪党だ』などと云われる

んだ。松岡は近衛にそう吹き込んでゐるぞ」

「それは松岡に聞いて下さい。私には交際の無い人です。ただ一つ、思い当るのは、私の死んだオヤジが松岡を非常に低く評価していた事です。これにはいろいろ面白い話もありますが、とにかく、気の毒なくらい松岡を認めていませんでした。それで私はたびたび松岡の面会申し込みを断るイヤな電話口の役をつとめたものです。——しかし、今に見ていて御覧なさい。近衛さんは『松岡の褒める男』をかえって警戒するようになりますよ。第一、あなただってそうでしょう」

「そうすると、この間うち、近衛は君とまったく没交渉だったのか」

「それも違います。はじめのうちはちょいちょい用事も云いつけられましたよ。たとえば近衛さんから『このメモを土台にして新内閣の外交方針を作文して見ろ』と云われて、主旨を書いた紙片を渡されたこともありすが、読んで見ると、それは日独伊三国同盟強化の方向へどんどん進んで行くような方針なので、どうも僕の考と合わない気分で、僕は文章がうまく纏らないような振りをしてそのメモをお返ししたのです。さぞかし頭のわるいやつだと思われたでしょう」

「よし分った」

と、原田はようやく機嫌を取り直して来た。

「しかし君も、仮りに人の誤解を招くような行動は慎しめよ。みんな、君についての苦情はおれのところへ云って来るのだから」

「その点はすみません」

「近衛にはおれからもよく云っておくよ」

「いや、その方はどうか御無理のないように願います。僕もこんどは近衛さんという人がよく分りました。近衛さんは、あの水臭いほど口の堅い牛場のような忠義な秘書官たちをまで疑って、あすこから軍部に秘密がもれたと云って、当人を驚かせたじゃありませんか。僕なぞを疑うのはむしろ当然ですよ。僕の休暇は明後日で切れますから上海へ帰ります。どうかひと夏お大事に」

しかし、私の憤懣の顔いろを見て気の毒になったのか、原田は懐中時計をちょっと見ながら私を呼び止めた。

「まあ、そう怒るな。なんにおれに怒る事はないだろう。あいにく今夜はこれから人と会う約束があるが、明日の夜、ちょっと寄ってくれ。一緒にめしを食おう。それに、汪工作のことで少し聞く事もあるんだ」

翌日の夕方、私はまた原田の家に出かけて行った。原田は団扇を手にしながら、縁先きで浴衣姿にくつろいでいたが、私の顔を見ると、いつもの卒直さで、いきなり用件の中心に触れて来た。

「やあ、今日来てもらったのは汪精衛のことなんだ。実は——怒るなよ——僕らは初めからあの工作を謀略だという風に教わって来たんだが、本当のところはどうなんだ」

「その事は私も知っていましたよ」私は笑いながら、こちらも真実のところをこの先輩に打ち明けた。「あなたは正直な方だから、僕の前でも時々汪工作のことを『謀略、謀略』と口をすべらしていましたよ。それで僕は、『ははあ、熊さんの事だから、僕の前だけに体裁のいい言葉が

使えないのだな』と、あなたを本当に真直ぐな人だ、と、思っていたんです」

「何だい。変なところで人を褒めるんだな」と、原田は苦笑していた。「それで、もしも本当に謀略ならば、友人の君がそんな事に深入りしてはよくないと思って、君に聞いて見たわけだ。ところがこの頃興亜院などが急に汪を虐待しているという噂を聞くと、やはり謀略が本当だったのかなとも思うのだ」

「それは本当にありがとう。——しかしアレですか。そういう事だと、西園寺公もあの工作を謀略と、思っておられるのですか」

「実はそうなんだ。そういう風にわれわれは初めから思い込まされて来ているんだ。だから公爵はこの問題については機嫌があるのだ。僕にも何度か、『謀略などというものは文明国にする事じゃない。近衛にそう云っておいて下さい』と叱言を云われているのだ」

「驚きましたね」

「そればかりじゃないよ。——これは絶対に君だけの事にして貰いたいが——お上にも初めから謀略として御説明がとどいているのだ。ところがお上はああいう真直な方だから不賛成で、『謀略などというものは、うまく行かないのが普通なのだ。成功したら却っておかしいのだ』と云っておられるそうだ」

「それは大変な事ですね。上層部がそんな空気だと、自然近衛さんの態度にもどこか現われて来るでしょう。そうになると、興亜院の鈴木（貞一）少将などは近衛さんとちよい飯を一緒に食べたりしている仲だから、夙うにそういう気配を見抜いていますよ。あれは非常に鋭敏な人で

すからね。なるほど、それで興亜院が汪を冷たく扱う背景が分りましたな。——これで、汪の信用はますます落ちる、信用が落ちると冷遇される、という訳で、悪循環が際限なく続きますね」

「しかし汪が実力を失くしていることは事実だろう」

「そりゃあ、誰でもあんな風に扱われれば実力は低下しますよ。——しかし謀略々々というが、熊さんも覚えておられるでしょう、事変の最初に石原莞爾が参謀本部の作戰部長だった時のことを考えて御覧なさい。あの時は石原は、『日本は中国などと戦争している時じゃない。すぐに中国本土から一兵残らず引き上げさせる。近衛も飛行機で南京へ飛んで行って蒋介石と直接話をつけるがいい』と云って、近衛さんも一時は本気でその話に乗って飛行機まで用意したじゃありませんか。あの時は謀略じゃなかったでしょう。——だからこそ、中国政府のアジア局長をやっていた康紹武も日本へ乗り込んで来たし、私などもこの運動に首を突っ込んだんですよ」

「それはそうだったな。——どうも持って生れた性格だろうが、近衛はそのわりに汪に熱心になった事がないな。いつだったかな、あの汪が蒋介石と最後に衝突して仏印に脱出して来た事があつたらう。——あの時に汪が脱出の日を二度変えた事があるね。すると近衛は僕に、『どうせ中国人の事だ。これは汪に一杯喰わされたかな』と云ったものだ。僕はその時、近衛は本当は中国人を根っから信用していないなと思ったな」

「そういう冷淡な態度が汪精衛の命がけの和平運動を弱くしてしまつたんですよ」

「しかしここで愚痴を云つても始まらないよ。一体どうすれば中国問題は片が付くのかね」

「そりゃ、平凡な話のようだが、やはり汪に対する約束を実行する事ですね。そして中国人の顔

の立つような平等な条約を結んで見せる事ですね。これは実は汪に対してするのではないのですよ。中国国民に対してする事になるんですよ」

「ところが、汪を条約のうえであまり優待すると蔣が気をわるくする、という者がある。それでは全体の和平が結局出来ない、という者もある。平等な条約は蔣が出て来た時に結ぼう、汪じゃ勿体ない、という者もある。この点はどうなんだ」

「一体、最初に『蔣介石を相手にせず』などと云ったのは誰なんですか。そして汪に向って、『日本は蔣を相手にしないから、是非代りに出馬してくれ』と頼んだのは誰なんですか」

「僕に怒っても仕様がなによ」

「いや、どうも失礼しました。まあ済んだ事はそれとして——なるほど日本がいま汪を虐待して見せたら、蔣介石は溜飲が下るでしょうな。ザマを見ろ、と腹のなかで思うでしょう。しかし『明日はわが身』という事がありますからね。今の日本の汪に対する冷たい態度は、他日蔣介石をもう一度相手にする場合に、きつと差し障りになりますよ。仮りにこの次ぎに蔣介石に直接呼びかけて見ても、蔣は汪の手近かな実例を見ているから、なかなか用心して乗って来ないでしょうな。因果応報というやつですよ」

「それに乗って来させるのに、全然方法はないものか」

「たった一つありますね。第三国の仲裁ですね」

「それは駄目だよ。近衛はドイツの仲介で失敗したし、宇垣はイギリスの仲介で失敗したから。——ことに宇垣の場合はその事で陸軍と右翼からこっぴどくたたかれて、結局失脚の原因になっ

たからな」

「しかし、今の蔣ではとても独りで国内の抗戦熱を押える事は出来ませんよ。彼は西安事変の時に共産党に抗日を約束してしまっていますからね。——それが、ここで第三国の仲介という事になると、蔣としても戦争をやめる口実が出来てくる訳ですよ。そういう意味から云っても、第三国の仲介というものが必要だと思えますね。そして第三国が保証人になって、汪と蔣との合体をやらせる事ですね。——まあ、日露戦争のおしまいの時の例を思い出した訳じゃないが、アメリカなんぞはこの際、仲裁者としてどうなんですか。これまでのイキサツがないだけに、面白いのじゃないですか。あなたは大切な地位にいる人だから、ひとつこの問題を真剣に考えて見て下さ」

私はその翌日、上海にむかって飛行機で帰って行った。

街の反感

私が南京路に引越した事を一番喜んだのは、わりに近くのフランス租界に居付いている康紹武であった。彼は早速私を問題の場所——シロスへ招いて来た。シロスは上海でも一二を争うほど繁昌しているナイトクラブである。電燈をわざと薄暗くしてある長方形の大きなホールにはガラスの金魚鉢と花で飾った踊り子の座席が楕円形にならんでいて、その花を浮かせた水鉢には一つ一つ豆電燈が俯いて点っている。浮草の下を赤い金魚が動きたびに反射する仕掛けである。そこ

へ着飾った踊り子たちが微かな照り返しを顔の半面に受けながら、与えられた座席のかたちのおりに円陣をつくって居らんでいる。

私が玄関に足を踏み入れると、かねて打ち合わせてあったのであろう、ボーイ長のような男が飛んで来て早速康のいる座席に案内した。そこにはすでに紗の服を着た二十五六とも見える女性が雑談の相手をしていた。張偉珠チャンウエイツという名で、無錫むじやくの生れだと云う。その落ち着いた物腰から想像して、私ははじめのうちはこの女性を客席係の主任かとも思ったが、だんだん聞いて見ると、これはおもに謝自身の客人を接待する古参の踊り子であった。偉珠はそのまま康の隣にゆったりと坐って、その頃盛り場で流行したクレーヴン・Aという名の煙草を静かにのみながら、上海でのあちこちの出来事や汪一派の噂などを気軽に持ち出していた。どうも謝が市中の評判を私の耳に入れる手段として伶俐な偉珠を使っている様子がかがわれる。

偉珠は最近募参のために故郷へ帰った時の話を聞かせた。この無錫というところは南京上海間の経済上の要所で、昔から中国第一と云われる絹を生産している小都市である。しかしそこへ帰省した偉珠の話をきいて、私は驚いた。近頃上海の北站（北停車場）の改札口に日本の憲兵が台を持ち出してその上に乗り、細い竹の杖を携えていて、脱帽しないで通る中国人の旅客の頭をいちいち叩くという話である。云うまでもなく、これが民衆の反感を一身に集めている。

偉珠の話はそれからそれへと移って行ったが、ふと、これも最近帰省したおりに、父親に今年はるまきの稲の出来具合を聞いて見た噂をしはじめた。やはり着飾ってはいいても農村の娘である。ところが父親の云うには、日本の兵隊が耕牛をほとんど全部食用に使ってしまったので、今年の春時はるまきに

は土の掘り返しが深く行かず、この分では秋の凶作が案じられるという事だ。新四軍（共産軍）の将校さんも陰ながら気を揉んでくれているが、何しろ牛を連れて歩いたのではゲリラ戦も出来かねるので手助けも思うままにはならない。——もしも汪精衛が本当に困っている人々の身の上を思うならば、日本軍に談判して牛ぐらいは取り寄せるだけの政治力を見せてもらいたいものだと、村ではみんなそう云っているらしい。こんな話であった。

それでは市内まちなかの噂の方はどうか。俗に「泣く子も黙る」という汪精衛の秘密警察の首領の丁黙邨や李士群の評判はどうか、と突っ込んでたずねて見ると、ああいう恐ろしい人たちの噂をすれば、いつ誰がどこで立ち聞きしているかも知れないと云って、みんな恐れ戦いているが、何でも李士群夫人葉吉卿の虎の威を借るような振舞が大ぶん噂にのぼっている。最近李夫人が上海の名流と云われる社交界の夫人たちを茶会に招いたのだが、みな後のタタリを恐れて集まったところが、李夫人はその来客のなかで一番立派なダイヤの指輪をはめている若い婦人に近づいて、その指輪を抜かせ、しばらくのあいだ自分の指にはめて眺めていたが、やがて帰ろうという間際に、「謝々シヤンヤン農」と上海の方言で礼を云ったまま、その所有権はあっさり李夫人に移ってしまった。これが大恐慌を来たして、それ以来は李夫人の招きと聞くと、みな貴金属を家に残したうえで、参会するという噂である。

私にはこの偉珠の話のどれもがひどく興味をそそった。別に偉珠には義理はないが、偉珠の背後にいる青帮の有力者の謝大班に対しては、梅華堂の仲間がいかに街の人々の不便について骨身

を惜しまず世話をするかという事を知らせて置くのが、和平運動のために大変効果があると、私は考えた。——四五日して、私は次手もあつたので日盛りの北駅の玄関をくぐった。そこには先着の矢萩中佐が私を待ち合わせてくれた。矢萩中佐は前から熱心に華中鉄道——南京上海間の鉄道——の中国人による運営を研究している当人であつたので、実は私が北站まで連れ出したのである。二人が改札口の広場に入つて行くと、なるほど日本の憲兵が台を持ち出して小高いところから通行人を見わたしていた。一般の乗客も、しかし心得たもので、憲兵の竹の杖のどかぬ辺を歩いて改札口へ出入りしていた。そこへいやに真新しい夏帽子をかぶつた私たち二人がすぐ台の傍を通るのだ。挑戦的にすら見えたかも知れない。たちまち私の帽子の額のあたりを強く打つ音がした。同時に、憲兵の右腕は矢萩の手でねじ上げられていた。

「何をするか」

と憲兵は怒鳴つたが、

「俺は矢萩中佐だ」という声を聞くなり、台を飛びおりて不動の姿勢をとつた。

「きさまはどここの隊の者か。姓名を名乗れ」

見物人が周囲に押し寄せて来ているので、憲兵は声を出して名乗る訳にもゆかず、震える手で軍隊手帖を矢萩にさし出した。

「こういう事をするのは誰の命令か」

憲兵は真赤になつて黙っている。

「きさまの手帖に名前の書いてあるこの隊長はわしの友人だ。親の心子知らずとはきさまの事だ。きさまは国策を誤るやつだ。何分の沙汰のあるまで、謹慎しておれ」

憲兵は消えるようにして停車場の外へ駈け出して行つた。矢萩は私を振り向いて、

「ついでに、客車の様子も見て行きましょう」

と誘つた。しかし、これもまた矢萩の予感が的中した。二等車はすでに満員だったが、座席は全部日本人が占め、中国の女子供老人——それに名の知れわたっている汪派の官吏までも——立つたままであつた。矢萩は一人一人日本人の乗客に事情を話して席を譲らせた。すぐには話がかぬ者もあつたので、矢萩と私がプラットフォームに降り立ったのは発車直前であつた。

「どうも、いちいち骨が折れますな。しかしこりゃいい参考になりました。それに、直接利き目がありますな。これからも時々御一緒にここへ来て見ましょう」

元氣な矢萩は急に列車の蔭のなくなつてしまつたあとの炎天にさらされて、汗を拭きながらも、満足そうであつた……。

私は矢萩を風とおしのよい駅内の食堂に案内して、氷其淋(中国風のアイスクリーム)でねぎらいながら、街の噂にくわしい彼にそれとなく李士群夫妻の行状を訊ねて見た。ところが矢萩の話では、これがすでに相当に街なかの井戸端での評判になつていふという。そのうへ悪い事には、こゝういふ出来事が噂に伝わり、街の反感は結局真の実力者——つまり李士群の背後にいる日本軍に向けられる。そして前の日の事件はすぐに翌日の市場の賑やかな話題になる。いかにも日本の

憲兵隊が李士群を甘やかして、おまけに李から分け前でも納めさせているようで体裁がわるい。「これは一体どんなものでしょうな」と、何事にも一家言を持つている矢萩も、この問題は持てあましている恰好であった。「いっそのこと、日本側の憲兵に全責任を持たせて、そのかわり憲兵隊の軍律をうんと厳しくした方が、問題がすっきりと単純化していいのじゃないですか」

「実は僕もその意見なんだが——大体、責任のありかのハッキリしない仕事を、二つの国で持ち合っている所に問題があるように思うのですが」

「そうでしょうな。卒直に云うと、汪さんも影佐さんもちょっと早まったように思いますね。」

『中国人の命は中国人自ら護る』という美名に飛びつき過ぎたきらいがありますな。殊に直接会っても見ないうちに、仏印から丁と李に、こういう大切な仕事を委嘱したというのが間違のもとですな」

「それは僕も共同責任を感じているところなんだが」

「いや、あなたを責めるわけではありませんよ。しかし特務警察というところ——これは名前のとおり大変に特殊な仕事ですからな。利権、中傷、賄賂、密告。——毎日イヤな事ばかりが机のまわりに集まって来る仕事ですよ。それを日本側と中国側と寄り合い世帯のような形で裁いて行こうとすると、誰しも人情、わるい事の後始末のほうは片方の国へ押しつけようとする結果になりがちですからな」

「もう一つの問題は日本側の憲兵隊なんだが、これは正直のところ、評判はどうなんですか」

「いや、なかなかいいですよ。ことにあすこには林清澄という男が、一番事故の多い滬西方面

面(西上海地区)をしっかりと押えているようですからな」

「しっかりとしているが、何でも大分変わった人物だというじゃありませんか」

矢萩が口にした林清澄というのは憲兵中佐で、滬西分隊の隊長である。事実上の上海での憲兵活動の中心人物だ。これは昔の噺に出て来る隠士のような気分の男らしい。何でも毎朝暗いうちに起きて神前に祈りをささげ、それから始めて仕事に取りかかるといふ噂である。自分の仕事は人の日々の生死にもかかわる事なので、過ちのないように神に祈りをささげるのであろう。その林のところへ、影佐の心づかいで、梅華堂から協力のために出向いている男に塚本少佐がある。これはすでにこの物語にも登場して来ている人物である。塚本は林のように敬虔な宗教家の型ではないが、しかし温い気持の男で他人の身の上への察しも細かく、誰にも親しみ易くて評判がいい。そして何よりも影佐に尊敬の念を抱いている。それゆえ、われわれがなまなか世間への一時の体裁などを考えないで、こういう清廉な人物にはっきり責任を負ってもらった方が、結局は町の住民の朝夕の暮らしのために幸福であった筈だ。それを矢萩の云うとおり、汪も影佐も人物の実地試験も行なわれないままに、特務警察のような特に細心を要する仕事を、丁と李のふたりに急いであずけてしまったのは、結果として大失敗であった。勿論私もそれを迂濶に傍観していたのだから、責任を分担すべき一人に違いない。

私は、矢萩とこの複雑な点をよく研究する約束をして別れた。

中国農村の実態調査

それから二三日後のことである。私は風一つない炎天下の分りにくい小路を、何度も通りがかりの人に尋ねながら、やっと満鉄（南滿洲鐵道会社）の調査部の古びた建物にたどり着いた。私の用件というのは江南地方の農民の使う耕作の水牛のことを調べて貰おうという事であった。ひどく埃をあげた玄関のわきの花盛りの百日紅の幹では蟬がめずらしく鳴いていた。内地の蟬と少しちがうようだが、それでも私は久しく忘れていた東京の真夏の日を思い出して、幹の蔭に立ちながら少時の間ひと息ついていた。

私もかねてから、耕作の水牛の仔が遠い奥地の方からこの揚子江下流のマーケットへ出て来るといふ事までは聞いていたが、それから先きが分らない。日本軍は勿論のこと、旧国民政府の農林水産部にもそんな書類は残っていない。私はいろいろ聞いて歩いたあげく、半ばあきらめながら、最後にこの満鉄の調査部を訪れて見たのである。すると外崎と名乗る中年の男が受付口へ出て来て、「ああ、その書類ならここにありますよ」と、至極あっさり教えてくれた。私はその篤学らしい人柄を見守って、「やれやれ、助かった」と、張りつめた気持の抜けた思いであった。現金なもので、私は調査事業というものの有難味を今さら身に沁みて感じた。私があまり喜んで見ると外崎は好感を抱いたのか、書類全部をそのまま三四日貸してくれる事になった。外崎の話によると、仔牛は陝西省の山奥からはるばると牛買いに率いられて河南省の雄大な平

原を通りぬけ、次第に揚子江流域に近づきながら、最後には揚州あたりの対岸で市場に売り出されるという事だ。だんだん聞いて見ると、この外崎の父君は衆議院議長にも選ばれたことのある東北出身の知名人だが、若い外崎もやはり東北人らしい地味なねばり強さで、人のあまり省みない農村調査の仕事に打ち込んでいる様子である。で、当面の用事はこのように案外簡単に済んでしまったのだが、私は何となくそのまま別れなくなかったので、思いついたまま砂鍋鴨子を食べさせる緑楊邨という佳い名の小菜館に外崎を誘って見た。これは菜館の名の示すとおり、揚州の名物料理である。

外崎はもう足かけ七年ばかり、農村の実態調査を倦きずにつづけているという。彼は農民の生産や婚礼や葬式の実態、栄養や収支の実態、小作料や金利の実態——何でも現場に出かけて調査をしているのだ。そしてそのような仕事を続けているうちに、云うに云われぬ親近感を中国の農村人に対して抱くようになってしまった。これは年若い日本人の研究員や調査班の者が一度はみな罹ってしまう智恵熱のようなもので、その罹病率はほとんど永年の間高い度合いに一定している。よほど中国の農村の風物人情には独特な魅力が潜んでいるのだろう、と自分でも笑っていた。

「時に、あなたにその耕牛の話をしたのはどこの土地の人ですか」と、外崎は思い出したように最初の話に戻った。

「何でも、無錫の近在の生れの人だそうです」

「ああ、それならばよく分りますな。あの辺は揚子江の洪水の被害地区に入っていると、百姓たちは田地を二カ所に分けて耕作している所が多いのです。河の近くと、水面から離れた小

高い丘と——つまり、洪水に出会った場合の危険分散をやっているのですな。それで、一層あの辺は牛の労力が必要なんです。これは何百年からの苦い経験から出ている事なので、政府の指図は一つも受けていないのです」

「つまり、何事も農村のことは自治が土台になっているようすな」

「そうなんです。面白い話が沢山ありますよ。あの辺は世界一と云われた有名な絹の産地でもあります。裁判なども村の茶館でやってしまうのです。その方が政府の裁判よりも常識にかんたいい結果が出るらしいですね。実は私はこの間その無錫の近くの榮巷鎮というところへ出かけ行つて、村の保衛団の団長の家に十日ほど厄介になりながら、桑の葉の値上りが養蚕農家の家計に及ぼす影響を調査していたのです。そこへ偶々桑の葉泥棒がつかまりましたよ。夜警団が現行犯をつかまえて来たのです。いや、村中は大きわざで焚火をたいて徹夜でしたな。ところが面白い事に、その泥棒は村裁判の結果、罰として村芝居を招く費用の半額ほどを仕払うことになったのです。もっとも、裁判と云つても、村の連中が例の茶館で茶を飲みながら自治裁判をやるわけなんです。何だか会費の割り当てを相談できているような、至極のんびりしたものでしたよ。とどのつまりは、その泥棒が百五十元を払う事になり、あとの足りない百元ほどは桑園の主人と養魚場の主人とが割前を出して、端午の節句に芝居の一座を招くことになったのです。私は芝居一つで村じゅうがあんな昂奮状態に巻き込まれるとは夢にも思いませんでしたな。旧暦の五月も一日を過ぎると、もう待ちあぐんでいたように芝居小屋の外に飲食店や賭場まで臨時に出来てしまつて、学校も勿論休みになります。そして近所の村からのお客でどの家も一杯になり、

夜は人の寝る隙き間もないくらいです。私などもやつと身体一つ横になれる程度でしたよ。しかし実に活気のある三日間でしたな。おまけに、こういう村の裁判も村の芝居も、日本軍の戦線とわずか数里しか離れていないところで悠々とやっているのですから、或る意味では彼等の生活力は強いですね」

「そりゃあ、いい役得でしたな。しかし中国の農村の調査というんでは、どうやら楽しめない事の方が多いでしょう」

「そうですね」と、外崎は一瞬暗い表情をした。「やはり退職軍人や退職官吏が地主をしている土地へ行くと、イヤな事に出会いますね。たとえばあの蘇州に近い米どころの崑山です。この崑山一帯では賑房と云つて、地主の下に会計係を置く習慣があるのですが、この賑房は毎年秋になるとキツカリ三度、小作料の催促をやります。そして小作料の支払が遅れると、小作人を容赦なく捕まえて押租所というところへ監禁します。警察官に給料を払って追租委員の仕事を公然と兼務させているところもあります。いづれや私が金陵大学の農村調査班と一緒に崑山へ行つた時には、丁度その押租所に男が十人、女が五人ほど捕まっていましたよ。なかには亭主が逃げたので細君が身代りに捕まっているという珍妙なものもありました。当然、泣く泣くワイロが行われていきます。しかも押租所では食事の差し入れを禁止しておいて、看守人が食べ物の押し売りをする事が分りました。捕まっている者はその押費という食費のようなものを払わないとひどい目にあうし、押し売りされる食べ物は何の三倍で、おまけに先払いですよ。甚しい場合には追租委員が鞭でもって公衆の面前で刑罰を行ないます。これはほんの一例ですが、結局農村を破壊して

ゆくのは軍閥官僚の地主ですね。私たちもこんな調査をやっていると、世界一に貧しい中国の農村生活を、将来誰が一番早く手をつけてくれるかと、ついその事を真面目に考えるようになりま
すな」

私はかつて箱根で議論をした時の臼井中佐の話を外崎に受け売りして見た。つまり臼井の調べたところによると、揚子江下流に進出して来ている新四軍（共産軍）が農村で豚や鶏を食用につか
った場合には必ず代金を払うし、器物を借りた場合はちゃんと元の場所に戻すばかりでなく、女
のいる前では決して裸にならず、大声も出さないようにしていると云って、軍律の厳しさに驚い
ていたという話を紹介して見たのである。

「ふむ。それは本当の話です」と外崎が云った。「その参謀本部の将校さんはよく調べていま
すね」

「この臼井という男は、優秀な兵士の供給源としての農村という事を研究している男です。日本
でも農民があまり貧しいと、農村出身の若い将校や兵士は政治を憎んで、あの二・二六事件のよ
うな革命に近い事をやってのけましたからね。一体、この共産軍の軍律というものはどうして生
れたのですか。やはり延長四千里にわたる瑞金から延安へのあの大退却の時の苦しい経験から生
れたものですか」

「やはりそうでしょうね。見ず知らずの他人の家の前に立って一夜の宿を乞う時に受ける人の情
の有り難さというものを、当時の幹部がしみじみ体験したのでしょうな。——それに今では、共
産軍はその当時よりずっと農村に対して条件がいいですからな」

「それはどういふ点ですか」

「つまり、共産軍の将校たちが、将来の農村の事を、土地の若い小作農と煙草休みの時などにし
んみり話しあえるという点でしょうな。昔の大退却の時代にはそれどころじゃない。ひと夜明け
れば朝は大急ぎで逃げるのが精一杯でしたからね」

「そうすると、今では共産軍の将校の話を、農村の青年は本気で耳を傾けるといふ所まで来てい
ますか」

「少なくとも、来つつあるでしょうな。そして、もしも暮らしたい農村が本当に実現出来るもの
ならば、全力をつくしても農民の手で手伝おうという気運が強くなって来ているでしょうな。——
世界一に高い農村の借金の利子とか土地所有権の問題とかと一緒に研究しながらね」

「そうなるよ、自然、農村の若い者は共産軍のゲリラ隊に入るといふ訳ですね」

「そうです。そのうえ、臼井さんという将校の云われたとおり、息子が共産軍に籍を置けば、政
府軍のように遠くの土地には連れて行かれないばかりか、両親のそばで毎日一緒に耕作出来る。
——これは魅力でしょうな。両親も姉妹も喜ぶますよ」

「蒋介石の政府はどうですか。農村でそういう足がかりが来ていますか」
外崎はちよつと躊躇したが、

「出来ていないでしょうな。蒋介石の立っている農村の基礎というのが、さっきもお話ししたと
おり金持か退職官吏ですから。——つまり土豪劣紳というやつですよ。——この事は今あまり云
いたくないのですが」

「なぜですか」

「憲兵隊などで、そういう事を調査する私たちを『赤い』とにらみはじめていますからね。——それで私たちは難を避ける意味で、細かい実地の出張研究だけをつづけて——まあ、好学の志をせめて満足させている訳です」

「なるほどね。いや、決して御迷惑はかけません。——それで今の話に戻りますが、汪政権はその点、どうですか」

「蔣政府と同じように、駄目でしょうな。農村での基盤が蔣と全く同じですから。——もっとも、最後の土産に、思い切って農村を改革しようという気になれば別ですよ。何故というのに、汪は実力のある日本軍と握手していますから」

「日本軍にその可能性がありますか」

「先ずありませんな。日本軍にとっては、占領地というものは作戦遂行のための物資の供給所としか眼に映っていないようだから」

「それでは、この問題を将来解決するのは誰でしょうな」

「晩年の孫文以外は、みんなこの問題を忘れてしまっていますからなあ。——やはり孫文は偉かったですなあ」

「将来の仮想の話でおかしいが、アメリカの出方をどう思いますか」

「これは或いは何か手をつけるかも知れませんよ。今のルーズベルト大統領のニューディール式の農村政策ならばね。——しかしそれにはアメリカが日本と妥協するか、アメリカが蔣介石や汪

精衛と妥協するか、或いはアメリカが日本を打倒しなければ、前提になりませんからな。ただ、こういう事は云えるでしょう。アメリカがこの問題に手をつけない場合には、ひよっとすると、ソ連が手をつける場合がありますな。非常に強制的な方法で。——しかし、これ以上この問題の話は堪忍して下さい。私も憲兵さんなどににらまれないで、平和に農村の研究をつづけたいですから。——あなたも一度実地調査にいらっしゃい。お伴をしますよ」

「実は私もこの春、興業銀行から出張して来ている末弘さん——御承知でしょう——あの人と一緒に松江あたりの肥料の調査に行った事があるのです。そのおりに他の仲間におだてられて田圃に入って、日本流の苗の植付けを中国のお百姓に見せたことがありましたかね」

「そりゃ御苦労さんだが、駄目でしたらう。中国の百姓にはあのシャガむという事はとても出来ませんから。——きつと、翌日は腰が痛んで弱ったらうと思いますよ」

「いや、百姓の連中より私の方がまる一日寝込みました」
二人は堅い話から解放されて、はじめて大笑いした。別れる間際に、しかし外崎はしみじみと述懐して云った。

「あなたは大変私をねぎらって下さるが、しかしこれでも労働運動の調査班にくらべれば楽なものですよ。労働調査の方は下手をやると殉職の危険にさらされますからな」

「そういう危険はどこから来るのですか」

「現状維持の壁からですね」
「という」と

「たとえば職工の就職一つでも、工人組合と昔風の青幫の口入れ稼業とは規約や習慣が真正面からぶつかりますからな。労働条件の相異は勿論です。だから女工哀話なぞというものは毎日そこにザラにころがっていますよ。青幫のボスも突然殺されるし、労働運動の指導者も早速復讐を受けます。これを見兼ねて義憤から工業合作社の運動——所謂「工合」の運動を起して、原因不明の死に方をした外国人の篤志家も少なくありませんよ。勿論中国人の場合は数知れぬほどです。これから見れば、私たちの専門の方はまあひと息つけますね。江南の村落などで思いもかけぬところに柳や水や鵝鳥の群や——それに賑やかな人の声なぞに出会うと、思わず我を忘れて弁当の一つも開きたくなりますからな。この役得だけは絶対に誰にも譲りたくありませんよ」

私はその日のうちに南京の日本軍總司令部の経済課と汪派の農林部にあててそれぞれ耕牛移入の勸告書を出したほかに、康紹武にも外崎の話の内容を叮嚀に知らせておいた。

女間諜・鄭蘋如

米大学の人気者

上海高等法院の首席検察官に鄭鉞ていけんという人がある。地味な家庭の父で、夫人は日本人だ。この人の娘がスパイで有名になった鄭蘋如ていひんじょである。しかしヒンニョと呼ぶのはどうも語呂がわるいので、私達仲間ではこの事件が起って以来、中国の友人の真似をしてピンルーと中国風の発音で呼んでいた。

蘋如は容姿の整った利巧な女学生であった。むしろ天性の頭のよさが逆に容姿を美しく見せていたと言ってもよい。この上海というところは知つてのとおり国際都市だけあって、目抜き通りにはそれぞれ派手な店が立ち並んでいる。ことに主要道路の南京路から一步フランス租界に足を踏み入れると、ここかしこの大きい一枚ガラスのショウウィンドウをおしてさまざまの美しい衣裳やアクセサリが飾られてある。蘋如は同級の女学生と一緒に学校の帰路こういふ店頭

を眺めて歩くのが好きだ。大きいガラスの一枚向うに手のとどかない花の満開のような世界がある。しかし彼女のすぐ鼻先には、それを羨ましげに眺めている質素な紺木綿の制服姿の自分自身が映っている。——ここに次第に蘋如の心の隙間が出来て行った。そしてこの少女はいつの間にか、重慶政府の調査統計局（秘密警察本部）の総指揮者である戴笠の上海方面の責任者陳恭樹から小遣金を貰う身分になっていた。

わるい事に、丁度この頃は上海で激戦の行われた直後で、テロ横行の絶頂期であったから、檢察官の父親はことさらに忙しく、家にいた例がない。ところが母親は交戦中の敵国である日本の婦人だから、万事世間に肩身がせまい。自然、近所の井戸端会議からも遠退いている。娘についての噂もどうやら世間並みの母親ほどには耳に入りにくい。——こんな風で、蘋如が学校を欠席しがちになるすべての要因が整って行った。

この頃、近衛首相の長男の文隆君が新たに上海の東亜同文書院の寄宿舎に入ってきた。

もともと文隆はアメリカのプリンストン大学に留学していた。文隆は鷹揚快活で誰にも親しまれる性格のうえに、体格も脊丈にすぐれ、運動家として理想的な素質の持ち主であったから、忽ち学生スポーツの派手な社会で花形にのし上った。殊にゴルフでは全米の大学一流のプレーヤーとして持てはやされた。しかし肝心の学科試験の方はどうも香ばしくない。それに毎月の学費が桁外れにかかる。なるほど、プリンストン大学はエールやハーヴァードと並んでアメリカ中でも金のかかる大学として有名なのだが、それにしても少々腑に落ちない。とうとう近衛さんは東京在勤のアメリカ大使館参事官のユージン・ドウマンに面会を求めて、アメリカの三大学の学資の

標準をただして見た。あの終戦後日本の天皇制存続のために非常に働いた日本通のドウマンである。というのは、ドウマンも当時息子をハーヴァード大学に入学させていて、毎月学費を送っている事を、近衛さんは聞き知っていたからである。ところが近衛さんの話を聞いてドウマンは驚いた。「学生にそんな大金を渡してはいけませんよ」と思わず叫んだという、これはドウマンの直話である。かれこれ二人で計算してみると、文隆は少なくともドウマンの息子が毎月父親から貰っている金額の五倍か六倍か、その辺のところを懐にして、いい気持に大学の社交界を闊歩していたのだ。やがて文隆はじきに日本へ呼び戻されて、今度は上海の東亜同文書院に職員として入れられた。この学校は明治の中期に中国との親善を目的として創立されたものであって、現に近衛首相が先代篤磨公の遺業を継いで院長に推戴されているのである。そんな縁で、この文隆の監督にも、やはり書院の卒業生で、首相の声明なぞの原稿を書く中山優という学者が特に依嘱されて、一緒に書院の寄宿舎に起居することになった。

しかし、設備の貧しいこんな寄宿舎にじっとしている文隆ではなかった。これがプリンストン大学ならば自動車をあやつってハドソン河の有料の橋をわたると、すぐにもニューヨークのブロードウェイの夜の雑沓のなかに入り込めるのだ。——文隆は毎夜のように同文書院の扉を乗り越えて競馬場から静安寺路にかけての盛り場へ出かけて行った。そしてどういふ経路をたどったものか、問題の蘋如と知り合いになった。或いは敏感な蘋如の方が予てから文隆の存在に目をつけていたものかとも思われる。殊に蘋如の父親が手堅い司法官であって母親が日本人だという事実は、その流暢な日本語と相俟って文隆に格別の親しみを抱かせるには十分であつたらう。とに

かくこの二人は毎夜うち合わせてナイトクラブを次から次へと遊び歩いた。

この辺で止めておいてくれたならば、大した問題ではなかった。ところが相手が生憎人並み外れて才気の溢れた頼如である。この少女は心に湧き起る冒険心をどうにも抑えるわけに行かなくなつて来た。何しろ相手は現に自分の祖国に侵略している日本の総理大臣の息子である。このままおとなしく遊んでいるだけではどうも物足りない。それに、一度は大頭目の戴笠にも自分の腕前のほどを知って置いてもらいたいのだ。こんな心理から、頼如はとうとう文隆を誘拐する事を考えついた。それも別に暗殺するとか監禁するとかいう意図ではなく、ただ文隆を一時行方不明にして、その事実を調査統計局本部に確認して貰えばよい、という程度のことであつたらしい。——但し、事がその程度で済んだかどうかは疑問であつて、あとは上海の幹部の意嚮一つによる事である。この辺が何と言つても思慮の浅い少女の仕業であつた。——ともかくも彼女は或る晩、文隆と静安寺路のバラマウントというナイトクラブで落ちあつて、そのまま文隆を自分の懇意な友達の自宅に連れ込んだ。

翌朝、舎監は文隆の寢床が空になっているのを発見した。いや、室内の様子から見て、前夜は最初からそこには寝ていなかったらしい。騒ぎは当然大きくなり、舎監はすぐに滬西（上海西地区）の日本憲兵隊分隊に届け出た。折よくこの滬西の分隊というのは頻発するテロに備えて、特別に腕利きの者が揃っている隊であつたから、文隆の行方はじきに分つた。たしか文隆は、一日かそこらですぐに寄宿舎へ戻つて来た。近衛家でも驚いてすぐに文隆を東京に引き取つた。

ところが東京では、以前から一部の憲兵将校が文隆の無軌道振りに反感を抱いて、その在米時

代からの素行を調査していた。その結果「こういう男は、召集という形で満洲で兵役に服させよう」という事に意見が一致していた。それを、当人がアメリカでの徴兵猶予期間が切れたために改めて満洲で召集に應ずるのだという最も無難な形をとるようになつたのは、影佐の門下生である参謀本部の臼井中佐と堀場少佐の二人であつた。これで文隆は平穩裡に満洲へ出発していった。が、一時の事だと思つて出かけて行つた文隆は、思いがけず国の敗戦に直面した。そして捕虜としてソ連へ送られ、そこで十幾年かを過ごした。シベリヤでの長い監禁生活の後によりやく鳩山首相の手で行われた日ソ国交回復の副産物として、文隆の名は帰国予定者の名簿のなかに入れられたが、いよいよ帰るといふ直前、彼は急病のために仆れた。そして近衛未亡人の静まりかえつた家に帰つて来たのは白い布に包まれた箱のなかの小さな文隆であつた。父君の近衛前首相はすでに終戦間もなく、一切の国の責任を負つて荻窪の自宅で自決していた。一つの悲劇は次の別の悲劇を生んだ。

治安維持の覆面の指揮者

その後、頼如の消息はしばらく社会の表面から遠ざかつていた。ところが、この司法官の娘の大胆きわまる行動半径はわれわれの常識よりも一枚上手であつた。彼女は人もあろうに、汪精衛一派の秘密警察の総指揮者である丁黙邨の身辺に近づいて、そこで諜報活動の仕事を与えられていたのである。所謂二重スパイだ。そればかりではない。一年も経たぬうちに、彼女は丁の女秘

書のひとりのような地位を得て、いつもその自動車に同乗するまでになっていた。

昭和十四年の十二月になった。街の店はポインセチヤの紅い葉と柘ひいらぎの緑の葉の降誕祭の飾で彩られた。しかし蘋如は、もはや聖歌をうたい司祭の祈りに感涙した嘗ての女学生の心を失っていた。或る朝、彼女はジュスフィールド路七十六号にある丁黙邨の役所の部屋に入行って行って、クリスマスクリスマスの贈り物をあつさり強請ねだった。いや、強請ねだっても大丈夫、という確信を持っていた。

「今年によく働いたから、何か上等なプレゼントを下さいな」と、蘋如が笑いながらこう言った時、丁は果して気軽に承諾した。そして結局は丁がオフィスを終えて日本租界の宴会に出席する途中で、蘋如の望みのとおり高価なミンクの外套を買ってやろうと云う事になった。

この毛皮店は静安寺路から愚園路ぐえんろに入ろうというあたり、弘毅中学の正門に沿って同業の店が三四軒ある、そのうちの一番大きな店だ。西比利亞雜貨公司シベリア雑貨公司というので、よく人が間違えるが、英語の看板には立派に「サイベリアン・ファー・ストア」と書いてあるとおり、実は高級毛皮専門店である。丁は蘋如をいたわりながら車を降りてこの店に入ろうとした。

私はここで丁黙邨という男の世にも稀な風采を伝えなくてはならない。私は随分多くの人を知ったが、この丁のような異様な容姿の持ち主にはかつて出会った事がない。丁は五尺そこそこの脊丈で、發育不全とでもいうのであろうか、脊丈ばかりではない、顔も手足も何もかも小さく縮こまっている。そのうえ丁には永年の痼疾こびりになってしまった肺の病があつて、絶えず低い咳をこらえていた。それに、いつも蒼白い顔いろで、寝不足の翌日のような二重脛ふたまたまを腫らしていた。彼の体力が実は洋服のような堅苦しいものに堪え切れぬらしく、私の知るかぎり、ふだんはきま

て楽な中国服を着ていた。平常俯向きがちで、口数も自然少なく、私もついぞ丁の笑顔というものを見た事がない。

しかし、断っておくが、それは平常の丁のことである。一旦何ものか敵対者が彼に近づいたと感じると、この丁の眠そうな二重脛の眼は忽ちけわしく緊張する。そしていつ何時でも防禦と反撃の連鎖を起す用意にとりかかる。私はウォルト・ディズニイの製作した、アフリカの原野での小動物の危険予感の鋭い本能を撮影した映画を見た時に、すぐに丁黙邨を思い出した。この財産一つで、丁は陳立夫局長のもとに、あの悪名高い戴笠と並んで軍人委員会調査統計局(秘密警察)の第三処長になり、少将の待遇を与えられて来たのである。

元来、丁が首都の漢口を離れて香港へ出て来たのは、肺患の治療がその目的であった。それに抗戦の前途を悲観してもいたらしい。ともかくも、丁は後で彼の相棒になった李士群と一緒に、暗黒の親分土肥原中將を上海に訪れて、何か「仕事」を与えてくれるように頼んだものである。それが丁度、影佐と私が仏印へ急行して汪精衛救い出しをやっている留守中のことであった。こんな事情であつたから、元来丁は汪精衛の和平運動に感動してその陣営に投じたというものではなかつた。李士群の方はさらに履歴がハッキリしない。何でも、かつてウラジオストクの共産大学にいたという噂である。当時の清水董三外務書記官の直話によると、清水は最初広東の中村総領事の紹介状を持って来た李に、乏しいながらも毎月情報費をわたして見たところが、予期以上によい材料を蒐集して来るので、あらためてこの無名で機敏な若者を見直したという。——それは別として、ここにわれわれが最後まで丁と李、ことに李に向つて半ば疑惑を抱きながら終始

冷静な観察を怠らなかつた理由があつた。——折も折、仏印で汪精衛がテロに襲撃されたので、この上海の土地に取り急いで中国人による特務警察を組織する必要に逼られて来た。こんな事から影佐と軍当局との間の電報のやりとりのあげく、丁はその前歴を買われて思いがけず上海の治安維持の覆面の指揮者という脚光をにわかに浴びたのである。

店頭 の 刺客

話は外れたが、問題のシベリヤ毛皮店には出入口が左右二カ所あつて、真中が飾窓になつていた。丁の自動車はちょうど東の出入口の前に停つた。丁は、蘋如の背に軽く手をあてがいなから車から降り立つた。ここで始めて彼は冷水を浴びたように我にかへつた。東の出入口の両端に、綿入れの長衫を着た男がふたり、何気ない素振り腕組みをしたまま立っているではないか。

丁は長い間に鍛えられた第六感で、この腕組みをした男たちの脇の下にそれぞれ拳銃がかくされてゐるのを見抜いた。そしてそれから以後の丁の応急措置はまことに見事だつた。最も些細な手ぬかりすら冒さなかつた丁の緻密な一挙一動が、あやうく彼の命を救つた。

丁は蘋如の肩に前よりも強く手を当てたまま、運転手に小声で「自動車を反対側の歩道に沿つて停めて置くように」と、命じた。この運転手も訓練をうけた特務工作員であつたから、丁の微妙な表情に何か異常なものを感じた。そして丁の車は半円を描いて向う側の歩道の白線に沿つて停つた。

丁はそのまま蘋如を抱きかかえるようにして、出入口に立っている暗殺者の方へ真直ぐに歩いて行つた。これが先ず何よりもよかつた。もしも丁がここで弱気を出して、西の出入口に近づきながら、暗殺者に側面をさらしたならば、彼はすぐにも間髪を容れずに撃たれていたのであろう。しかし丁はそのまま、一直線に二人の男と男との間に向つて歩を運びながら店に入つて行つた。丁はやはりそれなりに、若い時から筋金入りの訓練を経て来た男であつた。

入口の男は二人とも、丁が店へ入つたのを見すまして、ちよつと気をゆるめたらしい。時間によればほんの数秒間というところだろう。二人はこれで少なくとも十分や十五分の余裕があると考へた。そして自然と姿勢を崩した。その瞬間である。店へ入つた丁はいきなり蘋如を奥の方へ突き倒し、西の出入口から駆け出した。そして夕方の通勤時間の自動車のひっきりなしに往来する静安寺路を飛ぶように横断して、云いつけどおりに待機しつゝあつた自動車に飛び込んだ。この措置も満点である。なぜならば、もしも丁が毛皮店のすぐ店先きで自動車のなかに逃れようとしたならば、暗殺者は確実に短距離から丁の背中を射抜いていたに相違ない。

ふたりの男は店の奥の蘋如の悲鳴を聞くと同時に、丁が往来を跳ぶようにして横切つたのを見かけた。ふたりは丁に向つて拳銃を乱射した。しかし自動車の雑沓にさまたげられるうえに、何よりも先ず通行人が騒ぎ立てた。ふたりも決して射撃は下手ではないのだから、丁の車の窓ガラスにも三四発命中したが、そのガラスは用意周到にも防弾装置を施したものであつた。そのうえ、丁は反対側の歩道の方に扉が開いている自動車に飛び乗るのだから、こうなつて見ると、そこはまことに確実な安全圏内だ。丁は車の扉を閉めるが早いかな南京路の方に全力疾走させた。彼の車

の窓ガラスには雪合戦の往来を通り抜けた直後のように、丸い淡白の飛沫が艶やかに散っていた。銃弾の痕迹だ。

この晩、丁が出席しようとしていた宴会は、実は私たちが肝入役きまわりやくになっていたものであった。一年の間大ぶん苦勞したから、日本側と中国側と双方の同志で心ばかりの年忘れの会を計画したものだ。ところが小さい丸テーブルの主賓の席が一つ、いつまでも空いていて、丁がなかなか現われない。周仏海は、日本側の友人に礼を失するといふのでしきりに気を揉みはじめた。周が方方へ電話をかけて丁の行く先きを突きとめて見ると、六時前にすでに鄭蘋如を車に同乗させて出かけたという。それを聞いた瞬間、私は周がいかに「困ったものだ」という顔つきを露骨に示したのを見逃さなかった。

やがて七時近くなつて丁は急ぎ足に会場に入って来た。丁はわれわれに申し訳ばかりのような短い握手をつぎつぎに交わしてから、すぐに廊下にある電話にかかると、続けざまに五六カ所、長い指令を発していた。そして今度は見違えるように落ち着きを取り戻して宴席に着いた。

丁はバツの悪そうな薄笑いを見せながら隣の席の周仏海に小声で遅参の理由を説明していた。これを周から又聞きした影佐が驚いて見舞を述べると、丁は「私の不注意で御迷惑をかけました。しかし鄭蘋如は一週間で捕まりますよ」と、いかなる根拠からかハッキリ日数を切つて答えた。宴会の食事の合い間に主卓メインテーブルの連中がその訳をきいて見ると、いくら物騒な上海でも、人を殺す仲間のアジトというものはそう数多くはない。安ホテル、安ダンスホール、阿片窟、売笑窟というような類たぐひである。もっとも、最近丁黙邨の圧迫に堪えかねて、重慶側の秘密警察もアジトの

種類に刷新を加えようとしている。たとえば慕爾鳴路モールミンにある北極公司などがその一例だ。この店はアメリカ製の冷蔵庫の販売店のだが、何もかも清潔な白ペンキ塗すくめの外見に紛らされて、その主人の陳氏が諜報網の地区主任であったことにしばらくの間気がつかなかった。こんなのも新式のアジトである。

しかし人間のやる事だから、何か異常な事件をしでかしたアジトはどこか騒然としていて、人の出入りも多い。もしくは不自然に堅苦しく物静かであり過ぎる。丁はこういう所には監視員を置いて刻々に報告させ、同時に七十六号の本部の地図のうえには赤い目印をつけて行く。それを絞つてゆくとその赤い目印は次第に一つずつ消されて、最後には三四カ所が残る。こういう捜査のやり方である。——やがて幾度目かの電話に呼び出された丁が座に戻った時、「大体わかりました。あと三日もあれば捕まります」と云つた。果して蘋如はそれから三日目に捕えられた。

チェン・シャオチエの「小さい城」

戦後、私は鄭振鐸ていしんたく氏の随筆集「書物を焼くの記事」というのを読んだ。原文は「蟄居雜記ていこざつぎ」というむずかしい名前だそうである。筆者の鄭さんはロンドン大学を卒業してから国へ帰つて二三の大学の教授を勤め、上海では抗戦文人の先輩格に推されている人である。しかし、この随筆集の日本人の翻訳者が公平に批判しているとおり、「筆者は終戦直後に筆をとつたため、抗戦勝利の昂奮のなかで歓喜の感情に押し流された傾きもないではない」と感想を述べているのは、私も実

は同感だ。それはともあれ、私は偶然にもこの随筆集のなかに蘋如のことが書かれてあるのを発見した。というのは、蘋如の同棲者であった或る物静かな「品行方正」の青年が、たまたま鄭さんの親しい友人であったからである。そしてここに描かれている淡彩画のような蘋如の肖像は、当時の彼女にまつわるいろいろな悪い噂とは全く趣の違うものであった。しかしこの描写に限る限り、私は鄭さんの語る蘋如の一面の方に真实性をみとめたい。ともあれ、私はこの随筆によつてはじめて蘋如の死後二十年、彼女に対する印象を多少なりとも変えたことは事実である。

戦争中の或る日、鄭さんは偶然その友人の青年について意外な評判を耳にした。それは彼と同棲している若い女性が上海でも指折りの「蓮っ葉」であつて、毎夜のように歓楽街に出て行つては、「敵」や「漢奸」と往き来しているという噂である。鄭さんは早速忠告して見たが、その青年はただ笑うばかりで、肯定も否定もしなかつた。それで鄭さんもそれ以上は立ち入つて問い訊すことも遠慮したという。

ところが別の日のこと、鄭さんは霞飛路の或る喫茶店でその青年と例の女友達とが話に夢中になつてゐるのに出あつた。鄭さんは青年の方にだけ目礼した。すると青年は立つて、

「こちらが鄭小姐です」

と紹介したので、ふたりは軽く会釈を交わした。小姐というのは、中国語でお嬢さんという意味である。英語で「ミス・何々」という、あのミスに当てはまる言葉である。

その時鄭さんの見かけた蘋如は、中肉中脊、ふっくらした顔だちの、服装も取り立てて刺戟的などころもなく、質素な人柄に見えるが、どことなく気品のある女性であつた。頭髪も流行の

イマネント・ウェイブなどはかけずに、ただ後ろに束ね髪にしている、小ざつぱりとした感じだ。どこから見ても若夫人という身装で、評判の「蓮っ葉女」とはどうも受け取れなかつたという。

ひと月ほど経つた。或る朝、その青年が鄭さんのところへ飛んで来た。

「いつぞやあなたに御紹介をした鄭小姐は、とうとう殉難されましたよ」

「え？ 一体どういう訳なんです」

「彼女はスパイだったので。例のジェスフィールド路七十六号の頭目の丁黙邨を暗殺しようとして失敗したのです。捕まつた後は勿論消息がまったく絶えていたんですが、それはこれまでも時々ある事なので、私はもうそろそろ不意に帰つて来る頃かと思つていたんです」

その青年はすっかり観念して、七十六号の本部からの呼び出しを待つていた。下手に逃げても虐殺されるだけだと予てから聞かされていたし、それに呼び出しを受ければ蘋如に一目でも会えるという空想を抱いていたらしい。しかし青年の予期は外れた。丁の訊問に対しても、蘋如はこの青年のことだけは終いまで隠しおおせた様子である。

これは後からの想像だが、蘋如は上海という大都会のなかで、この一隅だけが無理に脊伸びをしないでも済む、そして無理に化粧などをしなくても済むたった一つの平凡な場所として、彼女の「家庭」を大切に蔵つていたのではないだろうか。アングロ・サクソン人種がいつも誇る自分の城としてのわが家——それが彼女の安家賃のアパートの部屋であつたのではないか。——すっかり事が済んだ後で、青年は奥地の方へ誰にも告げずにひとりで移住して行つた。そして終戦のあとも彼はまだ上海へ戻つて来ない。……

丁黙邨は実のところ、監禁中の蘋如に対して極刑を用いたくなかった。私怨から若い女を死罪に処したと云い触らされては体裁もわるいし、特務警察というものの威信にも係わると考えた。しかし七十六号の本部の空気は決してそんな生ま優しいものではなかった。スパイ取締の総指揮者が逆にスパイ——それも小娘のような女スパイに溺れてあやうく一命を失いかけたというのでは部下一同も肩身が狭いわけである。事実、町の井戸端では丁はよい笑話の種にされていた。ところが奇怪な事に、この井戸端会議の奨励者は七十六号の副指揮官の李士群だという説もあらわれた。李士群は若くて健康で、生活のすべてを賭けて権力の座にあらがれている。いつでも丁に取って代るに躊躇はない。丁はだんだん進退二つながら難しくなってきた。蘋如を死刑にすれば残虐だと騒がれる。死刑にしなければ女に迷ったと噂される。そのうえ、世界いずれの占領行政にも見られるように、丁びいきの日本の係官と、李びいきの係官との抗争という景物まで加わって来ている。

ここまで事態がすすむと、丁も決心しない訳に行かなかつた。そうこうしているうちにクリスマス前の聖週間が静かに来た。ことにこの上海は郊外に三百年の歴史を持つ徐家匯シュカウエイの大寺院があり、丁の役所のあるフランス租界は勿論カトリック教徒がほとんどその全部を占めているので——注意を与えた者もあつたのであろう。——丁は特に気を配って、聖書の言葉に従えば「地上の善意の人々」のために安息の日を送らせた。

ところがこの事が、もともと人を管かめてかかっている蘋如にとんでもない楽観的観測を与えて

しまった。彼女はこうなつて来ると、思い当てるのが沢山あって、今さらそれに気がついたよ
うな錯覚に囚われた。「そうだ。七十六号の役所は人を殺さずに、生かして使う方針だった」と、
彼女は考えた。「人間ひとり殺すほど勿体ない事はないと、よく丁先生が云っていた。わたし
はそれを忘れていた」と、彼女は考えた。「現にわたしの衣裳も化粧道具も、頼めばいちいちこ
こへ届けてくれるではないか。私は生きられる——」こう考えた。

十二月二十六日の午近く、顔見知りの監視員が部屋に入つて来た。

「よいクリスマスのようにだつたね。——ところで、今日はもつといい場所に移ろう」

蘋如は歓声をあげると、雀躍りして大小の綺麗なスーツケースに身のまわりの品を詰め込ん
だ。

遅い昼食が終ると、七十六号の男たち三人が蘋如と一緒に出発した。そして上海市の西端の大
西路サイロをさらに西へ突きぬけて真直ぐに走つて行った。やがて車は場末の戦災難民地区をも通り過
ぎて、赤土の多い丘陵地帯にさしかかった。

さすがにこの辺に来た時、蘋如は自分を待ちかまえている一切のものを覚った。彼女は急に泣
きわめき、隣の男にしがみついて命を乞うた。が、命令の書類は今さら変更の出来るわけのもの
ではない。やがて物寂しい赤土の丘の一つに来た時、蘋如は道端から遠くない一カ所に、すでに
深い穴の新しく掘られてあるのを見つけた。蘋如はすべてをあきらめ、まだ泣きじゃくりながら
も、すなおに車から降り立った。ハイヒールの靴に粘土かんどがこびり付くので、彼女はよろめきなが
ら思わず二三歩、石ころのうえを靴下のまま歩いてしまった。男のひとりがその靴を粘土から取

り上げて運んでくれたが、それはすでに深い穴のほりに揃えて置くためであった。

一般に中国の特務工作ではこの種の暗黒な死刑が行なわれる場合、奇妙な習慣が一つあった。それは執行人が買収されるのを防ぐ方法だ。蘋如の場合もこのために処刑直前と直後との写真をうつして報告書類に貼付しなければならなかった。蘋如の正坐している背後で、シャッターの音がせわしく起った。

「何か云い残すことはないか」

「無没個」

蘋如は上海語で短かく「ない」と答えた。拳銃の音が彼女の頸すじ目がけて一発起った。蘋如は穴のほりに横倒しになった。写真撮影のシャッターの音が再び繰り返された。

——同じ月の十六日に捕えられたのだから、丁度十日目の出来事である。

機密を聞き出すか、殺すか

蘋如の事件があつて以来、丁黙邨のジェスフィールド路七十六号の本部では遅れ馳せながら女スパイの動向について総合的な調査を行なつた。その結果、重慶の方面から大勢の女スパイを計画的に上海に潜入させてある事が分つた。これは汪精衛の若手の官吏に独身の者が多いという弱点をねらっているものであつた。これらの女スパイには二つの冷厳な法則が命ぜられていた。機密を聞き出すか、殺すか、どちらかである。

たとえば日曜日に汪派の青年が若い女から公園へ散歩に誘われる。白昼の公園だからというので安心して出かける。と、灌木の蔭から銃声が放たれる。青年は即死する。

また、こういう場合もある。汪派の若い官吏が、キャバレーへ女に誘われる。青年も用心して同僚を連れて行く。すると女は、偶然踊り場で学校時代の友達に出会つたと云つて青年に紹介する。これが予備の女スパイだ。音楽が最高調に達した時、第三の男が予備の女スパイと踊りながら目的の青年に近づいて背中を射つ。銃口をびったり背筋に当てたまま射つのでから音が聞えない。キャバレーのボーイは酔漢が倒れたものと思ひ、人波をかき分けて抱き起しに行く。突然、踊り子たちは鋭い悲鳴を放つ。倒れているのは死体であつて鮮血が床に流れている。——クリスマス・イヴにはこの手口で三人立てつづけに三カ所でやられている。

そのうちに、私たちの身辺にも例に漏れず、似たような出来事が起つた。

事の起りは周仏海と梅思平である。この連中はだんだん互いの毎日の役所の事務に追われていて、以前のようにゆっくり顔を合わせる暇もない。せめて一週に一度は政策の総合的な打ち合わせを心ゆくまでやって、その後でくつろいだ晚餐ぐらひは楽しみたいものだ。こんな事を云い出した。それで周は李士群に適当な会合の場所を、閑静なフランス租界あたりに見つけるように依頼した。この辺の地理に詳しい李士群は、早速アヴェニュー・フォッシュにある庭園の広い、白ペンキ塗りの小綺麗な別荘風の建物をフランス人から借りて来て提供した。そのうへ、身元をよく調査したダンサーを三四人、給仕人がわりのお愛嬌として連れ込んで来た。この会合は秘密保持の都合もあつて、メンバーはごく気のおけない四五人に限られていたが、私には特別例外の日

本人として参加を認めてくれた。

このダンサーのなかにひとり十六七のあどけない利巧な小娘が交っていた。顔は美しくないが動作に活気があふれて人の好感をそそいでいた。ことにこの小娘の鼻の尖端が急に高く持ちあがって上を向いているのは愛嬌がある。私は会合でこの小娘に出あうたびに、自分の鼻先きを手で押しあげて、彼女への「今日は」の挨拶の代りにしていた。私は彼女に「シラノ」という仇名をつけた。云うまでもなくエドモン・ロスタンの劇の主人公シラノ・ド・ベルジュラックの有名な鼻のかたちに似ているからである。利巧な彼女はしかしよく心得ていて、私が「シラノ小姐」と呼ぶと、「イエス」などと勢いよく英語で返事をしたりして、一座の爆笑を買っていた。

ある日の会合の時であった。李士群が手洗所に入る間、彼のピストルを皮帯ごと客間の卓のうゑに置いて行ったことがある。シラノは早速これを眼ざとく見つけて、

「これ、永安公司のデパートで八塊五毛（八ドル五十セント）で売っているわ。皮ベルトが付いて二挺そろっているのよ」

などと云いながら、何を思ったか、突然真正面の椅子に腰をかけている周仏海めがけて覗いをさだめた。この不意打ちに狼狽した周は卓の下に上半身を隠すし、他の者は「あぶない。あぶない」と大声に制止しながら寄ってたかつてシラノの手を押えた。この騒ぎを聞きつけて、李士群が手洗所から飛び出して来た。そして部屋の隅に立ったまま、喰い入るような鋭い眼差をシラノの横顔に投げていた。やがて李は、まるで自分がシラノに頼んで預かってもらった品物でもあるかのように、黙って、静かに、鄭重にそのピストルを受け取った。

「あら、これ、本物なの。でも、永安公司では馬に乗った人形がこれとそっくりの品を持っているわ。ごめんなさいね」

「あれは西部劇のカウボーイの玩具のピストルだ」

と、梅が苦り切って吐きすてるように答えた。座はすっかり白けた。

すると間もなく、重慶の戴笠幕下の諜報機関に、このフランス租界の一軒家のくわしい見取り図がとどいていた。しかし、その見取り図のとどいたという事をまた、李士群のジェスフィールド路七十六号の役所が折り返しキャッチした。まるで山彦の反響をすぐにとらえるような機敏さである。そこで李士群の手でだんだん隠密裡に調べて行ったあげく、やはりあのシラノが怪しいという結論を得た。周仏海の家では早速いつもの定連が集まって善後策を講じたが、何よりも先ず専門家の李士群の意見を聞こうという事になった。

「これは騒ぎ立ててはいけませんよ。騒ぐとあの小娘は逃げてしまふし、重慶側の新しく打って来る手のうちが全然振り出しに戻って、しばらくの間はこっちで見当がつかなくなるという不利がありますからな」李は自分がシラノの身元調査を行なった面目丸つぶれという事もあって、不機嫌な声でこう説明した。「一つ、大変よい案があるのですが、さあ、皆さんにそれを実行する勇氣がありますかな」

李はにやにや笑いながら、座の者を見廻した。

「このなかのどなたか、あの娘と同棲してもらうのです」
みな、「そればかりは」という、躊躇のいろを見せた。

「そうでしような。では、私が同棲しましょう」

ところが、次の会合の日に李士群が何気ない振りをしてシラノに召集をかけると、彼女はそのまま無断で欠席したばかりではなく、雇われていたナイトクラブにもぱったり寄りつかず、その他上海のあちこちの彼女の行きそうな場所にもそれきり姿をあらわさなかった。十六の小娘の本能の方が、李士群の鍛えあげた腕前よりもさらに一層上廻っていたわけである。

このように、実は昼となく夜となく、第二第三の蘋如が生きていて、一つの指令のもとに手足のごとく整然と働いているのだ。ただ蘋如のように才能も容姿も人並みすぐれたスターの素質を持っているものが、千人にひとりしかないというだけの事である。

暗殺者の隙き間

こんなわけで、汪派の幹部がスパイの活躍を恐れて外出を控えているなかに、康紹武の行動だけはまったく例外であった。彼は持ち前の用心深さでスパイの習性を細かく研究したうえ、その上手を行くような積極的な態度に出ていた。これは一つには康が、周仏海や梅思平を通さずに、私から直接情報を聞いて、彼独自の判断を下して行きたかったからである。これも、松本重治が健康を害して以来、同盟通信東京本社総務局長に転任したので、康の理め合せの処置としてはまあまあ妥当というところだろう。

そのかわり、というのも変だが、康は私に対して熱心に暗殺予防の基礎知識を教えてくれた。

彼に云わせると、上海は、世界最大の暗殺都市だが、盲点が一つある。それは覗う方が覗られる方に劣らず生命を大切にする点である。日本人のように、死なば諸共などという不経済な考は、彼等は全く持ち合わせていない。この点は、たとえば熱情的と云われるラテン系の暗殺者よりもさらに実利第一主義である。そしてここにこそ、われわれが頭脳の使いようによっては案外安全な隙き間を縫って行くことの出来る余地がある。

一例を云えば、仮りに暗殺者がどこかの盛り場でわれわれを見つけたとする。そんな場合ですら、われわれは最初から通算して四十分か四十五分は一つところへ腰を落ち着けていてもよいのである。なぜならば、暗殺者は先ず現場の裏口なり横の口なり、自分の逃げ道をこしらえにかかっている。それから電話をかけて自分の相棒に来て貰い、タクシーを雇う。決してひとりでは決行しない。それ故、この場合われわれとして気をつけるべき事は、帰途に自分の乗用車を使わぬことである。自動車に乗る瞬間、われわれがいかに無防備の姿勢をさらけ出すかは先例の示すとおりだ。この点、タクシーというものは或る意味で安全度の極めて高いものである。乗る客が誰であるか予知出来ないというところに妙味がある。自分の乗用車などは、いい加減の時に肩透かしを喰らわして車庫へ戻しておけばよい。

次は、昼間の場合だ。もしもわれわれの後を同じ足音が同じ間隔をおいて聞えて来る場合には、一応注意するがよい。こういう場合は街のショウウィンドウの前に急に立ち停って店の飾り物を眺める振りをする事が有効だ。同時に、われわれの後をつけて来たと思われる通行人の様子を、ガラスにうつして観測する事だ。そしていよいよ怪しいと感じた場合は、決して躊躇してはいけ

ない。すぐに請願巡査を雇っている外国籍の貴金属店か婦人洋装店に飛び込まなければいけない。但し、そのためにはあらかじめ、そういう種類の店でちょいちょい平常から買い物をして置く必要がある。別に高価なものを買う事はない。小さな美しいものを、訪れるたびに買う方が、雑談の種も殖えようというものだ。何よりも大切な事は、店の主人や支配人と互いに好意を抱き得るような、くつろいだ話を物静かに語り合う事だ。

驚いた事に、康は工部局警察のリストに載っている請願巡査派出所の一覧表を持っていて、それを私にくわしく説明してくれた。これによると日本人の私に適した店は先ず三軒ある。第一は、南京路のマッピン・エンド・ウェッブという貴金属店だ。あのロンドンで有名な老舗の姉妹店である。その支配人は白髪品のいい老人だが、毎年の夏休みにはきまって九州で鱒釣りをやるのが自慢だという親日家だ。第二はフランス倶楽部の真向いに店を出しているグレーモーズという婦人洋装店である。これは一人娘を日本で生んで、その縁で日本びいきになっている中年の白系ロシアの婦人が経営主だ、菖蒲の季節に生れた娘なのでアイリスという名をつけたといって自慢をするよい母親である。第三はC・N・グレイという洋服店だ。ここにはロンドンで腕を磨いたエクレズという老裁断師が居て、これが人柄がいい。九州へもたびたびハイキングで旅行するせいか、日本の山水に親しんでいて、英国人独特のイヤな優越感を持っていない。静かな、口数の少ない好個の老人だ。——まあ、手始めはこの三軒ぐらいでいいのじゃないか、というのが康の意見である——。

これだけの基礎知識を私に与えてから、康は或る日、永安公司というデパートの写真機の陳列棚の前で落ち合おうと云って来た。しかし私は店内の混雑のために康にはぐれてしまった。五六日して、康は今度はグラランド映画劇場の二階で落ち合おうと云って来た。丁度「風と共に去りぬ」という題名の、世界を風靡した長編映画の封切マチネー興行の時である。ところが真昼の往来を歩いて来た私は、急に暗いところに入ったために完全に視覚を失い、誤ってフランスの老婦人の膝のうえに腰をかけ、大声を出されて散々の態で戸外へ逃げ出した。康はその経緯を電話できくと、腹をかかえて笑っていたが、この次ぎは近々のうちに競馬場の前のシロスというナイトクラブで会う事にしようとして来た。そして一年前に横浜ですすめたとおり、君もダンスの一つぐらいは踊れるようになって置きたまえ、折角の陽気な夜を空しく坐って過ごすのは勿体ないではないか、などと忠告して来た。ところで、このシロスの持ち主というのは謝という人物で、あの秘密結社の青幫の序列では、上海での相当の顔に属しているという話である。云うまでもなく青幫のうちで最も著名なものは杜月笙であって、蔣介石もこの社会では杜と同じ第二十三階に登録されている一中堅幹部に過ぎない。私が康と杜月笙とのつながりを疑いはじめたのは、実はこの時からであった。……

汪精衛国民党大会

中国人は誰でも満洲国を無視する

その会場の正面には孫文先生の大きな肖像が飾られ、青天白日滿地紅の国旗と青天白日の国民党旗とが交叉して国父の肖像を守るような形になっていた。肖像の下は夏の季節のこととていくらか種類が少ないが、それでもさまざまな野花の鉢で彩られてあった。むしろ野花の方が素朴で孫文先生の人柄には似合うくらいである。私が会場を檢分している間に案内役の塚本少佐は幔幕のうしろなどを丹念に調べたあげく、「大丈夫。日本人は人っ子ひとり居ませんよ」などと報告してくれた。二人は任務が終つて会場から出た。私はこの朝、日本人が紛れ込んでこの会場を傍聴する事のないようにと、下檢分の役を引き受けて来たのだ。しかし私のような素人^{しょうと}だけではどうにもならないので、同じ梅華堂から出向いて会場付近の警備の責任を背負っている平服姿の塚本少佐に案内をして貰ったのである。

会場というのは、汪精衛一派がはじめて全国に布告して招集した国民党第六次全国代表大会の会場のことである。第六次と敢て称するのは、この大会が国民党の法統を正しく継承しているという意志表示のためであった。そして汪はこの大会の決議によって、和平条約を締結する権限と中央政府を樹立する権限とを獲得しようというのである。

この大会を招集するにあたって、汪は日本側に二つの条件を要求して来た。その一つは国旗と国民党旗を公けに会場に掲げさせる事であった。その第二は、この大会の独立と自由とを象徴する意味で、日本人を一人も入場させぬ事であった。一つとも尤もなので、影佐はこれに賛成した。そして国民党に縁のある無難な日本人として、私に下検分を依頼したのである。——下検分が無事に終ると、私は塚本少佐と会場の外の自動車のなかで、開会までの十数分間を待つ事にした。大会は午前十時、定刻のとおりに開かれたらしい。低い男声の国歌の合唱が往來にまで響いて来た。

「やあ、唱歌はうまくねえな」江戸っ子気質の塚本が不遠慮に大きな声を出した。「しかし、まあまあ、無事でよかったですなあ」

「約束だけは守ったね」

「約束をキチンと守って見せるという事は実に気持のいい事ですな。私は影佐さんの人格に教えられますなあ」

私は塚本に礼を云って、大会の様子を知らせに梅華堂へ帰って行った。梅華堂ではすでに四五人の者が影佐を取り巻いて、大会から配布された汪精衛の演説の印刷文を読みながら、口々にそ

の名調子を感服していた。しかし、われわれが感服しただけでは身ビイキになる恐れがあるので、私はここに便宜上、国会での反軍思想の指導者の一人である芦田均氏がその著書のなかで世間に紹介した批評の概略をそのまま書き写して見よう。

「この日の（汪の）宣言は堂々たる名文をもって起草されている。すなわちさきの武昌に於ける国民党臨時大会が正義に基づく和平の要望を宣言したことから説き起し、一九三九年十二月の近衛声明を引用、孫文の大アジア主義に論及して十二月三十日の汪声明に及んでいる。そして更に進んで、蔣介石がこれらの精神を忘れ、いたずらにソ連の付庸国として、抗日を以て『中華ソヴェト』実現の具とする中共と合作していることを痛撃し、全会一致、蔣同志の総裁の職権を解除、汪精衛にこれを授権する旨を明らかにした。さらに汪のスローガンは、抗戦建国にあらず、和平建国であり、かつ反共であると述べ、外交に於ける遠交近攻政策を斥けて、内政における三民主義を詳述し、マルクス主義と本質的に異なるゆえんを説き、個人独裁を排撃したものであった。云々……」

時間が経つにつれて梅華堂は訪問客で賑わって来たので、みな車座になって昼弁当を取り寄せながら雑談の花を咲かせていた。その梅華堂に食後間もなくの事であったが、南京総司令部から急報電話がかかって影佐が電話口呼び出された。影佐はすでに覚悟の前だから、電話口に四五分かかっていたが、話が済むと、

「さあ、ケンさん。予定のとおり呼び出しがかかったよ。わしはこれから総司令部へ行って来る。多分今夜は南京に泊って、明日は帰れると思うが、あまり心配するなよ」

こう云って、影佐は落ち着いて出かけて行った。落ち着いている筈である。彼は辞表を懐ふところにして出かけたのだ。

事の起りはこうである。この日の総司令部の当番将校は何気なく、上海で行なわれている国民党の大会の出席者と欠席者とを区分けして鉛筆でしるしをつけていた。と、忽ち彼は電光に打たれたように思わず椅子から立ち上った。彼は自分の眼を疑う思いであった。その紙には、欠席のしるしにはなっていたが、「東三省代表」という文字が謄写版に刷られてあるではないか。東三省というのは満洲国の領域全体である。奉天、吉林、黒竜江三省のことである。この文書は明らかに満洲国の存在を否定しているのである。天皇陛下が勅語を発せられて交友を宣し、その育成を祈念された満洲国はこの文書によると存在しない事になる。これは梅機関の不敬罪も成立するのではないか。——こう考えた当番参謀はその紙片を持ったまま、思わず総参謀長室に駆け込んだ。当然、影佐が電話で呼び立てられた。影佐は予期していたように極めて落ち着いて、「すぐ飛行機で行く」と答えた。

実は前の晩遅くの事である。周仏海から影佐と私に宛ててそれぞれ使者持参の封書が届いた。開けて見ると翌日の会議の議題を印刷した書類であった。しかしそれは大会運営主任の林柏生から送って来たものではなく、周が「御参考までに」と云い添えて届けたものに過ぎない。これはたしかに林柏生の手落ちである。影佐は読んで行くうちに、すぐに「東三省代表」の一件に気がついた。そしてこれは容易な事では済まないぞと直感した。彼は夜中にもかかわらず私に面会を申し入れた。私が彼の宿に着いた時、影佐は事の取り扱ひの厄介なのを思いあぐんでいた様子であつた。

結局、善後策という事になるのだが、夜もすでに遅くて、新しい印刷は到底間に合わない。急いで市中の印刷所に頼めば忽ち機密が洩れる。梅華堂の旧式な謄写版の機械ではどうにもならない。——仮りに徹夜で出来上るとしても、それを配布するのは明朝になってから大会会場でやるより他はない。何故ならば出席委員の二百四十余名の大部分は身辺の危険を恐れて今夜はそれぞれ知人の家に秘密に泊るだろう。そうなると新旧の印刷物の入れ替えは大会会場で派手に行なう事になる。衆目は忽ちその書類に集中する。そして、万一にも訂正された新しい部分が日本陸軍の手になるものであって、しかもそれは満洲国に関する問題のためだと分つたならば、中央政治委員会の全員が強い衝撃を受け、噂は噂を生み、重慶の諜報網もいち早くこれを捕えるだろう。これはいっそ、明日のところは今までどおりの書類を配布させて何気なく大会を済ませ、そしてあとの全責任は梅機関が背負うより他に方法はない。——これが影佐と私の一致した意見であつた。

「よし、わしが明日総司令部に呼ばれたら、辞表を出して来る」

「いや、君ひとりでは行かせないよ。僕も書類を読んだひとりだ。共同責任があるよ」

と、影佐一人を南京へ行かせるに忍びない気持で、私が云った。

「なに。君が一緒に行く。冗談云うな。君は梅機関に籍のある人間じゃないぞ。資格のない者は余計な事は云うな。黙っている」

影佐は私が意地を張り出さぬうちに、殊さらに怒った振りをして、私に喰ってかかった。私は

その温い罵倒とも云うべきものを笑って浴びた。そして翌日彼を飛行場まで送りに行った。

二日ほどして影佐は南京から帰って来た。彼は飛行機の乗降口で私を見つめるなり、「よう」と声をかけ、真直ぐに自動車置き場へ歩いて行った。

「首尾はどうだった」

「うん。内約折衝を前にして重大な時機であるから不問に付する。今後は特にかかるとの事がないよう嚴重に戒告するという事だった。みんな板垣総参謀長の心づかいさ」

自動車は日本人租界の北四川路へ向けて疾走した。

「しかし、やるもんじゃなあ」

「誰が」

「周や林よ。いい度胸じゃなあ。——もつとも、あのくらいの心臓でないと、興亜院のあつかましさに顔負けするからなあ」

この出来事は何を物語るか。満洲国成立の事情を決して忘れていない中国の国民感情の前には、抗戦の蒋介石も和平の汪精衛も一国民としては差別がなかったという証拠である。

深夜の再折衝

板垣参謀長がそれほど影佐の身のうえを庇った「内約」の折衝は、いよいよ十月に入って汪精衛一派と梅機関との間ではじまる事になったので、先ず執筆者の堀場中佐が原案の書類を携え

て上海へ乗り込んで来た。堀場は前にも書いたとおり、しばらくの冷却期間を置いて興亜院の態度を和らげるように苦心して見たが、どうも少しも利き目が無い。そこでいよいよ決心して原案の書類を持参したのである。当の執筆者がこんな心持では、この会議の行く手に暴風雨の兆のあるのは当然だ。果して先ず梅機関のなかから原案返上論がわき起った。

たとえば外務省から交渉委員に任命されたばかりの清水董三である。この東亜同文書院出身の中国の理解者は、堀場から受け取った原案を読んで見た日に、影佐にむかって、「今さらこんな要求を汪につきつけるようでは、日本の国としての信義が立たない。いっそのこと内約の交渉はこのまま取り止めてはどうか」と忠告する始末であった。そしてこれには同調する者も出て来た。

なるほど清水が驚くのも無理はない。細かい事は省くとして、要するに万事が占領政策強化一点張りである。仮りにこの原案を実行すれば華北は事実上中国から独立した形になるし、さらに南に飛んで海南島も日本海軍のものになる。およそ世の中にこれ以上の傀儡政権はない。康紹武が驚いてタンカを切って、「北もいけない。南もいけない。海もいけない。山もいけない。それでは中国民族はどこで生きて行ったらよいのですか」と開き直ったという話は笑えない事実である。中国を知っている清水が匙を投げるのも無理はない。

影佐はしかしこの清水をなだめて、君の憤慨は尤もだが、いま梅華堂が真先きにこの書類をいきなり突っ返すのは、その使命から見てどうだろうか。それよりは審議に入ったらうえで堂々と興亜院に反駁しようではないか。どうせ今度の折衝が済めばお互いは転勤、左遷、退職。——それぞれ東西に四散して行くのだ。だから一生の思い出に相互の尊い体験と理想とをこの会議録に

たたき込んで後世に遺そうではないか。——影佐はこんな主張をしているうちに自分で自身の言葉に感動したかのように頬を赤らめ、声を震わしていた。清水もこの影佐の態度に打たれてそれ以上の追求は遠慮してしまった。

こんな雰囲気の中に、誰しも昨年のような張りつめた意気込みを抱かぬまま、十月のはじめに「内約」の審議の第一日を迎えることになった。これではいかんと観たのであろう、影佐は開会に際して、特に自由な討論というものの価値を強調したうえ、日華両国の間には半世紀の以前からこれを欠いていたと述べ、今日から集まる両国の有志はこの点でも輝やく開拓者としての立派な足跡を残して貰いたいと切望した。つまり「大いにおやりなさい。こっちは万事承知のうえだよ」という合図である。これに気をよくした形で梅思平、莊知正などという理論派は堰を切った水流のような勢で興亜院の原案に対して代る代る遠慮のない攻撃をはじめた。一方、梅華堂の方の議論家と云えば矢萩と矢野だが、これもお許しが出ているのだから気楽なものである。もっとも、この連中は汪側の主張の原則は賛成する立場にあるのだから、その反駁の重点としては専ら汪側が政権を受け取った場合の政治力の評価に向けていた。つまり論旨としては——汪先生の重慶時代の命がけの同志にくらべて、上海移住後に集まった後輩は政権目当ての仲間ではないのか。汪政府は失業救済事業とはちがうのだ。そういう点は民衆の眼は鋭く、街の批判には遠慮はないぞ。汪派の人々は日本軍の保護のもとに暮しているだけに、特に私生活は清浄を守って享樂をしりぞけて貰いたい。義務を伴わない権利だけを甘く空想されては、こっちが責任上困るのだ。

どうも正直のところ見渡してみても、興亜院の圧迫にも負けずに中国の民衆生活をしっかりとあずかるだけの気魄きぼくに欠けているように思われてならない。諸君をいま苦しめているあの興亜院の原案の、「戦時中の過渡期の処置」という崎型児も、実は半分の責任は汪派の人々の弱々しい実行力不足にあるのだ。その反省がちと諸君には足りないのではないか。——こんな調子の応酬である。そして梅機関からはその都度、いちいち東京の興亜院に宛てて「激論反駁終日に及ぶ」というような外交的公電が送られるのは云うまでもない。素人の私から見れば軍人らしい謀略のアクドさが眼ざわりであったが、そのくらいの智慧をしぼらなければ興亜院とは到底太刀打ちが出来なかつたのであろう。

影佐はいつも夕方しやうたのよい夕時を見計らって、私の顔いろを眺めては休憩を申し出た。「やあ、疲れた、疲れた。今日はこれで降参する事にして、今夜めいめい、いい智慧をしぼろうや」こんな風に彼は快活に悲鳴をあげて見せて、中国側を談笑の仲間仲間に引き入れた。食事時しじにぶつかると、彼もまた自身で箱弁当を配る役目にまわったりして、激論のあとの親しみをすすんで取り持っていた。その病身に鞭打つての努力を見ると、私もつい疲れを忘れて周の私宅まで出かけて行く気がわき起るのである。

私は毎夕、会合が終ると早速ひと風呂浴びて、影佐との約束のとおり市の東端にあるこの会議場から西隅の周仏海の家まで通って行った。これも口で云うのは容易いが、ひと仕事だ。何しろ片道たっぷり三十分はかかる道のである。ことに静安寺路も尽きてフランス租界に入ろうという愚園路のあたり、妙に静まりかえった夜道にさしかかると、私は本能的に不意の襲撃に備えて、

思わず頷すじの緊張するのを、自分でもよく気がついていた。あの特務警察の頭目の丁黙邸ですら危うく襲われかかったのはその薄汚い映画館の曲り角であった。しかし私の車が無事に明るい灯の街にすべり込むと、私にはわかeniに饒舌になり、少崔シヤウツァイという愛称をつけられた忠実な運転手を相手にうしろから無闇と雑談を持ちかけたりした。人のよい世話女房型の周仏海夫人は、自分の主人の出不精のために私がこうやって毎晩通つてくれるものと解釈したのか、ひどく気を使って、私の車の音が門口に聞えると、待ちかまえたように玄関まで走り出て、すぐにブランドイを一杯とお国振りの辛味の利いた前菜とを食堂に運んでくれていた。私はしかし、雨の降りしきる夜など、何となく気分がすすまぬ予感を受けると、この周夫人から遠慮なくガレージの鍵を借り受けて、その中で例の番号の違う予備の自動車の鑑札に取り替えていた。が、こんな気苦労をつづける甲斐があつて、私と周との「夜中の折衝」は困難なうちにも少しづつ効果を挙げた。それでも興亜院の原案のあまりに過酷な個条にぶつかると、さすがに一度や二度の相談で結論というわけには行かず、しばらく留保、後廻しというのも出来て、それが五六カ所ほど溜つて来た。気の早い湖南人の周には少しばかり焦慮のいろが見えた。が、こういう弱点を、さすがに鋭く突いて来たのは康紹武である。

二人は互いに忙しいなかを、或る晩遅く、洪長興という名の回教徒の羊料理店で落ちあつた。強い炭火に焼かれてゆく羊肉の白い煙の向う側に坐つていた康は、私を認めると立ってこの店の主人の狭い居室に案内した。ここにも天井に強い匂の煙が渦巻いて流れ込んでいた。

「あなたは知らん顔をして、なかなか活躍しているんですね」

「どの事だつたかな」

「内約ですよ。どうも内約の修正が、一つ一つ思ったよりもわり合いにうまく中国側の云い分に近づいて来るのでだんだん聞いて見ると、あなたが夜のうちに日本側を説いたり、周仏海を説いたりして、せいぜい纏まとめていられるのだそうですね」

「それがなかなかうまく行かないんだ」

「いや、ホトケ（周仏海）にくわしく聞きましたよ。まったく大変な御苦労ですね。しかし相変わらず憎まれ口を云わして貰いますよ。——あなたのその努力は、結局のところ影佐流に云えば、三十点のものをまあ五十八点ぐらいに引き上げている努力ですよ。まだちょっと足りませんね」

「それはよく分っているんだよ」

「なるほど、当事者の身になって見れば、よくもあの興亜院を相手にして二倍近くの点数を盛り返したものだと思ふでしょう。そして『まだ二三点は及第に足りないが、これは事情が事情で止むを得ないのだ』と、つい自分で慰める気になるでしょう。無理もないが、問題はそこですよ」

「何もかも知りぬいていて小言をいうのかい」

「いや、あなたへじゃありませんよ。私の云いたいのはホトケですよ。現に彼はそういう安易な気分になっています。楽天主ですからな。しかし街の中国人の眼は、厳しくて冷たいですよ。街の民衆はその二三点ずつ足りない「内約」の妥協の線を、ちゃんと売国の線と割り切つて見ているのです。決して容赦はありません。だからあなたはそこをよく呑み込んで、ホトケをせいぜい逆に督励してくれなければいけませんね」

「それは僕も度び度びホトケに云うのだ。君、そんな事では少し甘くはないかい、ってね」
「そうですか。——それでしょうな。私の見るところでは、ホトケは政府樹立を焦っています。むしろあなたの方が慎重で中国人の物差ものさしを持っていきますよ。いや、お世辞じゃありません。私や莊知正君も、せいぜいその点を会議の席上で主張するつもりですがね」

康の小言のとおりである。上海の町なかの無言の採点は汪精衛に対してなかなか厳しかった。果してひと月も経たぬうちに、汪もとうとう堪りかねて影佐に面会を申し入れて来た。そして悲壮な面持を見せて訴えるには——「内約」の原案を仔細に読んで見ると、最初の近衛声明の精神からは全く遠ざかってしまっていて、このままの状態では和平陣営のなかには前途を悲観して脱落してゆく同志も現にあらわれそうな兆候を見せている。今後も引続きその数が殖えるだろう。しかるに一方、貴下をはじめ梅華堂の人々を見ると、私たちのために日本政府にむかって毎日のように条件の譲歩を強硬に要求して居られる。これは他日貴下たちに重大な責任が残るわけで、自分としては坐視するに忍びない。そこで、事ここに至ればいさぎよく政府樹立をあきらめて、最初の案のとおり民間の和平促進運動のかたちに戻りたいと思う。それを諒としてくれ。——こういう話であった。

これに対して影佐も最後の決意を打ち明けて云うには——あなたの苦衷は御尤も千万だが、あなたはまだ日本の官僚という奇怪なものの正体を御承知ないのだ。日本の官僚組織には大正の時代から妙な習慣が出来てしまった結果、たといそれが政治的な大問題であっても、一応は課長級

の事務官が作文をひねって国の方針を書き上げると、大臣の多くは細かい事にはまったく無智で盲判を押してしまう。現に自分もたびたびこの種の作文を書かされた一人で、大臣を程よく丸めたり直したり、更に閣議にも取り上げられて再検討という事になる。自分の今のネライは実はそこにある。それで、近いうちに自分は東京へ出かけて行って、畑陸軍大臣に面会したうえ、一体この和平運動をどう扱おうとしているのか、ぎりぎりの決心を訊いて来ようと考えている。正直のところ、現在この交渉がこれほど決裂状態に直面している事を、陸軍大臣はまったく知らないのではないか。——こう云って、影佐は十一月のはじめに急いで上京して行った。

果して影佐の想像したとおりであった。畑陸軍大臣はくわしい事を少しも知らず、影佐の話を直接聞いて大いに驚き、この問題については必ず興亜院側を譲歩させるから、汪の和平政府は是非とも出来るように最後の努力を尽してくれ、と影佐に頼むような始末であった。そして畑も自身で乗り出して斡旋に奔走した結果、「内約」折衝の決裂だけはどうか免れる程度に興亜院側を後退させる事に成功した。同時に堀場から影佐に密電がとどいて、汪側が最後まで固執すべき数カ条を作戦上至急定めておいてくれと申し入れて来た。

丁度、折も折、汪陣営の指南番とも云われる陳公博が遅れ馳せながら香港を出発して上海の汪邸の近くに新居を構える事になった。汪陣営はこの噂でひとまず活気を取り戻した形であった。

汪精衛はこの陳公博の紹介をも兼ねて、堀場への回答を急いで取りまとめようと考え、影佐と私をその公館に招いた。

汪は黒い緞子の長衫をゆるやかに着て、陳と周仏海とを伴い、朝まだきの秋の空気の澄んでい
る広い客間にあらわれた。そして鄭重に陳をわれわれに紹介した。

陳公博は汪と同郷人。広東の人である。実業部長時代にはなかなか上海社交界の花形であった。
それではアメリカ風のハイカラな敏腕家かというところでもない。国民革命軍の北伐遠征の時には
政治訓練部主任として各地に転戦している筋金入りである。彫りの深い、立派な顔立ちで、めつ
たに物に動じそうもない、見るからに気性の強い男である。汪の信頼の厚いのも無理はない。

汪夫人の心づかいであろう、白と黄いろの菊花の鉢をとどこころにあしらったその客間では、
汪が早速座長のような形になつて堀場に対する回答の作成に取りかかった。陳公博は私の傍が気
楽でよいと思つたのか、すぐ隣の安楽椅子にゆつたりと腰をおろしながら、半端な時間を紛らす
ように、雑談をしかけて来た。

「そうそう、あなたは王寵恵を御存知でしたな。先日会つた時にあなたの御家庭のお噂をしてい
ましたが——」

「ええ、父親の関係で知っています。こんどはヘーグの国際司法裁判所の判事に当選しましたね。
もうオランダに赴任するんでしょう」

「もう出掛けたと思います。私がおこへ来る直前、送別を兼ねて訪ねて来てくれました。あの男
もトラウトマン・ドイツ大使の仲介問題の時の外交部長などをやって、対日外交では苦勞したほう
ですからな。——本当は送別じゃなくて、訣別という気持で私を訪問してくれたのでしようが」
「何かそんな気持の事を云っていましたか」

「いや、私の方から切り出したのです。——どうせ戦勝国の軍隊のいる中へ行って政治をやるう
と云うのだからロクな事はあるまい。ただ、汪先生の周囲が思つたより寂しいようだから手伝
いに行くのだ、と云つたような次第です。まあ、私はあまり取り得はないから、汪先生の云いにく
い事を代つて断る役目でもしようと思つています。どうも汪先生は品が好すぎますからな——」
陳は万事を心得て危地に入つて来た男らしく不敵な様子を見せていた。「まあ、こんなところが
私の偽らぬ心境です。何事も覚悟のまえだから、あなたもむつかしい相談は何でも遠慮なく持ち
込んで下さいよ」

庶務の準備が整つたので、座長格の汪を取り巻いて四人の者が協議に入った。もっとも、協議
とは云うものの大体は周仏海がすでに事務的な整理を終えて、回答案をここへ持参して来ている
のである。

結果、二時間ばかり取捨についての議論をしたあげく、次の数カ条だけは最後まで頑強に主張
するという事に決定した。

(一) 日本軍の撤兵問題。

撤兵の条件として、「治安確立と共に」というような敵しい表現では、事實は撤兵出来ない
のと同じになる。日本人ひとり怪我しても治安未だ完全ならずという云いがかりも生ずる恐
れがある。この点は正式条約作成の際に付属文書のなかで解釈をゆるめる。

(二) 経済問題干渉の件。

揚子江下流地帯には日華経済協議会のような特殊な機構は設けない。まったく汪政府の自主

にまかせ、中国の民族資本をみとめ、経済の原則を尊重する。

(三) 海南島に於ける日本国海軍基地の件。

海南島に於ける日本海軍基地設定の件は、この和平運動の当初からの全経緯に鑑みて同意し難い。これは非常時の必要に際し、日華両国協議のうえ、日本国海軍が臨時にこれを使用し得る程度のもとする。

(四) 華中鉄道(南京上海間の鉄道)の件。

華中鉄道には現在の幹部の任期満了後、必ず中国人の総裁を置き、現在のような日本人の副総裁の独裁的な指揮には任せない。各駅々長は中国人。助役は日本人。名実ともに中国人の中国鉄道とする。但し機関車運転手は当分の間老練な日本人技術者を用い、併せて日本軍鉄道警備隊との連絡を緊密ならしめる。

(五) 中央、地方、人事交流の件。

汪中央政府と既存の地方政権との人事の配置は来年正月勿々青島会議に於て決定されるが、中国人は昔からこのような人事問題については妥協の才を発揮して善処するので、その意味をも含めたいえ、汪氏の主導権にまかせる。

(備考一) 国旗は東京で決定したとおり、従来の青天白日滿地紅旗を用いる。但し全面和平の実現するまでは、第一線の重慶軍と紛れやすきを避けるため、正規の旗に加えて黄色三角形の小布片を添付したものをを用いる。

(備考二) 三民主義の修正は、東京で決定したとおり、これを行なわない。

「内約」の惨敗

ところが二三日すると堀場からまた急電がとどいた。それによると、海南島の基地問題は、興亜院だけではどうにも結論が出ない結果、これは海軍大臣から特に須賀少将に宛てて直接命令が行く様子だ。従って須賀は梅機関の者としてでなく、海軍大臣の代理という資格で改めて汪側と折衝をはじめらしい。それで、汪側でも至急その相手になる者を選んでおく必要があると思う。——こういう注意であった。同時に影佐に対しては陸軍大臣から、「海南島の問題はすこぶる微妙な段階に入ったから、この際影佐少将は勿論、梅機関所属の陸軍全員は一切これに関係せぬよう、特に注意を喚起する」という意味の戒告がとどいた。事態はどうも普通ではない。

何はともあれ、この緊迫した空気を察して汪精衛は又もや影佐と私を公館に招いた。前回のおり陳公博と周仏海とがこれに立ち会った。ところが陳は私の顔を見ると、いきなり問題の中心に触れて来た。

「一体、日本は北へ力を入れるのですか。南へ出て行くのですか」

「いま、両方考えているでしょう」

私は卒直に答えるより他はなかった。

「では、この海南島に基地が欲しいというのは、海軍だけの註文ではないのですな」
「今度は、陸軍も同意しているようですね」

「すると、お国の陸軍は海軍に他愛なくお辞儀をしてしまったのですな」
いかにも意外らしく、陳は苦笑していた。

「いや、この次ぎ陸軍が北に出る時は特によろしく、という交換条件が付いていますよ。恐らく私は立場の微妙な影佐に代って、この日は万事矢表に立つ覚悟であった。陸軍が北でソ連を突くにはまだ間があると考えていますからな」

ここで汪精衛がはじめて、外交界の長老らしく話に加わった。

「しかしこんな事で、一体お国の海軍には南進というものに対して異論はないのでしょうか。私は永年日本の海軍は世界の情勢をよく理解していると聞かされていましたが」

「それは勿論異論もあるようです。しかしこれ以上海軍が自重論をつづければ、右翼団体の動きなどに火がついて、米内とか山本五十六とかいような海軍の中心人物の身辺まで危うくなるのではないのでしょうか」

「ふむ。米内、山本という人々は偉い提督だとは聞いていたが、それほど政治の方にも力を持っている人なのですか」

日本の政治界、軍事界の人事には疎い陳公博が不審な様子でたずねた。

「そうです。絶対的な人望、といってよいでしょうね。たとえば海南島の問題にしても同様です。もしもこの二人が本気になって、『いま、南進に手をつけては日本のためにならぬ』と、本気になって押えれば、海軍は必ず納まりますよ。そこが陸軍とちがう所です。しかし仮りにこの二人が『陸軍のやつは怪しからん。取るだけの獲物は取ってしまったって、海軍には一皿も残して置か

ん』などと考えたら、万事がそれでお終いになりますな。ところが生憎今は陸軍と海軍との仲はあまりよくないから、米内も山本もそこまで表面には出しゃばって来ないでしょうな」

「どうもお話を聞いていると、お国の海軍もどこか徹底味を欠いていますな」

「いや、大体日本の海軍というところは昔から癖が一つあるのですよ。原則論をやらせれば実物分りがいいのです。世界の大勢にも明るく、勉強もしていて紳士です。ところが事が一旦具體的な海軍の利害に関して来ると、これはまた極端に海軍本位になってしまうのです。——尤もこれは特に中国勤務の将校だけの話かも知れませんがね。——たとえば、汪先生の和平運動にしても、それが海軍のためにプラスにならなければ、和平政府など出来なくても、こっちの知ったことじゃないという風な現金なところがあるのです。この露骨さにはさすがの中国駐屯の陸軍の猛者連も降参して、ふだんから対海軍外交に苦勞するわけです」

「そんな事情では、影佐先生もなるほど動けませんな」

「いや、私は国のためならば、海軍の感情ぐらい害しても気にはかけませんが」影佐は慎重な言葉で自分——陸軍軍人の立場を説明していた。「しかし実際問題として、ここで陸軍の私が海南島の問題で異論を述べれば、結果としては『内約』のすべてが四分五裂という事になりますよな。——いや、一影佐どころではない。もしもいま南進を阻止すれば、近衛その者も暗殺されるか辞職させられるか、二つに一つというような事になって、しかもその後には反動で、非常に強がりやを云う軍人の総理大臣が登場して来ますな。勿論その場合には南進でも北進でも極端に烈しいかたちをとるでしょう。——この点を畑陸軍大臣が心配して、私にこんどは自重させたのだろ

うと思ひます。まったく、大切な時に梅機関の責任者の私が、この問題を要領よく逃げ廻っているような恰好に見えて、私は実に心苦しいのです。こんな苦しい立場に立った事は生れてはじめてです」

「どうですか」と汪は影佐の苦衷に動かされてか、座をまとめにかかった。「差し当りの實際問題として、誰が須賀少将と折衝する事にきめますか」

「そりゃあ懇意でもあるし、周さんだろう」

「いやあ、勘弁してくれ」と周は悲鳴をあげた。「あの人の善いお爺さんをいじめるのは真平だよ」

須賀は純情高潔な独身の老提督であった。彼は半生の間揚子江をまるでわが家の廊下のように心得て親しみ、一目見ただけでその流域の地理を暗記していた。海軍本省でもその人柄を買って、『須賀ならば一生中国人に嫌われる筈がない』と信じていた。しかし、そうかと云って理論闘争などは土台が不適任で、その相手に指名されかかった周仏海が逃げ廻るのも無理はない。

「なるほど海軍は頭がいい」と影佐が今さら気がついたように感心した。「海南島の問題が理屈ではまったく無理だと知りぬいているから、須賀老の人格を表に立てて差し向けたのだな。こりゃあいら」

「笑い事じゃありませんよ。須賀さんのような神様をやり込めたら、天罰の酬いがありますよ」

「それほど立派な人なら、私がお相手をしましょうか」と陳公博が云い出した。「私は行きがかりもないし、かえっていいでしょう」

みな、正直のところ、陳のこの一言で生き返ったような顔色を見せた。

「そこで、先刻の外交論に立ち戻るようですが」汪精衛はまだ納得が行かぬらしく、また質問をはじめた。「私から見れば、日本の南進政策というものはただ英米仏を團結させてしまっただけであって、それを喜ぶのはそれこそ蔣介石と共産党だと思ふのですが、この辺は一体近衛さんはどう考へているのでしょうか。日本が南進をやっても、アメリカがいよいよ怒り出すとは見ていないのでしょうか」

「それは見ているのです。しかしアメリカは非常に怒るが、すぐ戦争にはなるまいと見ているのです。それよりかアメリカの昨今の経済断交政策が実は日本には非常に痛いのです。それで近衛さんとしては『あまりジリジリ首を締めると暴れ出すぞ』という意志表示に南進政策を打ち出してアメリカに開き直ろうというのです。しかし日本一国では脅かしの利き目が少ないというので、ドイツ・イタリイと組んで、その圧力でもってアメリカに緩和政策への転向を考えさせようとしているのです。つまり独伊との同盟は平和目的のためだという、変な理屈がそこに生れて来ているのです。しかし、海軍としてはそのアメリカの緩和政策のうちで、石油さえ緩めて貰えれば実は文句はないのです。陸軍はまたここで海軍に同調して、恩を一つ着せておけば文句はないのです。要するに国運を賭しての大変な火遊びがいま東京では始まろうとしているのです」

このような事情から、汪の片腕とも云うべき陳公博が海軍代表の須賀少将と、一対一の差し向いで渡りあう事になったのであるが、両者とも捨て身のかたちで一步も後へは引かない。ところ

屑籠に投げ棄てていた。その何の感情もあらわさない動作が、この困難の多かった一年を静かに振り返ろうとしている私の心持と、まったく対照的であった。しかし、すぐ後ろの廊下や倉庫には人のはげしく往来する足音がすでに起っていた。それは日本側と汪精衛側と双方の属官たちが、引き続き行われる筈の青島会議チンタウの準備の荷造りに早速忙しく取りかかっていたからである。

が、この会談の將に決裂直前というところで最後に乗り出して、頑強な陳をようやく宥なだめたのは他でもない、汪精衛その人であった。これにはすべての和平関係者が失望した。丁度、東京でいつも首相の代りに英文の公文書を書いている小畑薫良が上海を視察中であったが、この穏和な英文学者ですら、「汪精衛はいつも大切なところで譲歩し過ぎる」と歎息していた。ともかくも事情はどうあれ、「北守、非南進」の日本の一貫した国策は、ここに無慚にも最後の痕を絶ったのである。

このようにして「内約」は惨敗した。前にも書いたとおり、「内約」の議題は北辺からはじまって中国の地理の順序に従って中部から南方へと書き並べてあったから、最南端に位する海南島の議論が終った瞬間に、この部厚な一冊の最終ページが閉じられた。悪戦苦闘の一冊であった。それでも双方の委員がやっと肩の荷を下ろした面持で署名を行った時は、もう歳末ぎりぎりの十二月三十日の、それも薄暮の事であった。誰もかえり見ない薄暗い隅の壁に、日本流の松飾が空しく垂れ下がっていた。列席者のうち影佐、須賀、矢野、私、それに中国側は周仏海、梅思平、林柏生、周隆庠が署名を終えて心ばかりの乾杯を交わしたが、康紹武も莊知正も病氣欠席という口実でその場には姿を見せておらず、これまでのいかなる納めの会にくらべても談笑の少ない、静まり返った会合であった。その遅い会合が終ると、帰宅を急いでいる掃除婦たちが待ちかねたように部屋のなかに流れ込んで来て、皿や碗を騒々しく片づけはじめた。そのうちの一人は柱にかかっている大きなカレンダーの「十二月三十日」と書いてある日付の紙を、手馴れた素早さで

康紹武遂に去る

不吉な予告

早いものである。上海に住みついてから二度目のクリスマスを、私は独り住居で静かに迎えていた。康紹武も同様である。彼はよい口実さえあれば私に会って孤独感を紛らせたいたのであろう。私の宿のキャセイ・ホテル宛てに、例のナイト・クラブのシロスの特別招待状を届けて来た。それはピカピカ光る十字架が柵の葉のみどりとポインセチヤの葉の紅とに取り囲まれている模様の、金文字づくめの派手なカードであって、「敬頌 聖降誕」と銘打つてある。それで、私も黒つばい礼服に着替えて指定の時間に出かけて見た。すると、ホールの入口で目ざとく私をみとめた張偉珠は、祝祭の日らしく金紙のトルコ帽を斜にかぶった儘、ジングルベルの音楽と仮面や紙テープとの雑沓をかきわけながら急ぎ足で近づいて来た。明るい空いろの緞子の他所行きで着飾った、一段と美しい今宵の張小姐である。彼女はいきなり、痾高い声を張りあげた。

「まあ、惜しいこと。ほんのひと足違いでした。康先生は今しがたメッセージを書きのこして、お帰りになりましたわ」

「はてな、僕が時間をまちがえたのかな」

「いいえ、あなたは時間きっちり、厳守なのよ。康先生の方が早過ぎたんだわ。康先生、今夜は何かお身体でもわるいのじゃなくって？」

「なぜですか」

「先生は御自分のほうが早過ぎたのに、なぜか始終いらいらしていらっしやるのよ。何度も時計を見たり、見馴れないお客が入って来ると、いちいち、『あれは誰だ』とお聞きになったり——それはクリスマスの特例週間なのだからいろいろなお客さんが見えますわ。——そのうちに、康先生は不意に立ち上って、このメッセージをお書きになると、急いで出ていらしたのよ。これがその紙ですけれど」

私は、偉珠の香水のうつり香を感じながら、手渡された紙片を読んだ。

「今まで待っていた。今夜はここは少し都合がわるい。例の回教料理の洪長興で待つ」

と書いてある。偉珠も横から、紙片をのぞき込んで、

「ああ、洪長興なら電話番号は控えてあります。すみませんけれど、こちらへいらっしやって下さ。つい今しがたまであなたのお席もお取りしてあったんですけれど。——ほんとに今夜はわるいわ」

偉珠はしきりに詫びながらバアの台板の前に竝んでいる椅子の一つへ私を招じると、手取り

早く自分の署名で私のためにウイスキー・ソーダをあつらえ、その合間にダイヤルを廻して洪長興へ電話をかけていた。しかし、先方がどうやら話中らしく、なかなか通じない。それで、今度はハンド・バッグのなかから小さな手帖を取り出して、康の自宅の番号を見つけると、早速そこへも電話していた。が、康の家はみんなが留守の様子で、受話器には電話器のベルの音が同じ間隔をおいて繰り返されるのが聞えるだけである。こちらの騒音とは反対に、夜気の沁みわたるような空家の静けさである。

偉珠はさらに、表玄関の車馬係のボーイを呼んで、康の帰るのを見かけたかどうか、訊していた。するとボーイの云うには、たしかに先刻見かけたが、どうも平常と変っているのは、自動車のなかに大きな犬を待たして、一緒にフランス租界の方向へ去って行ったと云う。

「犬をこんな所へ連れて？ それは変だな。——とにかく、僕はこれから洪長興へ行って見ます」

「行って御覧になる？ お気をつけて行っていらっしやう」

偉珠はそのまま私を送って出た。彼女は、それが女の人の流行らしく、暖かそうなカーディガンの袖を故意とおさぬず、ぞんざいに羽織っていた。そして玄関まで来ると、誰が見ても異様には感じぬ程度の軽い握手をした。

「ほんとうはわたし、知っているのよ」

「何をです」

「康先生は誰かをこわがっていらっしやるんだわ」

「誰ですか」

「誰だか。それは知らないけれど。——康先生のお仕事は、ひとを用心しなければならぬお仕事らしいわ」

私は返事に迷い、ただ微笑していた。

「うちの大班も、それは夙うから察していたわ。バーテンダーのお爺さんも。それからもう一人」

「もう一人？」

「ええ、もう一人。このわたしも。——みんな黙って、知らん顔しているだけなんだわ」

こんどは偉珠が頬笑む番だった。

「みんな康先生をそれとなく大事にしているわ。——あなたもお気をつけて下さいね。ここへも、ひとりではいらっしやらない方がいいわ。今夜は、護衛のような方は見えていないの？」

何事もひとりで承知のうえなのだ。しかし偉珠はもう一度、客を送り出す時にやる、型どおりの握手をした。

「またいらして下さいな。改めてゆっくり。——お待ちしているわ」

私は偉珠にあらためて礼を述べて外へ出たが、半町も走らぬうちに、向い側の競馬場の角に公衆電話のあるのを見つけた。私は車を停めてボックスに入り、すぐさま康の自宅へ電話をかけて見た。しかし、これもやはり偉珠の云ったとおり、無人の空家にベルの音が鳴りわたる様子であった。と、私があきらめて受話器を置こうとした瞬間に、先方の誰かがそっと電話口に出た気配であ

る。そして不思議な事に、康に連れられて外出した筈の犬の唸る声^{うな}が低く聞え、それをそっと制する声と一緒に電話はぶつ切り切れてしまった。あとは幾度かけても取り次ぐ者は出て来ない。

私はこの奇怪な出来事のために、次第に妙な恐怖に襲われて来た。あいにく電話室の周囲は真っ暗なのに、そのボックスだけは電燈で明るく浮き出されている。四方の闇のなかに、誰かがこちらを黙って監視しているような妄想が起る。闇のなかの眼はだんだん殖えて行く。——自分でも錯覚だとは知りながら、その錯覚を押える力を失って来ている。私は電話室を急いで出ると、運転手を促してホテルへ急速力で疾走させた。そして部屋に入るとすぐに交換台へ連絡して、明朝までいかなる電話も取り次がぬように頼み、そのまま睡眠薬を飲んで寝込んでしまった。

翌くる朝、私が眼を覚ました時には、もう太陽が眩しく寝台の裾まで差し込み、絨氈のうえに舞うホコリが光線に浮き出されて明るい斜線を描いていた。その時、私は扉の下にそっと挿し込んだある電話交換台からのメッセージの紙片を見つけ出した。これによると、明け方の二時ごろ、女の声で私の在否を尋ねた者があるという事だ。私は思いついて受話器を取り上げ、康に昨夜の出来事の真相をきいて見ようと考えた。が、何か康からは明確な返事が得られそうにもない豫感があって、それが私を押しとどめた。……

不思議な夜の行き違いについての釈明を聞かぬうちに、また康から呼び出しがかかって来た。

やはり洪長興で晩飯を一緒に楽しみながら、少し込み入った話をしたという事だ。出かけて見ると、相変らず羊肉を炙る白い煙が店じゅうに立ちのぼっているなかに、寒い晩のことで、康は

私を待ちながら老酒を嗜んだと見え、赤々とおこっている炭火の照り返しを受けて、めずらしく血色のよい顔つきをしていた。その晩はどういうものか莊知正が同席して、康の酒盃を助けていた。

康の話というのは、なるほど言葉のとおり込み入ったものであった。彼はすでにわれわれのやっていた内約の折衝には匙を投げていた。あまりにも最初の近衛声明にくらべて内容が違っている。このうえは、残る手段はただ一つ——君と二人で重慶へ乗り込んで、直接蔣さんと和平の話を作り直すほかはない。その際はここにいる莊君も同行すると云っている。ともかくも、そうならば最上の大切なお客さんだから、重慶での君の生命の安全は絶対に保証する。——こういう話である。

康がさらに付け加えて云うには、これは君の友情に甘えての小さい頼み事だが、重慶のような奥地へ行くとなると医薬にも事を欠く。就ては、僕の妻のために築地の聖ルカ病院で処方箋を保管してある錠劑を一瓶貰って来てくれまいか。その処方箋は東京駐在の大使館書記官だった僕の友人の邵君の細君の名義になっている。邵君の名前の中国音はシャオだ。ミセス・W・A・シャオの錠劑と云えばわかるそうだ。それと、これは一層云にくい私事なんだが、三越の本店でワイシャツを半ダースほど買って来てくれ。大きさは丁度君と同じやつでいいのだ。何から何まで君に甘えての話で、本当に相済まない。諒承してくれ。——

意外な康の申し出に、私は驚き入ったが、しかし私も卒直に自分の考をさらけ出して話して見た。「君の今の打ち明け話はよくよく僕を見込んでの事だと思って、その点、ありがたいと思っ

ている。薬とワイシャツは早速取り寄せよう。ところで、問題は重慶行きの事だが、僕もかつては君と一緒に蔣さんに會う空想を抱いたこともある。それは君が最初に東京に来た、あの頃の話だ。しかし、現在の蔣さんはもう日米戦争待ちという方向へはつきり踏み切っているのじゃないか？ 君が匙を投げた日本に、蔣さんがまだ匙を投げずにいるという事はどうも考えられない。それに、いくら僕の生命を保護してくれる蔣さんでも、僕に通信の自由までは認めてくれないだろう。問題はそこだ。そうなると、折角重慶まで乗り込んでも、僕は和平の可能性なぞについて、上海や東京に知らせる事が出来ないというわけだ。仮に蔣さんが特別の好意で僕をこの上海に送り返してくれたとしても、僕は敵方の首都に滞在していたという廉で、早速逮捕監禁、そして軍事裁判という事になるだろう。これでは何にもならない。この二つの点について、君もひとつ研究して見てくれ。僕も咄嗟に思い付いた返事だから、まだまだいい智恵が浮かぶかも知れない。とにかく、出来るだけ君の好意に添うように苦心して見る。君も僕も愛国者に変りはない。君が国のために捨て身になるなら、僕も御同様だ。……」

康は用談が終つた後も、老酒の数杯で快活になったせいも、このまま私を離したくない様子であった。彼は珍しく酔漢らしい手つきで私の背を押し出すようにしながら、夜寒のきびしい戸外に出た。彼も私も思わず外套の襟を立て、夜目にも見える白い息を吐いた。

「そうそう。ケンさん。一度僕の家も見ておいて貰おうか」と、康は突然思いついたように云い出した。「何かの連絡のときにも都合がいいからね」

彼は学生か何かのように私の肩に手を載せながら、引っ張るようにしてフランス租界の寓居に

私は何度か寝返りを打ちながら、この苦悩を影佐に打ち明けたものかどうか、ひとりできまぎまに迷った。しかし影佐は、彼にしては珍しく康に對して厳格な批判を抱いており、決して容赦をしない。その結果康は憲兵によって毒殺されるか射殺されるか。しかしそういう事態は少しも汪陣営にとつてプラスにならないばかりでなく、汪幕下の年若い同志はそれこそ民族の血を公然と湧き立たせて、この薄命の先輩の横死を心から悼むであろう。復讐をも誓うであろう。それが理窟抜きの本能というものである。あげくの果ては、汪のもとに一致団結どころの話ではない。憤激のあまり脱退者は相次いで現われるであろう。ましてや頭の働きの早い康の事である。彼にして見れば、あくまでも裏切者という烙印を終生捺されるのを避けて、あの東京の古河邸での毒殺未遂事件を必死になつて宣伝する事だろう。これこそ彼の捨て身の自己防衛手段であつて、これを聞くすべての中国人は、康の人間としての生きる権利に共感して、彼の採つた脱出という方法をただちに是認するだろう。これでは萬事が藪蛇である。そして何よりも、汪精衛その人の声望は大きく傷つくに違いない。このように考えると、このところは、後でどんな非難を受けようとも、康の脱退を黙認して自分ひとりの胸におさめて置くより他はない。——そうだ。それに定めた。こう私が決心した時は、すでに明け方の薄青いあかりが窓の外一面に靄のように柔かく逼っていた。まことに寝苦しい一夜であつた。

連れて行つた。或いは近々のうちに起るべき緊急の事態を予感しての事であろうか。しかし私も、これが最初で最後の訪問になるかも知れないと、不吉な事を考えながら従つて行つた。ところが、人気もなく静まり返っている康の家の闕をひとつ蹴いで、私は驚いた。その室内のすべての防衛設備があまりにも康らしく細心を極めていたのである。たとえば康の寢室の隅には公衆電話のような形の鉄筋防弾ガラスという物々しい装置でボックスが出来ており、万一襲撃者が不意に侵入して来た場合には、康はそのボックスに飛び込んでいち早く床下から庭先へ逃げられるばかりではなく、逃げるついでに手榴弾の一つぐらひは逆に室内めがけて投げつける事の出来る仕掛けである。さすがは私に暗殺防衛術を細かく伝授した人物だけの事はある。しかし、私のもっと驚いた事がある。それは康に案内されて庭に出た時に、暗闇の芝生からシェパードのたくましい声に迎えられた事だ。その声はたしかに聞き覚えがある。聞き覚えのある筈だ。この犬は嘗て私たちが汪精衛救出しのために仏印領河内に赴いた時に、參謀本部の臼井中佐が血統証明書付きの、当時日本で一番高価なやつを手に入れて、汪の護衛用にと届けた筈の、あのシェパードではないか。それが何時どのようなにして、康の所有に變つたかは見当がつかない。ともかくも、私は茫然として、康に甘えている小牛のような優良犬を見守つていた。康の一面にはこのような遠慮会釈のない、浙江人特有のねばり強さがあつた。エゴがあつた。ここに康の行動の秘訣がある。

私はその夜床に入つてからも、康に對する処置をあれこれと思ひめぐんで一睡もしなかつた。

起るべき事遂に起る

正月六日の朝であった。いずれは起るべき事がとうとう起った。私がホテルで洗面をしていると、憲兵の丸山准尉と松尾軍曹が顔いろを変えて入って来た。そして康紹武と莊知正が昨夜のうちに上海から姿を消したと報告した。

私はその瞬間、あまり衝撃を受けず、石鹸をゆっくり使いながら、凍ったような戸外の灰いろの景色をぼんやり眺めていた。

ややあって、「勝手にしろ」私は不意にこう叫ぼうとした。

全力を尽して治療につとめた医者——そういう気持が私の気持であった。

やはり治療の努力が実らず、患者は去って行っただか。飛ぶ鳥あつとを濁さずに行ってくれたかな、と思つた。綺麗に去ってくれたのだとよいが、と考えた。

私は取りあえず丸山に依頼して、「梅華堂」の本棚に藏つてある「内約」の書類に異状があるかどうかを調べさせることにした。

私の念頭に浮んだ事は、やはり日本側で逮捕したり射殺したりする者が現われないでよかつた、そんな事をすれば恥の上塗りだった、という事であった。勿論、情報はすでに二人の口から漏れているだろう。しかし問題の証據書類さえ彼等の手に入っていないければ、先ず心配はない。

私は洗面を終えてから、梅華堂に出かけて行つた。随分、康とは毎日毎日の長い縁だった。あ

のくらい私に手数をかけさせたやつもなかつた、こうしみじみ考えた。そして何か疲れが一時に出て来たように感じた。

するとその後、一月九日になつて、丁度香港の自宅で新年の休暇を取つていた陳公博のところ、康と莊とが突然訪ねて来たそうである。面接した陳が大いに不心得を責めたところ、莊は和平陣営に戻るが、康はどうしても外遊すると云つてきかない。——こういう電報が陳から汪にとどいた。私はこれが康の本音だと思つた。かつて康が東京の隅田川の家で、「世界のどこまでも、僕はこの和平の正しい考え方を守つて生きて行きますよ。日本人の毒薬などでは決して死にませんよ」と声を張り上げた、あの光景を思い浮べたのである。

さらに二、三日後の事である。康と莊とが汪精衛に手紙を寄せて、一同を騒がせた事を詫びると同時に、決して事を共にした同志の機密を売るような事はないから諒承してくれ、と云つて来たそうである。これで先ずひと安心だ。——私は気分を変えるために、青島へ旅に出ようと考へた。久しぶりで汽船に乗つて海の大気を吸うのが楽しみであった。青島の会議というのは、前にも書いたとおり、人事専門の会議であつて、汪の中央政府と地方政権との關係の割り振りを定めるのが議題であり、しかも華北の日本軍は自分たちの推し立てている王克敏を激励叱咤して、汪にはなかなか頭を下げさせぬ仕組みにしているという話で、私には興味の少ない会議ではあるが、康をととう脱落させた寂寥を忘れるという意味で出かける事にした。私は青島では、会議場に予定されてある、昔のドイツ総督の官邸に寝泊りすることになった。それは家中どこもかしこもガラス窓づくめの、そして熱帯植物の鉢植の居並んでいる大きな館である。そこではやがて地方

政権の獵官運動の連中が齡にも恥じず、廊下や空き部屋のあちこちで耳打ち話を頻々と行なう事であろう。しかし、そういう事にはまことに向かない丘のうえの明朗な建物である。

ところが一月の二十三日であった。市外の海光寺という名の見張らしのよい菜館で、清水、矢野、扇、それに神尾茂老人というような顔触れで賑やかな昼食をとっていると、周仏海から私に電話がかかって、「今すぐ行く」という。待っていると、十分もたたぬうちに周が来て、「実に、日本の皆さんに相済まない」と云いながら、二三枚の原稿紙をポケットから出し、「まったく責任を感じる。私は泣いた」こう云って、その紙を私に手渡した。それは周がいま受け取ったばかりの重慶の大公報（政府の機関紙）の記事全文を伝えた電報だ。その大公報の記事は、康と莊とがある。その協定は「全文が秘かに撮影されて、重慶政府に送られた」と註釈が書き添えてある。周に聞けば、なるほどそう云われて見ると、康は十二月に入ってから、一度関係書類をひと晩自宅に持ち帰った事があったようだと云う。

周は悲痛な声をこらえて、

「この運動は康君と私と、それに梅君と莊君とが加わって始めたものです。それが二人ぬけて、あと二人きりになりました。汪先生は二度も彼等に真剣に忠告しましたが、やはり駄目でした」
湖南人らしく多感な周は、とうとう私の目の前ですすり泣きをはじめた。

「しかし周さん、これは本當の全文ではないじゃないか。君も知っているとおりに、これを土台にして随分改善したんじゃないか。その真相を公表して応戦に転じなくては駄目だ。泣いていては

周さん、負けだよ」

慰めにかかった矢野は、だんだんイキリ立って、周を叱咤するような語調になった。

「いや、応戦ばかりじゃない。われわれだって、すぐ反撃に移りますよ」

「そうだ、反撃だよ。僕らのこの仕事は、毎日喰うか、喰われるかの連続だよ」

周はこの言葉を聞くと、何者かに立ち向うかのように顔を挙げ、唇を引き締め、気力を取り直して力強くうなずいた。そして、彼等はその席でただちに具体的な善後策の打ち合わせに入った。……

これは後の話になるが、上海に帰ってから私がシロスの張偉珠にそつと聞き訊したところを——私の想像をも混ぜて——総合すると、謝大班の親分の杜月笙は康を庇護して「内約」に関する書類の一切を手元にあずかり、蔣介石に対しては康の処罰を猶予させ、さらに自から旅費を工面して康をアメリカに行かせるらしいという事である。その場合、康が私に重慶行きをすすめたという事実は、図らずも康にとって情狀酌量の好い材料になったらしい。これは私ひとりの臆測ではなさそうである。

日米戦争必死の喰止め

私を付け覗う男

久しぶりの上海である。博多で台風に出会ったために四五日旅館に閉じ込められたあげくの快晴だ。揚子江の巨きい河口で何涇も外海へ末広がりひろがっている黄いろの濁流にくらべて、岸辺の平たい畑地の肥えた緑がいかにも穏やかな対象をつくっていた。飛行機はそのうえを、ほとんど車輪が地面につくかと思われるほどの低空で飛んで行った。耕作をしている男たちはみな手を休めて仰向いている。やはり上海に帰ったのだな、と私は思った。

私はホテルの帳場に着くと、留守の間に溜った伝言の紙片の一束を受け取った。驚いたことに、その中には張偉珠からのメッセージが三枚も混っていた。しかしこれは夕方にならないと連絡のつく当てがない。私は思いついて、南京の影佐の公舎に長距離電話をかけて見た。影佐も私を待ちあぐんでいた様子であったが、「この次ぎの日曜日にそちらへ出向いて行く。ちょっと話が溜

っているが、それまで南京には来ないで、待っていてくれ」という注文である。どうも影佐は来客に煩わされずに、二人きりで話したいらしい。

夕方になって、私はフレンチクラブにいる偉珠と連絡がとれた。私は交換台で教えられたとおり、中庭の構内電話へ偉珠の名前を通じた。そこからはテニスの球のやりとりの弾力のある軽い音が、規則正しい間隔をおいて程近い距離から受話器に入ってきていた。

「お帰りなさい」いきなり、男の子のような偉珠の声が聞こえた。偉珠は蘇州訛のつよい北京官話と英語とをまぜて話しかけた。「旅行が予定より長引きましたね」

「ええ。九州で台風に出会ってしまったね。それで宿屋に閉じ込められていたんです」

「それならいいけれど……」

と云いかけて、偉珠は何かしきりと烈しい息づかいをしていた。

「何ですか、その息づかいは」

「いまお友達と運動をしていたんです。何の運動だが、当てる御覧なさい」

その途端に、すぐ傍で大きな水音が起った。

「いまこの音のすぐ横にいるんです」

「水泳プールだな」

「そうです。今のは飛板飛込の音です。私の方はいま、お友達に背中の日焼けしたところへ薬を塗ってもらっているのよ。火傷のようにヒリヒリ痛みますよ」

と云いかけて矢先きに、偉珠は突然、「痛い。痛い」と上海語まる出しに悲鳴をあげた。

と、同時に水しぶきを上げてプールに飛び込む音が響いた。女の子が二三人、甲高い声でハヤシ立っているのが聞えていた。

「ごめんなさいね。塗り薬で背中が急に火のようになったので、思わず、水に飛び込んでしまったんです」と、再び偉珠の声である。「ひどいわ。——でも、やっとよくなりました」

「そこで、早速なんだが、留守中に二三度ホテルへメッセージをいただいたそうだが、何か急用でしたか」

「ええ、ちよつとね。——そちら御迷惑でしたか」

「いや、そんな事はありません。有り難かったですよ。それで、用件というのは何ですか」

「それがね。——いいわ、あとであなたのいらっしゃる所へまいりますよ」

「シロスへですか」

「シロスでない方がいいのです。——じゃあ、こうしましょう。国際飯店は御存知でしたね」

「パークホテルの事でしょう。競場場の前の」

「ええ、シロスのすぐ横の。——あすこの十五階のロビーでお目にかかりましょう。あすこはいい風が入りますよ」

「何時という事にするんですか」

「いまは何時でしょう。——ああ、そうね、これからすぐにシャワーを浴びて、ちよつと着替えて——そう、六時きっちり十五階へあがりますわ」

約束の時間に女の人を待たせてはいけないという作法の、英国風に厳しく実行されている上海

の事だから、私は少し早目に国際飯店に出かけて行った。国際飯店、英名はパークホテル。——黒い大理石を磨いて積木細工のように十九階まで聳え立たせたような細長い高樓である。このホテルの第一の御馳走は「吹きぬき風だ」と、落成式の際にノースチャイナ・デイリーニュース紙が書いたそうだが、なるほど十五階目のナイトクラブのロビイまでエレベーターで釣り上げられて行く客達は、上海が海辺都市なのだという感想を、今さらにあらためて抱くそうである。開け放たれた窓をとおしてこの都市の南半分が遠く黄浦江の上流にあたる徐家匯大寺院のゴシックの尖塔のあたりまで展望されて、何となく塩分を含んだ風——たしかに川風ではない——その東南風がこの階まで上って来る客の顔に絶え間なく当るのだ。暖炉の両側に飾ってある「月到天心処。風来水面時」と書いた宋人の五言詩の双聯のとりの趣である。

偉珠は今までブルサイドにいたとは思われないほどの化粧をほどこし、白絹の晴れ着に着替えてエレベーターの扉を出て来た。さすがに肌は小麦いろに焼けていた。シャワーを浴びた直後のことで、偉珠はひとしきり汗ばみ、髪を風になびかせて窓際に立っていた。彼女は好みのクライヴン・Aに火をつけ、煙が相手の顔にかからぬように、つつましく喫んでいた。

「久しぶりで十五階へ来たわ。やはりいい景色ね。——わたしの職場のシロスほどの辺かしら」

「あの屋根でしょう。——この窓の右のすぐ下に見えている平屋ですよ」

「まあ、昼間見ると汚いのね」

「どこの街でもナイトクラブなどというものはあんなものですよ」

二人はその窓際に並んで立った儘、はじめて用件に入った。偉珠の話は異様なものであった。

彼女の話によると、私の旅行中にひと目で軍人とわかる背広姿の日本人が私を二度ばかり捜しに来た。しかし予て康から注意を与えられていた玄関のボーイは、康の云いつけどおり、私の泊らぬ旅館と私の行かぬナイトクラブの名をその日本人に教えたらしい。で、その男は手持不沙汰のかたちで酒場の台板に倚りかかり、ビールを飲みながら誘導訊問のような世間話を持ちかけて来たが、バアテンダーは言葉がよく通ぜぬ振りをして帰らせたという。

「誰だろう。その変なやつは」

「軍人だって事は確かだけれど、憲兵じゃないらしいって話よ。——もともと憲兵が怠け者だから自分がこうやって乗り出して捜しに来ているんだ、というような事を云っていたそうですわ」

「それも嘘かも知れないが、——まあ用心に越した事はない。いろいろどうもありがとう」

「そうそう。その男は康先生の事をきいていたそうです。康さんとはいつも一緒に来ていたろうと、しつこく尋ねていたそうです」

「それで」

「バアテンダーが、康先生という方はお見えにならないと云ったら、『来ない筈だ。教えてやろうか。康はもう上海にいないよ』と云っていたそうです。ひと通り何でも調べちゃいるのね」

ふと思いつくことがあって、私は藁で冷たい飲み物をすすっている偉珠の顔を見上げた。

「康君がいなくなっただけから、シロスには何か便りがあったでしょう」

「ええ、ありましたわ。うちの大班のところへ香港からお礼状が来ていたわ」

「へえ、やはり大班とは随分懇意だったのだな。康さん、どんな事を書いて来たんです」

「まあ結局、世話になったというお礼が主らしいわね」

「ふーむ。お礼ね。——何かこれからの旅行の予定でも書いてありませんでしたか」

「それは無かったようよ。でも——云ってもいいのかしら——あなたの事を心配していらしたそうよ。こんど見えたなら、自分の代りに大事にしてくれって書いてあったそうです。大班は感心していましたわ。随分仲がよろしいようね」

「誰と」

「あなたとよ。——林先生リンシヤンともう一度ゆっくりシロスへ出かけたかったが、憲兵の監視が厳しくなつて来たような気がしたので、黙って香港へ来てしまった、残念だった、というような意味の事が書いてあったそうです。ほんとにあなたの傍にいられなくなって残念そうね」

林リンというのは上海での私の仮名であった。もつとも終いには、前にもちよつと書いたとおり、謝も偉珠もそれが仮名であることはよく知っていて、一向利き目はなかったようだが……。

「ははあ。それで康先生。あのクリスマス祭の時に、妙に落ち着かなかつたのだな。自動車のなかへ番犬を連れて来たり、電話の取次ぎを曖昧にしたりして」

私はあの歳末の寒い晩の無気味な光景の連続をありありと思い出していた。

「あれはどうもそうらしいのよ。あとですぐ詫びの電話をかけていらっしやいましたから」

「君は随分いちいち詳しいのに、今まで黙っていたんですね」

「だってあなたがちよつともお見えにならなかつたんじゃないやありませんか。それは無理だわ」

もう西日が町の家並みのうしろに落ちようとしていた。その家並みに取り囲まれた競馬場の美

しい楕円形の芝生では、赤や黄の帽子をかぶったイギリス人の家族らしい人影が乗馬の練習をやっていた。人も馬も非常に長い影を芝生のみどりのうえに落して、小さい玩具のように動いている。影の長さから見て、そろそろナイトクラブの開場の時刻である。

と、黄浦江の栈橋の方角から、船の汽笛の音が重たく聞こえて来た。汽笛は二三度繰り返された。

「正確なものね」と、偉珠は腕時計を眺めた。「あれはバタフィールドの定期船よ」

「どうして分るのですか」

「汽笛の繰り返し方だね。——ほんとうは、わたしの前の主人がバタフィールドの機関士なので、わたしは離婚している女なのよ」

二人はちよつと黙った。

「小さい子供が一人居るので、暮らしのためにシロスへ働きに出ているのです」

「それじゃあ、まだ当分は働くわけですね」

「そうなるでしょうね。よく分らないけれど。——でも来年になったら、ダンサーの方の取締か、女事務員の方の監督か、とにかくそんな風の者にしてやると、うちの大班が云ってくれているよ。そうなれば家計の方も、少しはひと息つきますわ。わたしはこれで、お客さんにあまり無駄なお金を使わせないように気を使ひがあるのよ。それで、大班にちよつと信用があるのです。

——そうなれば少しは気楽にフレンチクラブであなたのお相手が出来ますわ。——楽しみだわ」

「それは吉報ですね。どっち道、変なやつが私を捜しに来るようでは、シロスには行かれないね」

「やあ、今日は君に相談があつて来たのだが」影佐はいきなりこう云つて、上着を脱いで兵隊シヤツ一枚になりながら、ソファのうゑに長々と足を投げ出した。「それに二つほど報告もある。——まず用談から先きにするが、実は早速で不愉快な話なんだが、君に当分南京に来て貰わん方が安心なのだ。というのは、石原少将と非常に親しくしている浅野健二君から注意があつたんだ。浅野君の話だと、南京の総司令部に転任して来た例の変り者の築地参謀が、憲兵隊へやつて来て、『犬養をしばる口実はないか。あいつの今考えている事はわれわれの方針の邪魔になるのだが』と云うのだそうさ。それで、憲兵隊の者が『縛る口実はありません』と断ると、『では、ほんの三日間でいいのだ。参考人か何かの名義で呼んでくれ。その間に一服盛るなり何なりするから』という物騒な話になつたので、早速懇意な憲兵から浅野君に内報して来たのだそうさ。築地はどうも、君が重慶と直接情報の交換をやっていると睨んでいるらしいがね」

「それは、康紹武と始終往き来しているという事かな」

「そうかも知れん。とにかく、あの変り者の参謀のことだから、實際何をやり出すか、分つたものじゃない。まあ君子危きに近寄らずだ。君は大いに不本意だろうが、ここしばらくの間は上海で待機していてくれ」

「待機もいいが、和平条約の方はどうなるんだ」

「会議で君が必要だという時はいつでもすぐに連絡するよ」

「これは誰か裏で筋書を書いているやつがあるな。——実は君の話と一味通じるような出来事が、僕の今度の留守中に起つたんだ」

偉珠は黙つて、何か考え事をしていた。

「もう立秋ですね。プールの閉まるのも間もないでしょう」

「泳ぎの季節がすみますね。早いわね。こんどはテニスだわ」

岸壁の方で汽船の急ぎ立てるような警笛がもう一度長く尾を引いて鳴っていた。いつも定員より大勢の客を乗せて出帆する規則違反の船である。

「さあ、わたしの眼覚まし時計が波止場で鳴っていますわ」偉珠は思い直したように、微かに溜め息をつくと立ち上つた。「わたしは職場へ帰りましょう。今夜もまた蒸暑いのかしら。——それでは、お大事に。あなたのお身体もそうだけれど、あなたのお仕事の方もね——お大事に」

偉珠は意味ありげに微笑しながら、一旦はめたレースの夏手袋を除ると、私にそつと手をさしのべた。シロスと違つて誰にも遠慮の要らぬらしく、長い握手であつた。そして、彼女は降りのエレベーターの中に去つて行つた。

第二和平交渉の全貌

影佐は約束のとおり次の日曜日に南京から出向いて上海の私の宿を訪れた。もう暦のうゑでは秋が立つのだが、暑い。土地の者はこの残暑を秋老虎チュウラウゾウと云う。「猛威をふるう名残りの暑さ」という意味であろう。影佐もその暑さで幾分細っそり瘠せてはいたが、廊下をボーイに案内される間も元氣な声でしゃべりながら、私の部屋に乗り込んで来た。

私は影佐に、シロスへ現われた奇怪な訪問者の話をした。

「ふむ。それは築地の話とは何か関係があるね。そんな事があったのなら猶更の事だ。是非自重してくれ。それに——つい云いそびれてしまったが、興亜院のやつ、逆恨みさかみをやり居って、君の汪政府経済顧問就任を拒絶して来たんだ。しかしこれは君がべつに希望した訳ではないし、こういう小人しょうじんたちのする事を悠々と笑っていてくれ。——失礼だが、君は生活の方はいいのか」

「それは大丈夫だ。ありがたい事に、僕には二代目のつきあいので陳宜君という若手の実業家の友人がいる。これが手堅い男で、僕が南京に行く時に有り金を全部あずけて行くと、留守の間に何んかかんか操作するのだろう、上海へ戻って来る時にはホテル代が十分に足りるくらいに金をふやしておいてくれるのだ。もとはと云えば、僕のおやじが金神父路ベイルーにある陳君の本家に昔滞在していた縁なのだ」

「それは結構だ。では会計の方はその陳君の腕前にまかせておこう。——ところで君に報告する事が二つある。その一つは、いよいよ東京で蒋介石との直接和平工作に手をつけたのだ」

「誰と誰との間で？」

「先方の表面に出ているの宋子良だ。宋子文の弟だ」

「宋子良——あまり評判のいい男じゃないね。世間ではまともに本名で呼んでいないようだが」

「宋子不良というのだろう。聞いているよ。——で、こっちは板垣さん(中シナ総軍参謀長)が名義総代というところだが、実際は例の今井(武夫大佐)と鈴木(卓爾)という中佐が交渉に当たっているのだ。鈴木というのはいまシナ課長をやっている男だ」

「ふーむ。シナ通の今井氏のやっている事を批評してはわるいが、どうも何かピンと来ない話だね。どうして蒋介石がわざわざ宋子良を今ごろ使う必要があるのだろうか」

「ところがこの工作はだんだん馬鹿に大袈裟なものになってしまったんだ。というのは、蒋介石と板垣さんがいよいよ長沙か洞庭湖で会谈しようというところまで話がすすんで来ているのだ」

「随分、話が派手だね。これは驚いたな」

私は中国第一と云われる大湖の水面に、東と西から二台の飛行機が降り立ってしぶきを大きく挙げる光景を想って見た。葦がはげしくそよぎ、水鳥が一斉に飛び立つ。しかしそれはあまりにも絵のように美しく、私の常識には落ち着いた形で映って来ない。そして、こういう第六感第六感は案外たしかなものである。

「そうなんだ。ちょっと現実味を欠いているんだがね。——それで、こちら側の希望としては長沙を主張しているのだが、先方では中立地帯にし易い洞庭湖を固執しているそうさ。しかし、場所はどこに定まるきまるにしろ、板垣さんが行くからには僕も責任上同行しなければならぬ。それで実は君にあらかじめ断りに来たのだ」

「それはどうもありがとう。わざわざ相済まんね」

「ゆうべもしみじみ考えて見たが、こういう場合はいつも君と一緒にいきたいのだ。しかしケンさん、今度は下手をやると、むしろは捕虜になるぞ。その覚悟はきめて置かなくてはならんよ。ところで汪工作なんだが、こんな情勢になって来ると、一層はじめからの問答のやりとりの生き証人が必要になるんだな。また、わしとしても、是非そういう生き証人の種たね

を絶やしたくないのだ。それで今度は君に残って貰いたいのだ。まあ、危険分散の処置だ。久しぶりで君とは別々の行動だな」

「ほんとにいつも一緒だった。ちょっと感慨無量だね」

「すまんが、今度は諒承してくれ。しかし、さすがは板垣さんだ。この宋子良工作のこれまでの経緯を万事わしに話してくれたよ。そしてこれからさきの様子も、いちいち汪さんにその都度知らせると云っていた」

「その点だが、汪さんは一体どんな態度をとっているんだ」

「彼氏はああいう上品な人柄だから、一言も文句は云わん。ただ、『中間報告さえ詳細に承れば私の方には異存はありません』と云うだけだ。しかし、わしの観測から云うと、一言も文句がないという事は、腹の中では随分文句があるものと見ているがね。——そこでわしは周仏海に當って見たんだ。わしは二品ほど周の鑑定を求めたのだ。一つは宋子良と称する男の写真だ。これは実はつい先日鍵穴からそつと写したものだ。もう一つは宋子良が携えて来た蒋介石の親筆と称する手紙の署名だ」

「ほう。周は何と云っていた？」

「周のやつ、笑いながら『本物です』と云うのだ。その笑い方が妙なので、わしは『おい、お互いの仲で水臭いじゃないか』と怒ったのだ。すると周は机の引出しから自分が前に貰っている蒋介石の手紙を出して来て、『これとくらべて見ましよう』と云うのだ。やはり違うね。蔣のサインが違う」

「そのサインなら、僕はよく周から見せられて知っているよ。あの蒋介石の名前の崩し字はちょっと偽筆は出来ないな」

事実、これまでも周は平常来客が途絶えたりすると、机の引き出しから蒋介石の親筆の古い手紙を二三通取り出して私に見せながら、『懐しいねえ』と感に堪えぬように半ば独り言をいうのが常であった。彼はそういう時、かつて侍従室副主任として蔣に仕えていた順調な日の事も忘れかねているような面持であった。それは別として、周の示すこの手紙を見ると、蒋介石の署名はやや特異なものであった。「蔣中正」の三字のうち、中の字と正の字は筆勢あままって続いてしまっている。そのうえ正の字は崩れた草書体になっているのだ。

「そうか。君はよく知っているわけだな。それじゃ説明は要らないが、もう一つの宋子良の御真影と称するものも、鍵穴からの撮影だから断言は出来ないが、宋子良の本物ではないらしいと云う事で、これまたどうもあやしいのだ。汪さんも周も今井と知り合いの仲だから遠慮はしているが、腹の中ではすでにこの工作は及落探点済みとわしは睨んでいるがね」

ボーイが云いつけられた麦酒を運んで来たのをよい折に、影佐は思いついたように航空会社に電話をかけて、夕刻の南京行き最終便の時間をたしかめていた。南京上海間はまだ夜間飛行は禁止されているのである。結局影佐は私のために日帰りで上海に出て来たのだ。

「いろいろ詳しい話を、わざわざどうもありがとう」と、私は鄭重に礼を云った。「いずれ洞庭湖行きの前には南京まで顔を見に行くよ」

「ところが、云いにくいだが、もう一つ別の対蔣直接交渉の話がカチ合ってしまったっているんだ」

「もう一つ？ そりゃ又どういふ事だ」私は驚いて思わず大きな声をたてた。「それは誰がやっているのだ」

「それが、この方は松岡洋右なので始末がわるいよ。だからこの口の方は途中の経過というものが一切わしらには分らん仕組みなのだ。もっとも、この工作に備えて田尻（愛義）が新しく広東総領事に抜擢されたというから、まあ多少不安は減ったというものだ。田尻ならばそう馬鹿な真似はしまいと思うがね」

影佐の話によると、この直接交渉の火元は例の西義頭である。そして西の当の相手は、張競立と云って交通銀行総経理の銭永銘——あの康紹武のそもそも最初の後援者であった銭永銘——の片腕とも称すべき爺さんである。この張老人は永年鉄道材料売買に従事していたから、その縁故で早くから満鉄の南京出張所長の西とも、また交通関係専門銀行の銭永銘とも親しかった。そこで、西は張老人から蒋介石への直接交渉の話を持ちかけられたものである。これは勿論銭の指し金だが、丁度その頃西は汪一派の和平運動の方針に深い不満を抱いていた矢先きであったから、早速この話に乗りに出して松本重治と松岡外相に委細を報告した。松岡も、松本と西からの話ならば別格の扱いという事になり、そのあげくはすでに日華基本条約の折衝が大分すすんでしまっている在南京日本大使館にむかって、条約審議をしばらく足踏みするようにと電命を發した。南京では、阿部大使以下の交渉全員がこれには寝耳に水という形であった。一方、銭永銘は自分ひとりでは心もとないと考えたか、これも対日和平意見を最初から抱いている金城銀行総経理の周作民に委細を語らって仲間に引き入れた。これは周作民に対する蒋介石の信用を大きく評価した結

果だと思われる。とにかく、これが第二の対蔣和平交渉の全貌だ。

「君はこの方の一件をどう見るね」と影佐は、麦酒のために急に血行のよくなった頸すじから胸にかけて団扇の風を忙しく送りながら、私の意見を求めた。「この和平交渉の方が、宋子良のやつよりは実質的には一応役者は揃っているわけだがね」

「結局、万事が汪さんに対する根本的な不信のあらわれだね。まあしかし、放っておいたらどうなのか。——僕の考では、もう蒋介石は太平洋戦争突入待ちという姿勢に入っているとと思うよ。御覧なさい。最近英国大使のカーが雲南の昆明あたりまで長い旅行をして来たのもその準備だろう。それに陸軍の海南島占領の時はどうか。軍事委員会の宣伝部会では共産党代表の周恩來や郭沫若までが列席するような会議を派手に召集して、海南島問題を第二の満洲事変だとアジって英米仏に呼びかけたじゃないか。しかもあの時は、蒋介石自身が御叮嚀にも座長の役を買って出ているよ。——これは影佐さん。しばらく静観しているに限るね。そうすれば宋子良の方は勿論、銭永銘の方も自然と結論が出て来そうに思われるがね。とにかく汪さんの方から癪癪を起さない事だ」

「どうも君の睨んでいるとおりになりそうだな。というのは、近衛さんは鈴木中佐にせがまれるままに親書と写真とを先方に届けさせたそうさ。ところが宋子良はそれを受け取ったままたまの間にか立ち消えのような有様なので、近衛さんは『やはり一杯喰ったか』と云って苦笑のかたちだそうさ。まあ、そんな所が自然の落ちだろう。あとは銭永銘だが、これももう少しの辛抱だ。どっち道、目鼻のつくのを傍観して居ようや」

う訳で、日本政府はかつてその出馬を懇望した汪精衛を、このように最後に至って無価値な傀儡として扱おうとしたのであろうか。結局は日本にハッキリした真の戦争目的がなかったからである。勿論、陸軍では事変の長引くのを心配して何度となく重要会議を開いて見たが、ついぞ一貫した戦争の政治目的というものを決定した事はなかった。ここに問題がある。

なるほど、広い中国が戦場になっている事だから、毎日どこかで一つ一つの戦闘が行なわれていて、それには日本軍がまさしく勝つので、これによって何か目的が一つ達成されたような錯覚が起りやすい。しかし、国全体としての戦争の政治目的はいつの間にか分裂され、徐々に変更されて、ただ日々の戦闘のみが当てもなく末広がりに拡大されてゆくこの実情には、誰もつい気をつく者がない。有っても非常に少数である。要するに戦闘有って戦争無し。——そこに悲劇がある。本文の主人公である影佐禎昭などはもとと統制派の軍人であったが、このようなシナ事変処理の無方針については終始はげしく統制派に反対し、とうとう南太平洋の孤島の司令官として追いやられ、二重の孤独を味わいつつ病を得て死んで行った。

そもそもシナ事変の遠い発端は何であろうか。それは満洲国の無理な建設である。日本は一夜のうちに武力でもって満洲国をつくり、引き続いて華北をも第二の満洲に仕立てようとした。そこで中国には国を挙げての抗日運動が起り、蘆溝橋の小ぜり合いから果てしもない長期戦に入った。しかし北満国境の強化に全力をそいでいる参謀本部は、中国との戦争などはまったく計画のなかに入れていなかったもので、こんな事態には絶対に反対である。近衛はこの参謀本部の態度に元気づけられて、「シナ事変不拡大方針」というものを堂々と発表した。そして蒋介石と直接

ところが十月を半ば過ぎても、この対蔣直接交渉は一向に進展を見せない。見せないどころではない。宋子良工作の方は突然先方から例の「鍵穴撮影事件」の不信行為をあげしく追及して来たあげく、電波の発信が次第に遠ざかって行くように、いつの間にか連絡が途絶えて行った。そのうえ、新陸軍大臣の東条英機がこの工作に反対の意嚮を表明したので——今井の話によると板垣に対する東条の対抗意識のあらわれだというが——この工作が先ず消滅して行った。錢永銘工作の方はというと、これには格別な障害というものも生じないのだが、さればと云って可もなく不可もなく、足踏み状態から一步も進まない。南京ではようやく物情騒然となって来た。ことに松本、西というような嘗ての汪精衛和平運動の古顔がこの新しい工作の主要人物になり変っているという噂が街一帯に拡まって、汪派の動揺は日ましに目立つ有様である。こうなっては阿部大使以下の代表委員も黙ってはいない。「条約の妥結もすぐ眼の前というのに、足踏み命令のまま放って置くとは何事だ。蛇の生なま殺しはやめてくれ」というような批難続出である。とうとう松岡も我を折って、十一月三十日を限りに錢の工作は打ち切らせ、日華基本条約の調印を行なうように命令を発して、汪政府を正式に承認した。それはこの条約の交渉が実質的に完了してから、まる三カ月も経った後の事である。

和平運動の回顧

私はこの辺で、汪精衛の和平運動についてそろそろ回顧する時が来たように思う。一体どうい

話し合いをつける覚悟で南京行き飛行機まで用意した。ところが、蒋介石が「だんだん付けあがる」という理由で、たった三日のうちにその方針を百八十度変更して、満洲から現地へ最強の増援部隊をくり出させたらえに、突然、今後は「蒋介石を相手とせず」という声明まで発表した。蒋介石も随分驚いた事だろうと思う。そのあげくが近衛も後悔はしたが、すぐに取り消しもならず、蔣のかわりに汪精衛を引き出しての和平実現という事になった。

こうやって振り返って行くと、日本の政府も陸軍も、かつて一度も蒋介石を腹の底から憎んだことのないことがよく分る。しかし交戦国の相手の元首を一向憎まない戦争などというものは、およそ変則である。あのイギリスの首相チャーチルはドイツのヒットラー総統に対して、ロンドンの空襲の下で、ダンケルクの総退却のあとで、どんなに激しい怒に燃えたか。憎んでも、憎んでも、まだ足りないという敵愾心を議会の演説であらわしたではないか。イギリス国民はこれで再び奮い立ったのである。こういうのが戦争というものである。日本の陸軍は戦争のあいだ何をしたか。「蔣がわるいのではない。蔣をあすこまで追いつめた中共がわるいのだ」と考えようとしたではないか。また、「いや、蔣を巧みにそそのかすイギリスがわるいのだ」とも考えようとしたではないか。そうかと思うと、「大体汪精衛が無力で見かけ倒しだったから悪いのだ」と考えようとしたではないか。こんな風に憎悪の対象物のたびたび変る戦争というものはない筈である。これは世界史上はじめての変則戦争である。

こういう奇妙な現象は何故起るのだろうか。結局真の相手は蒋介石ではないからである。日本の陸軍にとっての大問題は、実はそれよりも内部抗争の後始末であったからである。彼等は蔣より

も先きに勝たねばならぬ敵を内部に持っていたからである。知つてのとおり、陸軍の統制派は二・二六事件の反乱の後始末に際して、皇道派の目ぼしい者をすべて処罰したり予備役に退けたりして一掃した。ところがこの人事のやり方について、皇道派を中心として激しい不平が日増しにつのって形勢不穏になって来た。そこで統制派としてはこの不穏な空気を国外へ外らす必要があった。このために——非常時——戦争——挙国一致の必要——という方向へ時局を持って行こうとした。そしてこれは成功した。

この統制派は、もともとその名前の起りのとおり、国の政治経済を統制下に置こうという政治好きの軍人の一派であった。しかし世界どこの国を見渡しても、軍人の政治好きというものは何処か一カ所欠けているものである。日本の統制派も、国民を国家革新の方向へ引きずって行くためには、絶えず戦争の起り得る非常事態というものをこしらえて置く必要があると考えていた。しかしソ連相手ではノモンハンで負けたばかりで手強いので、中国あたりの抵抗力が丁度適当だと考えていた。彼等はこのために、戦争の原因を絶えず満洲から華北、華北から上海という風に乗っかって、国民に戦時の意識を強く印象づけ、国家総動員というような強制法をも急いで賛成させ、最終段階では尊皇革命というような、左翼テロとも右翼ファッショともつかぬ革命をも敢えて辞せないという方針で進んでいた。これではシナ事変は「早期」に済む筈がない。

こういうイキサツが統制派と皇道派との喰うか喰われるかの死闘である。非常時を目の前に置いての内部抗争という、国民の大迷惑から云えば両派同罪であるが、シナ事変を長引かせたという点だけを取り上げると、統制派は後世まで責任を負わねばならぬというのが穏当な結論ではあ

るまいか。

結局一番ひどい目に会ったのは汪精衛であって、もともと「蔣を相手にせず」と云ってしまつた近衛の失言の穴埋めに、代理役として引き出したのだという先入主が、どうしても陸軍の脳裡にあるから、和平条約の内容をきめる両国の交渉委員の折衝に際しても、最上の条件を汪に与える気は毛頭ない。そういう立派な御馳走は蔣自身が乗り出した時の「取って置き」のものであつて、汪には勿体ないという考え方である。これでは汪の立場も台無しである。度重なる日本陸軍の違約と冷遇に直面して、汪は生涯の政治力をも使い果してしまった。彼は名古屋の帝大病院に入院して、手術失敗の結果、やがて死んで行つた。

このようにして、近衛の最後にたどり着いた遠い廻り道——それは嘗て汪精衛に約束しながらそれを破棄した日本軍の撤兵という振り出しに戻る古なじみの道であつた。或る外交雑誌はこれを「近衛の久しぶりのつらい帰宅」に喩えて論評していた。なぜならばアメリカ大統領のルーズベルトは、汪精衛にくらべると数十倍の圧力でもって、防共駐屯をも含む全日本軍の中国からの即時撤退を要求して来たからである。近衛は古びた記念写真を数年ぶりで証拠として突きつけられた思いがしたであろう。しかも陸軍にとって一番手痛い防共駐屯拒絶の問題が日米折衝のうち最大のヤマと見られて来た。野村駐米大使の打診に答えて、國務長官コーデル・ハルはヤンキイらしい卒直さで、あの訛なまりのつよいテネシイ州の山国ことばを使いながら、「アメリカは日本を困らせたくはないが、それ以上に日本から困らせたくないのだ」とズバリ一言述べている。も

う問答無用というところである。

この場合、ハルにももう少し法律家氣質を脱ぎ棄てた政治家としての柔軟性があつてもよかつたと思うが、しかし静かに全体を反省して見ると、これは当然の酬いでもある。日本が真に撤兵を實行しようと考えたのは、事變の当初石原少将が參謀本部の作戰部長であつたほんのわずかな時期と、近衛が上述のルーズベルト大統領と「太平洋のどこか」で最後の捨て身の折衝に入らうと決意した時期との二度だけであつた。あとはいつも撤兵を實行するような振りを見せつつその貴い代償を次ぎから次ぎに汪精衛からかち得ていたまでの事である。しかし、さすがに心中汪の労苦に対して同情に堪えなかつたのであろう。日本政府は、汪の日本來訪のりには特別仕立ての飛行機を用意し、港や飛行場の沿道には小学生の家庭の負担に於て紙の青天白日旗をつくらせて千切ちぎれんばかりに打ち振らせ、汪の宿泊のためには離宮を用いる事を奉請して勅許を得た。しかし、旗行列にも特別飛行機にも縁のない中国国民の人心が汪から離れると、今度はかつて「相手にせず」と云つた蔣介石に対して、久しぶりに呼びかけを試みた。そして今更呼びかけに応ずる蔣ではないと判明すると、今度はあらゆる手の内の札カネをさらけ出して米國へ呼びかけた。これはすでに私の詳しく記したとおりである。

ただ、ここで特に近衛のために書き加えなければならぬ事は、彼がその頃は打つて交つたような人間になつていたという事である。手剛いルーズベルト大統領に立ち向かうとする近衛はもはや頼りない一批評家ではなく、逞しくねばり強く、執着の鬼になつていた。艱難は——少し遅過ぎたが——近衛を玉に磨き上げていた。日米妥協遂に絶望という最後の時期に近衛と会見した

米国駐日大使ジョセフ・グルーは近衛の顔を正視するに忍びず、「私が今夜国務省に宛てて打つ公電は、私の外交官の生涯中最も忘れ難い公電になるでしょう」と嘆息した。このグルーが、その前に国務省あてに打った公電には、「この日本の最後の要請には、深い祈念をこめた検討なしに突っ返してしまわぬように希望する」とさえ書き添えていたのである。実際、近衛の最後に示した態度はもはや一つの政策というような程度のもではなくて、一つの悲願になっていた事は、その辞職に際して天皇に捧呈した上奏文にもうかがわれた。これは昭和の外交軍事史のうちの実に特徴のある出来事であった。その特徴がどういう特徴であったかは、ここに書くに忍びない。私は国を愛し、そして中国が好きで、偶々一つの和平運動の末席に加わった。不思議な運命のもとに私はまだ生きている。おそらく終始和平運動にたずさわった最後の生き残りの一人であろう。私はそういう資格の者として、世界のどこからもの質問の前に立つ用意のある事を告白する。とうに棺を覆うて死体の朽ちてしまった友のためにも、生きていて精神、肉体の傷痕にいまだに悩んでいる友のためにも、私はそれを義務と感じる。

後記

昭和十六年の春、その日は土曜日であったと思うが、上海から上京中の私は休養のために箱根のフジヤホテルに一晩泊りの予定で出かけて行った。前年の二月に地元の小田原新聞の記者に滞在を嗅ぎつかれて、康紹武と一緒に台所口から夜逃げ同様に東京へ舞い戻って以来、はじめての

投宿である。

ところがその昼、食堂へ出て見て驚いた。牛場、松本、東寺——まだ他にも居たかも知れないが、そういうような顔触の近衛首相の側近の連中がテーブルの一つを占めて食事をしているのに打つかった。先方は私を見てギョッとした様子だったが、そのまま固い表情で食事をつづけていた。私も気がつかぬ振りをして片隅の小さいテーブルについた。

私はガラス窓をおして冬山の景色を見ながら、ボーイに小声でたずねて見た。

「今日は、近衛総理は見えていないですか」

「いや、総理だけはお部屋で食事を召し上っております」

一体、これは何事が起りつつあるのだろうか、と私は考えた。もしもこれが対蔣直接交渉の問題ならば、私を見てこんなに当惑をする筈がない。事変の始まった頃は、みんな首相官邸で書類を分けあい、勉強しあつた間柄ではなかったか。——これは何かある。これは恐らく対米交渉の下打ち合わせだ。私の耳にもそろそろ微かに入ってきている近衛首相のルーズベルト大統領への直接交渉の話に違いない。日本側でどんな大きな譲歩を見せても米国の仲介によってシナ事変という国家の大負担を解決して、日米戦争への危険をも防ごうという近衛首相捨て身の決心の日米交渉の話だ。それに相違ない。——何としても成功すれば、これこそ願ってもない話ではないか。

私は揚子江下流の第一線に住みついでからすでに久しい。大袈裟に云えば昼となく夜となくシナ事変の解決を希求しているのだ。この苦しみは到底東京の連中に分るものではない。この苦しみを抱いているわれわれが、事変解決について仮りにも妨害を試みる筈がない。なぜ、そういう

立場の私をこのように警戒するのか。むしろ機密はいつも東京の上層部から漏れているのではないか……。

やがて近衛首相の側近の連中は、私よりも早く食事をすませて、それぞれ部屋に戻って行った。ただ一人、東寺だけは東京に用事でもあるらしく、そのまま真直ぐに帳場の方へ行く後姿を、私はチラと見た。

私も食事を終えた時、帳場に行つてたずねて見た。かつて私が康と一緒にここに滞在した時も、まる二日遊びに来てくれた東寺なので、ホテルでもよくその事を覚えていた。

「東寺君はタクシイで小田原へ出て行きましたか」

「いや、もうじき出発する定期バスで帰るとおっしゃっていました。まだロビイの隅に居られる筈ですがな。——はてな、つい今まであすこの椅子の背に倚りかかって居られましたがな」

「いや、もういいのです。ありがとう」

私はその通用口からホテルの裏庭に出て行った。相変らずの山ふところの日溜り。裸のくぬぎ林。池から流れ出ているせゝらぎ。——あまりに静かだ。ことに今度は永い間の相棒あいつの康紹武が居ないだけに、何か寂寥を感じるのであろうか。

私は物音一つないホテルの建物の裏側を眺めながら、芝生に腰をおろして、今しがた帳場で受け取った東京からの速達便の封書を開いて読みはじめた。それは冒頭に堀場中佐の筆で、「これは中間報告です。影佐先生に御一報のうえ、焼き棄てておいて下さい」と念を押してある親展書だ。云うまでもなく、堀場の手で握った対米交渉の情報であって、しかも妥結の条件のあらましを堀

場の勤務室で分析して書き取ったものであった。

- 一、蔣介石政府と汪精衛政府との合体。
- 一、防共駐屯を含む全日本軍の中国撤退。
- 一、南進政策の放棄。
- 一、中国領土無併合。賠償金不要求。
- 一、各国平等の原則による経済協力。
- 一、(満洲国承認?)

私は読み終った時、思わず誰も居ない芝生の日溜りで大声を立てた。

「なんだ。これじゃあ康紹武が最初に打診して来た内容と同じじゃないか」

不意に人声がして、少し離れた熊笹の茂みのあたりを近衛首相の側近の連中が食後の散歩を楽しんでいるのを見えた。飛び石伝いにせせらぎの水の上流——丘のうえの岩清水の溜りの方向へ登って行くのを見えた。後ろの者が前の者の腰のあたりを押し上げて笑い声を立てたりしている。私はそれを見送りながら、つくづく世の中を皮肉なものだと思った。普通ならば私は彼等呼び留めて飛び石伝いに追いついたうえ、堀場の手紙を早速見せなければならぬところである。そして彼等も喜んでそれを読み、それぞれの感想を気安く述べる筈のところである。それが今は出来ない。誰もが計画したのではないが、双方の立場が今はそれを阻はんでいる。男の仕事というものはこうものだろう。

私は黙って、かつての同室の友を見送っていた。そして冷たい気持を紛らすように、もう一度堀場の文章に眼を落した。そこには情況報告の一端として、近衛首相の血みどろの努力が書き記されてあった。この首相の祖国に対する最後の奉仕の姿は深く私の胸を打つものがあるが、結局は万事遅過ぎたの一言に尽きると思った。そして一国民の私が直感的に遅過ぎたと感じる事は、世界の誰の心にも遅すぎたと映るらしく、この近衛首相の捨て身の企ても、とうとう実を結ばなかった。

その年の暮、日本とアメリカは戦争に入った。

(昭和三十四年九月一日攔筆)

附 録

蔣介石（中正）小伝

昭和六年の九月十八日の夜中に、中国の満洲第一の都会奉天ほうてんの郊外の柳条溝という所で、日本の所有である南満洲鉄道会社の経営している鉄道線路が二メートルほど破壊された。破壊したのは当時満洲に駐屯していた日本の関東軍の仕業であった。しかしこれをキッカケにして、関東軍はその晩のうちに市内の中国の兵営を攻撃し、数日たたぬ間に満洲の大部分を占領して当時事実上満洲地方の国王のような地位にあった張学良ちやうがく元帥りやうを追い払ってしまった。しかし、この出来事が、やがて昭和二十年に日本が太平洋戦争に敗れて被占領国になる最初の原因となったのである。

もっとも、張学良にも行き過ぎもあった。実は張学良の父の張作霖ちやうざくりんを暗殺したのも日本軍であった。だから学良としては無理もない事であるが、事毎ことごとに満洲に於ける日本の発展の妨害をした。それで関東軍もとうとう実力でもって満洲を完全に日本の勢力下に置こうとした。これも行き過ぎである。（この問題についての事情は別項の「石原莞爾」の小伝に書いたから、それを読んで貰いたい。）

しかし同じ年の十二月に総理大臣になった犬養毅はこれではいかぬと考えた。ことに満洲軍司令官の本庄ほんじやう大将の知らぬ間に中堅の軍参謀が計画してこのような大事を起してしまった日本の陸軍の姿そのものが、国を危くする考えた。彼は総理大臣に任命される時に、天皇陛下から特に「軍部を押えるように」というお

言葉を戴いた。それで彼は満洲の所有権（宗主権）を中国に返して、そのかわり張学良のようなヒステリックな排日をやめさせ、日華両国の間で平等な合作のもとに経済上の提携を行なおうと決心した。そして先代の孫文以来懇意な中国政府の行政院長（総理大臣）孫科のところへ密使をさし向けて相談した。相談はまともだった。しかしその直後、昭和七年の五月に犬養総理大臣は陸海軍の将校と生徒に首相官邸で暗殺された。（この密使なぞのくわしい話はこの本の一八三頁以下に書いてあるから、参照してもらいたい。）

この暗殺事件が起つて以来は、中国にも日本にも「満洲を返せ」とか「満洲を返そう」とかハッキリ言う者は現われなかった。蒋介石は「一面には日本に抵抗、一面には日本と交渉」と称して、日本の言うなりにお辞儀はしてしまわないが、さりとてあまり反抗してまた華北の方へ第二の満洲事変でも起されたら藪蛇だというわけで、二重の外交政策をとっていたのである。これも今から考えると止むを得ない事であった。ところが満洲事変以来、日本に対して腹の底から憤を抱いたのは中国国民である。ことに知識階級と学生と若い陸軍将校たちである。これを見た蒋介石はこの憤を一般の国民にもひろめて、将来中国の日本に対する抵抗力を根強いものにしよと考へ、全国の小学校の教科書のなかに排日思想を入れさせた。これが上述の「一面抵抗政策」の一つのあらわれであった。この排日教育は公平に言つて中国を一つの単位の近代国家にするには役立った面もあるが、蔣もそのために終いに手を噛まれる事にもなった。なぜならば蔣はシナ事変の初めのころ、このまま日本を相手に戦争をつづけて行くと、自分の国民政府と中国共産党との力の比重がだんだん変わつて行つて、共産党の勢力が抗日共同戦線の名のもとに月日と共に大きくなるのを心配して、何度かイギリスやドイツの仲裁によつて日本と和平しようと考えたが、しかしこういう蔣の方針に対しては、前にも述べたとおり、学生や知識階級や若い将校たちがはげしく妨害した。つまりこれらの人々は、昔幼い子供の頃に小学校で排日教科書を習つたのだが、それがいつの間にか元気のいい青年にまで成育して、教科書で習つたとおりの事を実行しようとしたのである。こんな訳で、日本と蔣との間の和平のうまく行か

なかつた原因の半分は日本の陸軍の内紛であるが、もう一つの中国側の原因はこれであった。そしてこの機微を実にうまく掴んだのが中国共産党であった。（イギリスやドイツの大使が、当時日本と中国のためにいろいろ仲介に立とうとした話は、別項の「汪精衛小伝」のところに書いてある。）

話は外れたが、こんな風で、犬養首相と孫科との話がこわれて以来は、中国政府はどんな外交交渉の際にも、満洲問題は議題にのせないという態度をつづけていた。そしていずれは歲月の流れがこれを解決する、という気長な態度を守っていた。その歲月に解決させるという意味は、満洲国の出来てしまった既成事実を自分これを見ない振りをして、時間をかせようという意味であった。中国と一番縁の深いイギリスにしても、日本が満洲で思う存分暴れていて、それで満足して中国本土の方へハミ出て来ないというなら、それでもいいではないかと、腹のなかで考えていた。実はイギリスは日本の力でソ連の中国への南進を防がせようと考えていた。つまり他人の力で他人の動きを防がせる智慧をしぼっていたのである。そこはさすがに世界一の実験家らしい考え方をしていたのだ。ところが日本は、こんどはその華北にまで進出して来て、紛擾を起しはじめた。これで事がめんどろになつて来た。当然中国軍と日本軍との間に幾度か小ぜり合ひの事件が起つた。しかしそこが蔣の「一面抵抗、一面交渉」の方針に従つて、小ぜり合ひの後にはいつも両軍の間に後始末の協定が行なわれた。そのうちの最も有名なものが、梅津・何応欽協定である。

この協定が行われた時の外交部長（外務大臣）が汪精衛であった。汪は中華民国革命の父と言われる孫文の直弟子で、履歴としては蒋介石のはるかに先輩であった。この汪は孫文の根本思想である「日本無くして中国無し、中国無くして日本無し」という考え方の忠実な後継者である。勿論汪としても蔣と同じように、日本軍の横暴には心中憤慨していた。しかし汪は蔣の「一面抵抗、一面交渉」の方針に従つて、梅津中将の言ひ分も何応欽上將の言ひ分も聞いて見た。すると、日本側は中国側が抗日行為をやるから已むを得ず力を用いるのだと主張するし、中国側は日本が圧迫するから抗日をやるのだと説明して、どこまでも水掛け論である。

これでは限りがない。しかしともかくも、華北で戦争を起されては日本と中国の間は駄目になってしまふから、そこは蔣に代って汪が全責任を負って、形のうえでは譲歩して中国軍を引き下がらせ、実質上はそこに一種の非武装地帯を作ろうとした。いまドイツのベルリンをめぐって各国の人が苦勞している考え方によく似ていた。そして何応欽も元來蔣の方針をよく理解していたし、親日派の將軍として蔣の大切な片腕の一人であったから、汪外交部長のこの結論には賛成した。しかしこれらの事情を外形からだけ見ている中国の輿論が承知しない。汪は売国奴として激しく批難されたうえに、遂に中国人から狙撃されて重傷を負い、外交部長を辞職した。しかし、考えて見ると、この事件は後々の汪の和平運動の前兆であった。(この事件については汪自身の口から、本文の一六四頁で語られている。)

さて、一夜にして満洲を追われた若い張学良元帥であるが、張はその後満洲時代の大きい軍隊を率いて華北から内蒙古にかけての地域に当てもなく駐屯していた。この張学良は、死んだおやじの張作霖が満洲を一つの王国のようにして、事実上は独立した形をとっていたのをやめて、自分の軍隊に青天白日旗をかかげさせて、中央政府直属の軍隊に変えていた。それゆえ蔣としてもこの大世帯の軍団を食べさせて行かなければならない。それで随分多額な駐屯費を毎月張に渡していたものらしい。当時の中国通でニューヨーク・タイムズ紙の上海支局長であったハリエット・アーベントという人が、同僚のA・J・ピリングガム特派員と共同して書いた「中国は再生するか」という本を読んで見ると、中国政府はこの張学良の軍団の維持費として河北省で徴収するいろいろの税金の総額一億元のうちの三分の二を手渡していたという事である。もっとも、その大部分は張自身と師団長あたりで分けていたものであろう。しかし、ともかくも打ち明けたところ、蔣としてもこんな気心の知れない大軍があまり中央地帯の軍事上経済上の要所にうろろ出て来られても困るので、丁度蔣が何年もかかってやっと追い払った共産軍の最後の隠れ家である陝西省の辺境の延安(えんあん)一帯を監視させるために西安(せいあん)という都会に張学良軍を移駐させたのである。これが蔣の生涯中の最大の過ちであった。

さて、西安をはさんで共産軍と張学良軍とが対峙していると云っても、もともと親の代からの敵同士というわけではない。自然、月日のたつにつれて双方の將校や兵士の行き来もはじまる。そのうちに張学良軍の將校や兵士は、次第に共産軍に好意を持ちはじめ。彼等は共産軍と近隣の農民の間がなかなか田満に行っているのを発見する。そればかりではない。共産軍の軍服には階級の差別をあらわす記章が付いていなくて、みな平等であるし、食べるものも同じらしい。それに、行軍の帰りなどには將校の馬の尻に病兵を一緒に乗せて帰って来るのを見かける事もある。彼等はそれを羨ましい事だと思ふ。こういう案外に優しい共産軍と戦わせておいて、日本軍に対してはいつも戦争を避けている蔣介石は実に怪しからぬではないかと考えるようになる。(この共産軍の軍律や、農村人との親しみについては本文の二一九頁にくわしく書いてある。)

張学良軍の將校や兵士にこんな気分の下地が出来かかって来たところへ、更に共産党は実に利き目のあるスローガンを彼等に打つけて来た。それは「中国人は中国人と戦わず」という宣伝であった。平たく云えば「兄弟同士で血を流すのは止そうじゃないか」という事である。もっと裏を返せば、「戦うならば、日本と戦おうじゃないか」という事である。これはたしかに利き目があった。満洲の祖先の墓どころから離れ、賑やかな都会の灯から離れて、見渡すかぎり寂しい景色のほかに目に入らぬ中国の西の果ての陝西省に追いやられて、ホームシックを起している張学良の軍隊のなかに、このスローガンは熱病のように忽ち拡まった。彼等は自分たちに差別待遇を与えている国民政府の仕打ちを恨み、蔣介石を憎んだ。

こういう形勢が耳に入ったので、蔣介石はとうとう自分で西安の張学良軍の本部に乗り込み、張元帥を叱ったり激励したりしようと決心した。ところが現場に到着するや否や、彼は多数の抗日学生(かたひつがくせい)の陳情隊に取り巻かれた。その学生の群は丁度いまの日本の全学連のような勢で蔣の政策をげしく批難した。甚だわるい前兆であった。それが昭和十一年の十二月初めのことである。用心深い蔣としては珍しい大失策である。

十二日の朝、蔣介石は西安の郊外の臨潼(りんとう)という温泉地に泊っていた。ところが明け方の五時半ごろ突然反

乱の銃声が起って、蔣は軍隊に取り巻かれた。取り巻いたのは張学良の軍隊と陝西省の楊虎城の軍隊である。彼等は最先きに蔣の侍衛長を殺し、蔣を捕虜にした。これが有名な西安事変である。（この時の様子は本文の一八八頁に書いてある。）

張学良は蔣に向っていろいろの要求を出したが、要するに国内の戦争をやめて、国民党と共産党とが共同して日本に抵抗せよという事がその結論であった。これに対して、蔣は捕まった日はさすが武人らしく落ち着いて、「殺すなら、早く殺せ」という態度をとっていた。そこへ蔣の義兄で前の行政院長の宋子文が妹の蔣夫人を連れて飛行機で駆けつける。イギリス大使館もアメリカ大使館と相談のうえ、以前に張学良の顧問をしていたW・H・ドナルドを現場に急行させる。そこへ、共産党代表の周恩来も「蔣を生かして利用する」方針をたずさえてやって来る。ここで三者とも偶然「蔣を生かす」という点で一致した。それで蔣も少しづつ気がゆるむにつれて、「軍人としての名誉を保たせるならば」という条件のもとに、国民党と共産党との共同抗日の方針を認めたのである。

一方、国民政府では早速最高会議を開いて軍政部長（陸軍大臣）の何応欽を反乱鎮定のための遠征軍総司令に任命した。何応欽は国家の秩序のためには蔣一人の生命を犠牲にするのも已むを得ないと考えて、張学良軍に対して直ちに空軍の爆撃をはじめた。すると蔣は、彼と親しい間柄の蔣鼎文將軍を釈放させたらうえ、何応欽あてに爆撃をやめる命令の手紙を持参させた。そこで何総司令も爆撃を中止し、蔣は無事に二週間ぶりに南京へ帰った。——しかしこの事件は今から考えると、まことに世界の歴史を変える大きな事件であった。

ここでいよいよシナ事変の発端になった蘆溝橋の戦闘の第一夜のことに触れるのだが、私はこの点で、今までに世の中の誰も試みていない主張を行なうものである。それは一体誰が蘆溝橋の闘のなかで最初の発砲をやったかと云う問題である。但し私の主張はべつに新説ではないので、これまで推定されていた三四の真

相のうち、あまり尊重されていない方の一つをそれと断定して、その裏打ちになる証拠をここに発表しようというのである。

昭和十二年七月七日の夜半、北京の南郊の豊台に駐屯していた日本軍が、永定河という川にかかっている蘆溝橋の近くの空地で演習を行っていた。そこへ南方から突然射撃を受けた。河の南の堤防のところにも中国保安隊の分駐所がある。日本軍はすぐにこの分駐所に向って応戦した。すると左の方一キロのところにある宛平えんぺい城に駐屯している中国軍がこれを応援して射撃をはじめたので、日華双方から死傷が出て、本格的な小戦闘になった。

この事件についてはいろいろ反省すべき事がある。第一に、日本軍の演習地の場所が実によろしくないという点である。実は、ここに至るまでには日本軍側も中国軍側にたびたび三四の候補地を指摘して、北京の郊外に於ける演習地の貸与を申し込んでいたのだが、それが、みな北京の南玄関口の咽喉のどにあたる要所なので、その度ごとに拒絶されて来たのである。もっとも、拒絶する方も実は無理もない。もともと自分たちを仮想敵としての演習なのだから、警戒するのは人情の自然である。結局、中国側がしぶしぶ承諾した日本軍の演習地というのは蘆溝橋のすぐ近くの鉄道線路に沿った妙な細長い空地であって、これは到底使いものにはならない。それで、日本軍は少し離れた数万坪の荒地へ出向いて演習を行っていたが、あいにくそこが中国軍の兵営の前面にあたっていたのである。

第二の問題は、なぜこのように抗日空気の険悪な折から、選りも選って毎夜演習を行なったかという問題である。これも現場の隊長に云わせれば、七月には軍の検閲が行なわれるので、昼夜兼行で訓練を仕上げていたのだという。が、これはどうも弁解にはならない。やはり時節柄をわきまえて、少くとも夜間演習は一時取りやめるべきであったと思う。当時ロンドン・タイムズの北京特派員が、「日本軍は連夜にわたって敢えて演習を行なっているが、これで何事も不祥事が起らぬならば、それこそ奇蹟というものである」と報道

しているのは、この場の空気をありのまま伝えて余りあるものであった。さて、この事件の最初の下手人は誰かという問題に戻るのだが、これについては従来から四つの場合が推定されていた。即ち、

- (一) 日本軍の自ら製造したロジツケ。
- (二) 中国軍のなかに潜入していた共産党。
- (三) 抗日の急先鋒であった北京市の大学生。
- (四) 日本人の所謂満洲ゴロ。

大体こんな風の四種類である。そのうち、たとえば当時北京駐在の日本大使館勤務であった森島守人氏（現在は社会党所属）はこの第一の場合を取り上げており、発砲さわぎの直後に日本軍で行なった点呼のうちに、兵士が一人便所に行っていたのを小隊長が戦死と早合点したのだと主張している。そして歴史学研究会の編集した太平洋戦史も森島氏の著書を引用してこの主張を支持している。なるほど森島氏は参考になる好著を二三書いているのだが、この点は同氏の誤りである。また、近衛首相もその手記のなかで、「蘆溝橋事件の真相はよく分らない。どちらかと云えば日本側の方があやしい」と記して、これは後で東京裁判の傍聴の証拠にまでなったが、これも近衛首相のよくやる、自分の関係した事件について第三者のように冷淡にしゃべるいつもの癖が出ていたのであって、明らかに誤りである。ここで私は、あの当夜の事件の最初の発砲者は日本軍でも中国軍でもなく、両軍の陣地から丁度死角にあたる地点に待ちかまえていた第三者の仕業だと主張するものである。その証拠としては二つある。その一は当夜事変不拡大のために奔走して現場へも駆けつけた今井武夫中佐（日本大使館付武官補佐官）の談話である。これは今井氏が昨年（昭和三十三年）私を訪問しての直話である。もう一つは当時同盟通信社北京支局勤務であって現在は日経連の理事をしている安武誠一氏が本年（昭和三十四年）の夏文藝春秋社に書面を寄せ、さらに日本経済新聞の紙上に寄稿した見聞記である。

先ず、はじめに今井中佐の話だが、前々日、つまり七月五日の夜に、今井は上述の宛平県城を準備している馮治安の司令部から日本軍が射撃をしかけて来て困るという抗議を受けた。今井は早速豊台にある日本軍の兵営に駆けつけて隊長と打ち合わせのうえ、いろいろな方法で厳密な調査を行なったが、誰も発砲した者はないという。実は今井にはイヤな予感が一つあった。それは日本の軍隊には昔から悪い習慣があって、新しい銃弾配給の時期が近づくと、古いやつは夜間に勝手な方向へ撃ってしまう事であった。今井はこれをやったなと思って、念入りに調べてもらった。しかし実際、誰も身に覚えがないらしい。

その翌晩である。今井は元の靳雲鵬國務総理の秘書長であった陳子庚博士に招かれて晩餐の席に着いていた。すると宴半ばの頃に石友三將軍が不意に今井を訪ねて来た。石將軍は当時冀北保安司令という地位にあって、北京の東北郊の黄寺という所に八千ほどの兵を抱えていた。今井はこの招かれざる客を怪訝に思いながら、宴の主人に詫びて石に別室で会って見た。ところが石の云う事は尋常でない。「実は明晩必ず蘆溝橋の付近で日華両軍の間に戦闘が起るが、自分の軍隊には一切の手出しを厳禁してあるから、どうか日本軍も黄寺の方は攻撃しないでくれ」という依頼であった。今井は最初おのれの耳を疑う思いであったが、考えて見ると、相手は中国第一のクーデターの名人の馮玉祥、その直系の子分の宋哲元、その部下で華北抗日ナンバーワンの馮治安——そして語り手は宋哲元のすぐ先輩の石友三——こういう風に考えると、石友三の異様な申し入れも一応は警戒すべき筋合いの話だと思ひ直して、石に厚く礼を述べて別れた。（この今井の話は本文の八八—八九頁に書かれてある。）

さて、その次には七月七日、事変発生当夜のことを安武氏に語って貰おう。安武氏の話によると、七月七日の夕刻には、宛平県城で行なわれた日華の停戦協定は一度まとまったのだそうである。その記念として城内の大通りにはシナ事変の間じゅう、ずっと停戦協定成立記念の木標が建てられていて、しかも中国軍の軍使の名と並んでわが方の軍使広渡中佐の名が書かれて風雨にさらされていたそうである。それで、安武氏の

話はこの広渡中佐から直接聞いた話を基にしているのだが、当日協定が成り立ったと云ってもまだ城の内外は何となく殺気立っているもので、その晩が和戦いずれかのヤマだと考え、兩軍では話し合いのうえ、軍使を交換してそれぞれ相手方の戦線を監視する事にした。そこで、広渡中佐はその晩は皇城のなかの中国兵営に泊ることになった。

ところが深夜突然、広渡中佐は銃声で起こされた。しかも耳をすますとその銃声はどうかやら日本軍の兵営の方から聞こえて来る。「これはいかん」と広渡中佐は考えて、軍用電話に飛びついた。兩國の間には連絡用の軍用電話が架設してあったのである。広渡中佐は早速日本側に泊っていた中国軍の軍使を呼び出して、「銃声を聞いたか。まことに相すまぬ」と云いかけると、先方はその言葉を押えるようにして、「申し訳のないのは中国側です。ここで銃声を聞いていると、出所はたしかに中国の兵営の方角です。日本軍はいま至って静かです。とうとう不信行為を犯してしまつて、まことに相すまぬ」——「いや、申し訳ないのはこっちだ」という風で、双方で協定違反を詫言ひ合った。そのうちに銃声は次第に激しくなり、夜もほのぼのと明けて来たので、広渡中佐は意を決して中国軍兵営の当番将校に別れを告げ、白旗をかかげた自動車に乗って、全速力で豊台の方へ引返したが、この自動車は蘆溝橋を渡る時には妙な方角から撃つて来る猛烈な機銃掃射の的になり、広渡中佐は命からがら味方の兵営にたどり着いたそうである。その直後、広渡中佐は安武氏に、「すっかり真相が分つたよ。丁度兩軍の死角にあたる所から射つて来るのだから堪らんよ。あれは日本軍でもない、中国軍でもない。八路军（華北地方の共產軍）が停戦協定をブチ壊しにかつたのだ」と云つて、いかにも残念そうであつた。そしてこの安武氏の話は今井中佐の話とまさしく符合する。

蘆溝橋での小ざり合いがどうやら日華兩國の本格的な戦争へと拡がって行つた際に、最もこれに反対したのは、北満国境の守りに全力をそそいでいた参謀本部であつた。ことに作戦部長の石原少将は、「いま中国

と戦争するなどは飛んでもない。一兵のこらず、取り敢えず通州（華北の北のはずれの町）まで引き上げさせろ。近衛は近衛ですぐに南京へ飛行機で乗り込んで、蒋介石を相手に直接和平の話をするがよい」と強く主張した。当時病気で引き籠っていた近衛首相もこの熱意に動かされて、看護婦を連れてでも出かけると云い出して、飛行機の準備までさせた。ところがこの決意も陸軍内部の意見の分裂によって取り止めになつたばかりでなく、近衛内閣は事変不拡大の声明を発表してからたつた三日目に、その方針を百八十度引っくり返して、満洲から最強の機械化部隊と空軍とを北京方面へ応援させる事に決定してしまつた。

なぜこのように政府の態度が急に變つてしまつたのであろうか。急變の原因は陸軍にあるのだが、その陸軍のなかでも人形芝居の糸を引いている張本人と、糸を引かれていた人形と二つ通りあつた訳である。この場合、杉山陸軍大臣などは明らかに糸を引かれていた方の代表者であつた。彼は決して計画的なシナ事変拡大論者ではなく、この戦争も北京の南方の要所である保定で喰いとめよう、また、喰いとめなければならぬ、と考えていた一人である。それゆゑ、彼は天皇陛下にも「この戦争は二カ月もあれば納まります」とお答へして、後で大変なお叱りを受けたのである。それでは、事変拡大の糸を引いた張本人は誰か。——私の今まで調べた限りでは、それは陸軍のなかの統制派だと断定せざるを得ない。世間で周知のとおり、統制派は二・二六事件の反乱を機会に、皇道派の軍人の目ぼしいところをすべて予備役にまわしたり処罰したりしたが、この人事の扱い方について皇道派を中心として批難が日増しに昂まって来たので、その緊迫した空気を外へそらすために中国で事を起したと云われている。のみならず、統制派の長期計画としては、北方のソ連にくらべて抵抗力の弱い中国のなかに絶えず戦争の原因になり得るゴタゴタを残しておいて、それを口実にして国民に対しては非常時である事を宣伝し、国家総動員法などという強制法をも急いで賛成させ、同時に国内の政治の形を革新して国家社会主義へ持つて行き、最終の場合には所謂尊皇革命の実行をも辞せない道程にあつたと云われている。そして私は今日まで、これを立派に否定するだけの反証には未だに出会わずに

いるのである。公平に云つて、非常時を目前に置いての内部抗争であつては、国民の大迷惑から見ると、皇道派も統制派も、両派まさに同罪であるが、少くともシナ事変を長引かせた点については、統制派は後世に対して責任を負わなければならないと思う。

近衛はこういう傾向にある統制派が、中国政府からも警戒されている事を情報によって知っていた。それで事変処理のためにも、比較的先方に信用されている皇道派から陸軍大臣を選びたかつたのだが、前述のように二・二六事件に大なり小なり連坐して、現役のなかには適任者が居なくなつてしまつていた。しかし杉山では何としても大勢に引きずられるので心細い。遂に近衛は決心して、歴代の総理大臣がまだかつて試みた事のない冒険をやつて成功した。それは、杉山陸軍大臣には無断で後任大臣を新任する事であつた。近衛は親友の岩永同盟通信社長と打ち合わせたらうえ、同じ社の専務の古野伊之助を華北の戦場に赴かせ、第一線を指揮していた板垣大将を突然迎えて新陸軍大臣に登用したのである。しかし近衛はこの板垣の不決断にもやがて失望した。近衛の真に心を許すのは純粹な皇道派だけになつてしまつた。

この間にもイギリスは駐日大使のクレイギーや駐華大使のカーの手によつて幾度か根気よく日本と中国との間の和平について仲介の意志のある事を申し入れて来た。これに対しては天皇も元老も外務大臣も海軍もすべて受諾に乗り気であつた。ただ一人、近衛首相は厭がりもしなかつたが、それを喜びもせず、昔からの傾向でイギリスに物事を頼むのはどうも乗り気でなかつたらしい。(この辺の事情についてはすべて別項の汪精衛小伝のうちにくわしく書いておいた。)一方陸軍ではイギリスの仲介には露骨に反対したばかりでなく、陸軍に煽動された右翼団体が大きかりな反英運動を起すに至つて、イギリスは遂に仲介をあきらめた。そのかわりイギリスはビルマ公路という山越えのルートを切り開いて、イギリス領ビルマと中国の奥地とを結ぶ新しい共栄圏を作り上げる計画に全力をそそぎはじめた。この辺の日英の争いは戦後最高映画賞をとつた

「戦場にかける橋」というアメリカ映画の物語のとおりである。

イギリスの次に仲介者としてあらわれたのがドイツである。そしてその表面に立つたのは駐華ドイツ大使のトラウトマンという苦勞人である。この人とその相手になつた中国政府外交部政務次長の徐謨とは、共に万事云う事に味があつて私の今日でも好きな人柄である。しかし本場の当事者はドイツのヒットラー総統とベルリン駐在の日本大使館付武官の大島中将であつた。なぜヨーロッパ問題であれほど忙しいヒットラーが遠い中国の平和について乗り出したかと云うと、シナ事変が長引けばソ満国境を固めている日本の関東軍の精銳の一部は中国本土へと南下する。そうなるとソ連軍は多少手が抜ける。その影響はヨーロッパ国境に於けるソ連のドイツに対する圧力の増加となつてあらわれる。これをヒットラーは嫌つたのである。それと、もう一つ。——実は上海南京の間の守りは、蒋介石の依頼によつてドイツ陸軍の築城専門家の手で沢山の要塞が作られているのであつた。しかもドイツからは前参謀総長フォン・ファルケンハウゼン大将以下二十名の将校が軍事顧問として乗り込むという華々しさであつた。ところが、日本軍は思ったより強い。南京城の守備もどうやらあやしくなつて来た。これではドイツ陸軍は面目丸つぶれになるばかりでなく、ドイツと中国とのきずなもお終いである。こう考へて、ヒットラーはトラウトマン大使に仲介を急がせたのである。一方、蒋介石としては実はこの頃が一番心の動揺していた時期であつて、彼はこの本文の方にすでにくわしく記したとおり、対日戦を受け持つている前線の唐生智、白崇禧、顧祝同以下の軍団長を召集してトラウトマンから提示された内容をくわしく話して意見を徴した結果、満場一致で受諾すべしとの委任を受けたのである。(この事情については別掲の「汪精衛小伝」に書いておいた。)

さて、幾度か根気よくシナ事変の仲裁に立とうとしたと云つても、イギリスは実はあまり狼狽してはいな

かった。ただ、これ以上戦争による損害を大きくしたくなかっただけである。というのは、イギリスとしては、現状だけならば、それほど甚だしい痛手ではなかった。なるほど揚子江は日本海軍によって塞がれてしまったが、その下流の沃野には無数のクリーク（小運河）が網の目のように縦横に走っていて、夜になれば人目を忍ぶ小舟の往来には事を欠かない。帰りの便には輸出品の桐油や豚毛や茶やタングステンや粉卵に至るまでを悠々と満載して潜入して来る。こんな次第でイギリスの貿易額は一向減らないばかりでなく、中国の銀行筋の商売がまったく止まったに引き替えて、イギリスの香港上海銀行のごときは為替業務を独占の状態で、未曾有の繁昌を来たしている有様である。

イギリスの中国に於ける権益がいかにしつかりした基礎のうえに立っているかは、外務大臣ハリファックス卿が横浜正金銀行ロンドン支店長の加納久朗にくわしく説明した話が、この場合大変参考になる。

ハリファックス外務大臣の云うには、中国に於けるイギリス人の投資は大体三種類に分けられる。その第一類は、ジャーディン・マセソン会社、香港上海銀行、英国アジア原油会社、イギリス煙草会社、バターフィールド汽船会社などの六つの会社で、どれも二百年の歴史を経ており、そのどの一つを取り上げても失礼ながら——日本の財政よりも大きい。それゆえこの連中は二三年商売を休んでも平気である。だから、ここで焦って日本の勢力を排斥しようという気は全くない。それに、これらの会社はいつでもロンドンでイギリス政府と話し合いがつく。

第二类に属する連中は、中国で中国婦人と結婚して全く中国化した成り上りの商人で、その歴史もせいぜい五六十年というところである。この中国人化している商売人を、イギリス政府は保護する気などは毛頭ない。最後に第三類の商人だが、これはユダヤ系のイギリス人であって、イギリスで高い税金を払うのが厭さに中国へ行ってイギリス国旗の保護のもとにタンマリ金を溜めようという連中なのだから、むしろイギリスの政策の反逆者と云ってもさし支えない。

こういうハリファックス卿の打ち明け話を聞かされた加納は南京へ立ち寄ったおりに、中支派遣軍の板垣総参謀長や幕僚たちと、ぶっ続けに七時間ほど議論をたたかわした。

「イギリスが怪しからんと云うのなら、さぞかし具体的な事実があるのだろうから、私のロンドン土産にここで実例をあげて話してくれ」

と加納が云うと、板垣大将はやや当惑しながら、

「いや、イギリスの勢力を東洋から追い払うという事になれば、おそらく二百年はかかるだろう。いまイギリスの怪しからん事実を具体的に話せと云われても、無いことはないが、結局は取り立てて云うほどの事ではないし、よく考えれば物にならない話ばかりなのだ。つまるところ、われわれは感情的にイギリスとよくないので、これは偽われぬ事実なのだ」

というような心もとない話になってしまった。これでは陸軍大臣をやめさせられるのも無理はない。

こういうイギリスの老舗らしい落ち着き払った態度にくらべて、不況に悩む浙江財閥の焦りは日増しに目立って来た。ことに国民政府が占領地の工場に対して奥地への移転令を出した事は、彼等にとって二重の衝撃となった。奥地へ工場が移転されたのでは、揚子江下流地方で繁栄を誇った民族企業と彼等との縁はここに完全に断ち切れてしまう。勿論移転を命ぜられた工場にしても、日本軍を眼の前に置いて、そうたやすく機械を外して引越せるものではない。やはり、結論としては新しい設備のために金を借りなければならぬ。が、時節柄が当てのない投資に及ぶ銀行はなかなか見当らない。こんなわけで、昭和十五年には一旦奥地へ移転して約六千萬元を投じて見た百四所帯ほどの工場が、泣く泣く損害を覚悟でまた上海あたりへ舞い戻る傾向を見せはじめた。すると国民政府は、為替手数料を一割前後に上げるという法外な非常処置に出て、ほとんど禁止令同様な対抗手段を講じて来た。しかもその手数料も大部分は香港上海銀行が扱ってしまう。

こんな事情で、蒋介石が国民革命に成功して南京へ都を遷して以来、絶えず車の両輪のように互いに助け合
って来た国民政府と浙江財閥とは、ここにはじめて互いに利害相反する存在となった。

ここで浙江財閥も遂に居たたまれなくなって、誰か適当な男を見つけ出して日本政府内部の和平の動きを
偵察させる決心をきめた。その第一使者が、本文にも書いたとおり、外交部亜洲司日本科長で横浜生れの董
道寧である。これを押し出して東京に行かせた主導者は中国銀行の南京総経理の呉震脩という実力者である。
ところが董道寧が東京へ乗り込んで見ると、参謀本部の上層部はすべて早期和平論だし、近衛首相も「蔣介
石を相手にせず」という声明を後悔していると云う。楽天的な董は有頂天になった。そして悲観材料の方は
あまり分析せぬままに新しい首都の漢口に飛んで帰った。これに飛びついたのは董のすぐ上司であった外交
部亜洲司長の康紹武である。そして、第二の打診者として康を押し出したのは浙江財閥の錢永銘や周作民や
徐新六等であった。それと、政治的にこれに呼応したのが蔣の侍従室に關係のある陳布雷や周仏海である。
(この辺の消息については、別掲の「周仏海小伝」と「康紹武小伝」とを読んでほしい。)

康はしかし董よりは遙かに頭脳も緻密であつて、それに燃えるような功名心を抱いていたから、和平はな
るほど有望ではあるが、日本政府が急に再び蔣を相手とするところまで舞い戻るのは、国としての体面もあ
つて、相当困難だと見て取つた。彼は腹のなかで、蔣を主役としての和平か、汪を主役としての和平か、二
つの深刻な悩みに迷つた。しかし彼は蔣への恩義に苦しみながらも、和平促進のために最後に汪中心のプラ
ンへ一歩踏み出したのである。一歩踏み出したとなると、彼は董道寧よりは一段と複雑な意図から、東京の
空気をやや樂觀的に祖国の同僚に伝えて土産話とした。そして私はこの康の迷いの最中に、築地の旅館では
じめて康と要談したのである。(ただ一言、康のために弁明すれば、彼は和平条件に関する限り、終始一貫、極めて強
硬であつた。いつも漢奸になる最後の一線は踏みとどまって守り通して来た。この点は私に対しても、かつて一度も譲歩
した事はなかった。彼はやはり中国の若い世代の人間であつて、一般の対日輿論の手厳しさをよく挿んでいたのである。)

この意味では、彼は対日交渉を担当した外交官として、まさに終りを完うした。

このようにして康の決行した汪精衛引き出しも、日本陸軍の度び重なる不信行為と汪一派の世界情勢の読
み違いによって全く行き詰りの壁に打つかつた時、蒋介石の身边にもそろそろ目に立たぬ斜陽が影をひろげ
て来ていた。さすがの永年の蒋介石政治も、完全な実力者という俤は色薄れて、少しづつ下降期に入りつ
つあつた。その最初のキツカケは前に述べた政治の中心の奥地移動に伴なうさまざまな支障であつた。

第一に分析して見ると、この頃の蒋介石は国民党内部に於けるその地位がいつの間にか変つていた。なる
ほど国共合作と云えば聞かえはよいが、実は国民党の中堅層青年層と共産党との結合がますます強固なもの
になり、これを全国の国民が老若男女を挙げて声援しているのだから、蒋介石はそのお神輿おみこのうえに乗せら
れた「抗戦の象徴」というような体のいい偶像にノシ上げられていたのである。その蔣の後継者と見られる
陳誠も、元氣一杯な三民主義青年団の基礎のうえに立って国共合作を推進しており、何応欽や張治中ちゅうのよう
な戦歴せんれきを聞いた将領たちの憤激や私怨を買っているくらいであつた。

第二の変化は、国民政府を永年支えて来た財的背景の凋落であつた。既に述べたとおり国民革命以来切つ
ても切れぬ關係にあつた浙江財閥は、新しい都の重慶からはあまりにも道のりの遠い揚子江下流のデルタ地
帯に取り残されて、孤影蕭然こえいせうぜんというかたちであつた。この浙江財閥は今ではまったく繁栄をイギリス財閥に
奪われて、政府の軍事公債に應ずる力すらなくなつていた。自然、政府は生産についても租税負担について
も、今までよりも農民の働きに頼らざるを得ない。だんだん滞とどまつて行く外債の利払の返済——と云つても、
輸出を助けて外貨をかせいでくれるのは、桐油、茶、豚毛、粉卵の原料の鶏卵、タングステン——みな奥地
の農民の双肩にゆだねられている。ところがその農民は、米はつくらなければならず、援蔣ルートえんしやうルートの道路工
事には駆り出されるうえに、日本軍の占領区域で税収入の減つただけは奥地の住民への増税というかたちで

現われて来るのだから、実は息をつく暇もない。いかに彼等でもこれ以上働く意欲は起らない。その意欲を無理にも起させるためには当然、農民の生活向上——農地制度改革という事の必要が刻々に逼って来ている情勢にあった。たとえば、陝甘寧区（陝西甘肅寧夏というような西北の端の地区）で発表した「抗戦時期施政要項」では、「辺境の地区の人民を保護するには、土地改革によって利益を与える必要がある」という項目をかかげて、いち早く狼火を打ち上げ、政府に逼る有様であった。そこで中国の農民生活の調査研究をやっている篤学者たち——日本人で云えば満鉄調査局上海支局の伊藤武雄や天野元之助というような人々——はみな、今度こそイギリスが蔣政府へ資金を貸す条件として、農村改革の必要を強く主張するだろう、好機は遂に農民のために来た、それこそ首を長くして期待していた。ところがイギリスは無条件で蔣政府に資金を貸した。これではイギリスも蔣政府も落第である。

最近、蔣夫妻と個人的にも親しい某大官の書いた「蔣介石伝」を読んで見ると、「戦後、アメリカ方面などで国民政府が農村改革を断行しなかった事について批難する向きが多いようだが、農村の改革などという事は口で云うほど容易いものではないし、簡単に実行出来るものでもない」と弁護を試みているが、これは真面目な反省を欠くものと云わなければならない。この伝記作者は終戦後吉田内閣の行なった農地改革の痕をよく調べて見るとよい。マックアーサー司令部が東京へ乗り込んで占領行政をはじめてから間もなくのことであるが、吉田内閣に農地改革——地主制度解消と小作農の自立——を命令して来た。これに対して吉田はマ元師とは親密な間柄であったから、問題の実施の引き延ばしや内容の骨抜きというような事について工作の余地がないでもなかった。しかし吉田は大局を見透して、どうせ最後に決行されるものならば、こっちら進んで日本の実情に適した農地改革をやってしまうおうと考えた。そして自分の率いる自由黨員でもない、しかも戦時中は「赤い思想」の嫌疑で刑務所に囚われていた和田博雄——その後社会党の政策審議会議長にな

った和田——を抜擢して農林大臣に任命した。このようにして日本未曾有の農地改革は吉田の援護のもとに和田の手で行なわれたのである。なるほどその結果は、個々の地主の家にはそれぞれの悲劇も起って、なかには同情に堪えないものもあるが、しかし全体から見ると、日本はこれで敗戦後の革命を避けることが出来たのである。要するに吉田にはその心があつてこれを行ない、蔣にはその心がなくてこれを行なわなかったのである。三民主義のなかでも最も烈しい熱意をもって民生主義を祖述した孫文の弟子として、まことに残念な事である。

もう一つ、私はこの伝記作者に対して反駁したい事がある。それは他でもない。第一に、蔣介石は所謂軍政時代の中国政府の主席である。従つて政府軍のためには一人でも多く良質の兵士を得なければならぬ。その兵士の供給源と云えば、勿論農村である。その農村と蔣政治とはあまりにも縁が遠過ぎる。私は長年揚子江下流地方に住み込んでいたが、このあたりに出没する新四軍（江南地方の共産軍）がいかに貧農の子弟に親しまれていたかは、すでに本文の一一九頁と二二〇頁以下にくわしく書いたとおりである。少し大袈裟に云えば、農家の庭先きで日向ぼっこをしている老爺も、田圃で牛を追っている少女も、すべて新四軍のために見張り人だとして過言ではないのだ。何故だろうか。それは彼等の農地の問題や借金の高利の問題について将来優しく手をさし伸べてくれる唯一の人々は何四軍の將校さんだと思ひ込んでいたからである。実に、これは蔣介石にとっては大変な危機である。蔣の立場から云えばどんな手段を講じて、良質な兵士の供給源としての農村を大切に、いざという時に備えなければならぬところである。

しかし、「その農民に対する親切というのが共産軍の謀略なのだ。天下を取るまでの甘言なのだ」と反駁する人もある。が、これがもしも謀略ならば、随分下の將校兵士にまでもよく浸みわたった謀略であつて、その普遍化という点から見ると、もはや日常の習慣になり変つてると云わざるを云えない。もっとも、私の懇意であつた東京の中華民国代表部の或る最高幹部は、突然私のところへ暇乞いにやって来て、「どうも

周恩来の声明によると、中共政府はあと二十年ぐらいは資本主義を併用するそうです。私にも連絡がありました。私もそういう漸進革命ならば、安心してこれから北京へ行きます」と云って、勇躍して中共の首都へ乗り込んで行った。これなどはどうやら周恩来の口あたりのいい話に引っかけた方だが、それほどに中共の政策のPRは行きとどいていたのである。

ここに、中共軍の日常の行動が単に命令による謀略から出ているものか、それともいつの間にか彼等の氣質のなかに自然に融け込んでしまっているものかを検討するために、私はここに参考として、最近中共から二十年もの勤務のあけく日本に帰って来た加地信という防疫技官の実見談を紹介しようと思う。加地さんは日本に帰って来てから志賀直哉、谷川徹三、広津和郎のような人々を含む会合にしばしば出席して、講演を行なった後、質問にもいちいち答えたらうえ、その内容を「中国留用十年」という一冊の本にまとめて出版しているのである。それゆえ加地さんのこの本は一方的な主観で書いたものではなく、云わば日本の代表的な知識人の文化試験に一度さらされたあけくの著作である。勿論加地さんはごく普通の学者で、その文章から見ても左翼思想の持ち主でも何でも無い。その加地さんが戦後の八路軍について、まことに興味のある実見談を語っているのである。

加地さんの話によると、終戦の少し前に突然満洲に侵入して来たソ連軍の評判は、中国人の間ではまことによく知らなかった。何しろ工場の機械を容赦なく取り外して持ち出すうえに、食料油の原料になる大豆までさらって行ってしまおうので、町の者は料理の調味にも事を欠く始末で、これでは東洋鬼子(日本人)より今度の大鼻子(ソ連人)の方が一層わるい。東洋鬼子はまだしも何か残しておいてくれた、という空気があった。そこへ入って来た蔣介石の国民政府軍の政治もこれまた実に陰惨である。例えば人が死んでもすぐ賄賂が入用で、酒の一本も持って行かなければ火葬もしてくれない、という有様である。こういう矢先きに中共軍が入って来て、今度は急に世間が明るくなった。満洲の住民たちは中国民族独特の生活力の根強さで、ソ

連軍が来れば赤旗を振って見せ、国民政府軍が来れば青天白日旗を軒先きに出していたが、最後に中共の旗を出して歓迎して見て驚いた。中共軍は農民に、約束のとおり立派に耕す土地を分けてくれた。しかも蔣政府のために出征している兵士の留守宅にまで分けてくれたので、これが国民政府軍のなかに多くの寝返りの兵士の生じた原因になったという事である。(蔣夫妻と親しい伝記作者によると、蔣が最も頼りにしていた満洲死守の東北軍三十万が敗戦につぐ敗戦で営口へ逃れて来た時にはわずかに三個師団に減っていて、その大部分は投降であった。また、蔣が最後の拠点の一つと考えていた難攻不落の湖南省の衛戍司令で前の参謀総長であった程潛上將も中共軍に降伏し、内蒙古に不敗の歴史を持つ勇將の傅作儀も同様であった。)

中共軍の徴兵の際の心づかいも、加地さんに依れば、なかなか行き届いている。いちいち応募の若者の家庭事情をしらべて、あとの留守家族だけで生活がやって行けるものかどうかを訊し、隣り近所の人々の手助けについても斡旋して、農耕の代役までこしらえるというやり方である。そのうえ、軍隊勤務のあいだの空白を埋めあわすために、帰宅した後の教育にも気を配る。——こんな風である。

中共の軍隊の生態にはなかなか微笑を禁じ得ないものがある。将校が病兵をいたわる光景を私はすでに本文に書いたが、これはひとりの病兵ばかりではないらしい。戦闘の帰途に将校が馬の背に看護婦などを同乗させて帰って来るのを見かける事もある。すべて健康な者は弱い者に手を貸す律が行きわたっているらしい。ジャック・ベルデンの見聞記によると、八路軍では将校と兵士とを区別する肩章というようなものがなく、これは加地さんの話とも符合する。食事にしても同様である。前線に出て行く者は一様に米飯と豚肉などで栄養をつけているが、後方に残る者は将校までが米飯に漬物だけで済ませている。一度加地さんの家を訪れた兵士が朝鮮漬のあるのを見つけて、それを分けてくれと云って代金を払った。加地さんがその金を返すと、「ポコペンだ」という。ポコペンというのは私などがよく子供の頃に使った中国語であって、「損をする」と云う意味である。つまり代金を受け取ってくれないと加地さんが「ポコペンになってしまふ」という意味

である。よほど一般人に損害を与えるのを禁ぜられているらしい。そういう場面に将校が見廻りに来ると、「ここは日本人の家だから、靴を脱いで座敷に上れ」というような注意をして行くそうである。もう一つ。——加地さんの隣りの子がハーモニカを大切に毎日吹いて楽しんでた。八路の兵士がその音をききつけてハーモニカを借りたままその日の戦闘に出て行った。「とうとうハーモニカを取られた」と云って男の子が悲観していると、夜遅く戸をたたく者がある。開けて見ると昼間の兵士がハーモニカを持って返しに来ていた、という話がある。また、日本の婦人が街頭で煙草の立ち売りをやっていると、場所がよいと見て隣りでも中国人の男が同様に煙草を売りはじめた。すると八路の将校がやって来て、「どこか場所を変えろ」と云う。男が怒って反抗すると、男の売り上げ高を全部その婦人に手渡させて追い払ったという。——但しこの話だけは又聞きです、と加地さんが断っているところを見ると、他の数々のエピソードはすべてが実見談であって、その生々しさが思いやられる。私は江南にいて新四軍しか知らないが、八路というものは大体こんなものらしい。

話はまったく変わるが、私がしばしば用事で東京の四谷見付から濠端づたいに市谷見付の方へ歩いて行くと、濠を越して土手の向うに青天白日旗のひるがえっているのが見られる。いまは台湾に移った国民政府の経営している在日華僑の小学校の眼じるしである。この旗に対しては、私は私情のこもった思い出がある。この旗の凶案を考えた頃の孫文先生は、その時分からすでに、質素で元氣な理想主義であった。食事などは私の家へ来て、焼き魚一皿ぐらいで済ませていた。孫先生には子供らしい一面もあって、私の家に入入りしている和国屋という洋服屋が最初の大總統の正服の仮縫をおおせつかったのだが、先生は、なるべく肩に綿を入れて大男に見えるようにしろというむづかしい注文をつけ、私の母に^{かか}押揃われていた。新しい国旗、新しい大總統。——みな私の子供の頃の孫先生へのあこがれと交錯する。

そういう私はいま心から蔣總統の晩年を案じている。実は私の知る限りのアメリカの友人たち——それは蔣總統が最も頼りにしているアメリカの忠誠な市民たちである——ほとんど全部が蔣政治に対して批判的である。一例を云えば、終戦後日本の天皇制残存のためにグルー大使とともに東奔西走した外交界の長老のD氏は台湾の事情にも精通しているが、台湾生れの台湾人の幸福のための台湾を主張して、私の眼の前でチャイナロビーの大立物ノーランド上院議員と激論を交わした本人である。また中国のほとんど全部の飛行場を諳んじていて、しかも華北の日本軍の傲慢さに匙を投げたM・M中佐——現在のウォール街のバンカース・トラスト信託銀行の副總裁——も戦後台湾に視察に行つて憲兵に毎日尾行され、その警察国家の実相に驚いて帰つて来た反蔣の一人である。すでに引退したが、ワシントン・ポストの長老であるE編集長も、蔣總統とも会見したことがあるらしいが、その手厳しい蔣批判は、あのステイルウエル將軍やその一統に属するジャック・ベルデンの聞き苦しいまでの個人攻撃にも劣らぬものがある。なぜこのような事態になったのであるか。それは他でもない。ニューデイルの試煉を受けて農民生活の安定を一応為し遂げたアメリカの政治家が、中国の所謂四大家族の常識外れな巨大な財産と、一生かかっても返済出来ぬ借金の重圧の下にあえいでいる中国の農民生活とを比較して見て、到底理解が出来ぬというのは無理もないのである。トルーマン政府の官吏の夫人が業者からミンクの毛皮のコートを貰えば、全米の各新聞は一斉にその写真を掲げて官界から失脚させる。アイゼンハワー大統領の片腕と云われたホワイトハウスの独裁者シャーマン・アダムス顧問が高価な冬外套とポストンのホテル代とを業者から恵まれると、忽ち輿論はアダムスを罷免させずには置かない。これがアメリカ市民の正義観である。そしてこの眼を以て台湾の政治を眺めている多くの人人のあつた、日本は朝鮮は夢にも忘れてはならない。

日本は朝鮮について苦い経験を持っている。事情はいかようにもあれ、朝鮮人民はその土に生れた主人であつて、日本はそれを幸福にする手助け役に過ぎないのだという原則を忘れてしまうと、朝鮮人民の恨は永

く残り、李承晩の政治のような極端に反動的なものが出現する。台湾の主人は台湾に生れた台湾人であって、そこへ雪崩れ込んだ何十万という兵隊は中国本土に祖先の墓を持つお客さんである。敗戦の当時蔣總統と同時に台湾へ亡命することの出来た人々は、よほど船賃や飛行機代に恵まれた例外に属する少数者であって、あとに残された多くの自由主義者は決して直ちに援蔣ではなく、大陸と台湾との二つの政治を比較して眺めている人々である。この場合蔣政府は、大陸よりも台湾に住む方が幸福なのだという実例を、海を越して中国大陸に残っている人々に事実として示す義務がある。これこそ真の大陸反攻であって、さもなければ、かつて日本陸軍が内蒙地方につくろうとした防共戦線と同様に、思想の浸透に対しては完全に無力なナンセンスというより他はない。

もしも蔣總統が将来の治安を恐れるの余り、台湾の主人公である台湾人の人材登用を躊躇したり、また、近頃噂されている憲兵政治の強化の行き過ぎをみずから嚴重に戒めなければ、台湾は第二の朝鮮になり、その噂はひろくアジア各国に拡まって、蔣總統の晩年を傷つける結果になる事を恐れる。これが国民党と生涯血縁の切れぬ立場にある私の願望である。失敗者が失敗を語っての忠告である。私がこのような切々とした苦言を書くのはよくよくの事だと思って貰いたい。

さて、対日戦に勝利を得た蔣介石は、その後不本意な事にばかり直面した。その最大なものは何と云っても一九四二年の二月にクリミアのヤルタで開かれた米英ソ三国の巨頭会議、所謂ヤルタ会議である。このヤルタ会議で、スターリンが対日戦争に参加するための代償をルーズベルト米大統領に求めた結果、満洲に於ける旧ロシア領の利権と旅順大連の所屬権の移譲を秘密のうちに承諾させたことは、大西洋憲章の精神に反して他国の領土の併合を事実上認めたる行為になるものだ。この真相は戦後アメリカで共和党が政府に押しこめられた結果、急に公表せざるを得なくなったものであって、いずれにしても、蔣介石にとっては最大の衝

撃であった。何はともあれ、彼の全く知らぬ間に満洲と旅順大連の權益がそろってソ連の手に移されていたという事実は、外交史上にも例のない侮辱であった。

めんどろな事は次ぎ次ぎに起った。早くも一九四四年の九月には、在華米軍の司令官で蔣介石顧問に任命されたスティルウェル將軍は、國務省に宛てて蔣と到底両立が出来ない旨の報告を行なっている。曰く、「蔣介石は真に民主的な制度を打ち立てるとか、共産主義と共同戦線を張るとかいう意志は毛頭ない。私の見るところでは、彼は借款や戦時援助をむしり取りながら、『戦争引き延ばし戦術』をつづけて行くだろう。

その目的はほかでもない。一党独裁政府・反動政策という基礎、もしくは秘密警察の力による民主思想の弾圧という基礎のうえに立って、彼の現在の地位を維持することがそれである」と、極めてはげしい批判を投げつけている。また、一九四四年の末にルーズベルト大統領によって蔣介石の經濟顧問に任命されたネルソン博士も、国民党政府治下の産業について、「生産能力のわずか三〇パーセント、最上のところでも七〇パーセントしか動いていない。その理由は国民党内の官僚の腐敗、各派閥間の闘争、さらに原料の投機によって、高い利潤を彼等が獲得出来るからだ」と、国民党政府の支配者にとって甚だ不利な報告を行なっている。そのうえ、一切の責を負って故郷に引きこもった蔣に代って大總統の職務を執りはじめた副總統の李宗仁は、ひそかにアメリカ当局に対して自己推薦の工作をはじめた。ところが、この工作が李の人物力量をよく知らぬワシントンの連中には予想外に利き目があったうえに、元來の反蔣グループの助言もあって、「中国の内政を改革するならば、李宗仁の手で」という声が高まり、逆に蔣に対するアメリカ輿論の冷却となってあらわれて来た。

しかしこういう風なアメリカの対華政策も、一九四四年の末に反蔣グループの中心人物であったスティルウェル將軍とガウス大使が解任され、ウエデマイヤー將軍とパトリック・ハーレー大使が新たに任命されるのを転機として、変化しはじめた。それはスティルウェル將軍の対日打倒戦略——即ちビルマのゲリラ軍を

動員してまでもビルマ公路を再建しようという戦略に対して、英国の東南アジア総司令官マウントバッテン提督の強硬な反対が原因となったものである。マウントバッテンの構想というのは、「第一に海軍と空軍によって日本を降伏させ、日本軍の占領地域の政治状態を変えないようにしておいて」共産地域の拡大を未然に防ぐ構想であった。云い換えれば中国の抗戦力の強化という事よりは、中国共産党の成長を抑える事に政策の重点を移したのである。こういう横合いからの異論に助けられて、蒋介石はステイルウェル一派の手きびしい批判を受けながらも、「国民党に無制限な支持を与える事は反対だが、相当な経済的、軍事的な援助は必要だ」というアメリカの政策の恩恵にふたたび浴して行った。こんな事情から、戦略の面では国共合作の大陸反攻作戦は後方へしりぞき、これに代ってマックアーサー元帥の太平洋飛び石作戦と、これに連関性を持たせたシェンノート空軍司令官の大陸からの日本本土爆撃作戦が前面に押し出されて来た。そればかりではない。国民政府軍総司令の何応欽上將は日本軍総司令官岡村寧次大將に命令を發して、「共産軍の手による日本軍の武装解除を防止する責任を持つて。特に開封、天津、鄭州に進撃中の共匪に対しては日本軍を集中して防衛せよ。日本軍の占領地を共匪に奪われた場合は奪回の責任を持つて」という手厳しい態度を示し、云わば敗戦の將に後始末を頼むような本末顛倒のかたちになって来た。そのうえ、蒋介石は各將領に宛てて、「すみやかに共匪を撃滅しない限り長年の抗戦の功は全く失われてしまうのみならず、中華民族は永遠に復興の望みを捨てなければならぬ。須く各部下を督励して討匪に全力をあげよ」という密電を發する次第であった。

このように内戦激突の徴候がいちじるしくなつて来たので、ルーズベルト大統領のあとを継いだトルーマン大統領は、更にハーレー大使を解職してジョージ・マーシャル元帥を中国特使に任命し、国共合作政府の実現をねらつて局面の転換をはかった。しかしそのトルーマン大統領ですら、「中国共産党の軍隊などというものは、われわれの主張する政治的統一の目的に添うものでない。これは勿論中国政府軍のなかに統合されな

ければならない」という主張をあくまで続けていた。これが一九四九年の十二月のことである。一方、マーシャル特使は焦慮する蔣介石をなだめながらも、満洲へ向けて国民政府軍二十万の大規模な輸送を行なったのを皮切りに——アメリカ副大統領ヘンリー・ウォーレスの演説によれば——マーシャル特使の着任以来、内戦に配置することの出来た国民政府軍は約百万から二百万——即ち、全兵力の四割五分から八割五分に殖え、米国の武器によって装備された兵力は三十九個師団から五十個師団に増加していた。そして日本の降伏後三年間に、国民政府に与えられた援助総額は実に四十四億四千六百万ドルに達して、毎月平均、太平洋戦争の全期間中に送られた武器の八倍半のものが政府軍の手に渡つたと云われている。そのかわり、「米中友好通商航海条約」「米中航空協定」「青島海軍秘密協定」「米軍駐華秘密協定」「米中海軍協定」などが次ぎ次ぎに締結されたところを見ると、ヤルタ会談に於けるスターリンの要求にくらべても、アメリカの收支計算はそう悪いものではなかったように思われる。(もっとも蔣政府に云わせれば、たびたびのアメリカの政策の変更によってこれらの援助もいちいち時機を失し、あまり効果はなかったと述べている。)

それにしても、国民政府は内戦に完敗した。結局、国民政府軍と共産軍の比較は装備や援助額の問題ではなくて、何よりも先ず双方の士気の問題であり、更にさかのぼれば兵士の素質の比較論になり、そして最後には、農村の父兄が国共どちらの徴兵の方に素質のよい息子を喜んで提供して、彼等の親しみをあらわしていたかという比較論になる。

内戦の最中に濠洲の或る新聞記者が、アンケートを作るために、中共軍の兵士をつかまえて入隊の動機を尋ねて歩いて見たところ、彼等は異口同音に、「政府軍が勝つと、せつかく中共軍がわれわれにくれた土地をまた返さなければならぬからです」と答えたという話が、マイケル・ケインの書いた「赤い中国の生態」という本に引用されている。この話に多少の誇張があったとしても、それが一つの普遍的な意味を持つてゐる事を、われわれは靜かに回想しなければならぬ。私の結論はいつも同じ所へ戻る。

汪精衛（兆銘）小伝

——汪精衛とウィンストン・チャーチル

汪精衛氏と対談している時、いつも私が心中に抱く感想が一つある。それは、この人は少し早く中国に生れ過ぎたという事である。汪氏は一党独裁と軍事力と秘密警察とのうえに成り立っている軍政期の国民政府時代に生れるべき人ではなかった。汪氏の比類のない雄弁、その理と熱とを兼ね備えた公的文書——すべてがすぐれた議会政治家に^{ふさわ}しいものである。

イギリスのウィンストン・チャーチル卿は私の好きな政治家だが、その自伝を読んでいると、この人から覇氣とユーモアと、そして誰もが感じる駄々っ子気分とを差し引くと、ちょっと汪精衛になるな、とよく思う。どこか身勝手なところがあつて、それに情熱過剰も手伝つて、所属政派をしばしば変えたところなども似ている点である。

このチャーチルとの比較から思いついたわけではないが、汪精衛の和平運動に関して一番欠けていたものは対英接近、もしくは対英活用という点である。これにはいろいろ内外に理由はあるが、ほとんど無為無策、成っていないと評されても仕方がない。

先ず、汪の和平運動の相手であつた日本の内情である。少し長くなるがこれを分析して見よう。日本では天皇陛下をはじめ、元老西園寺公、参謀本部、海軍、財界は終始イギリスの仲介による和平を望んでいた。

ただ陸軍省は、時に便宜上イギリスに近づくと、時には憲兵隊を使って排英運動を鼓吹し、態度が一貫しなかった。しかし何と云つてもこの場合は近衛首相の態度が根本の鍵を握るわけだが、近衛は事イギリスに関する限り、西園寺公の思想的後継者ではなく、彼は大学を出てすぐに「英米本位の平和主義を排す」という論文を発表したほどであつて、謂わば大本位の国際聯盟に対しては反対論者であり、世界新秩序論者であつた。それゆゑ、こんな思想の持ち主が、パリの講和会議の日本代表西園寺公の随員中に加わっているのは不穏当ではないかと云う非難すら、一部に起つたくらいである。しかし、万事受動的な性格の近衛は、特にイギリスを仲介とする和平工作に異論を唱えるでもないが、また特に進んで賛意を表する事もなく、この問題については常に何となく億劫だというような態度を示していた。駐日英国大使のクレギーなどは、「どうも近衛首相はすすんで自分に面接してくれぬ」と不平を漏らしていたくらいである。

いま、試みにシナ事変勃発以来の日本政府とイギリス大使館当局との間の会見の跡を拾い上げて見ると、昭和十二年の九月には駐日英国大使クレギーと広田外相の間に次のような問答が行なわれているのを、早くも発見する。

「いつでもわが英国は日本と中国との間の仲介の勞をとりますが、日本政府の方から和平についての希望を申し出てはくれまいか」

「もしも中国政府が動くようなら、こつちも肚を決めたいが、『或る確かな筋から』という程度の云い方で、南京の方へ通じて貰いたい。『日本の外務大臣がこう云つた』と云う取り次ぎ方はちょっと困るのだが」

「いや、『確かな筋』というだけでは、仲介者としてやりにくい。やはり広田がこう云つたというのでなければ話にならぬ」

「それなら、まあ自分個人の考を云うのだから差し支えあるまい。広田の名前を使って、広田から聞いたと云われて結構です」

数日して、再びクレギーとの懇談が続く。

「南京政府から返事があったが、蒋介石はいつでも用意がある。但し中国側からは云いにくいが一」という話でした」

「中国側でその用意があれば、非公式に日本側からも中国側からも人を出して、上海あたりで会わせて貰いたい。とにかく、イギリスはその緒だけを作って貰えばよいので、表立って第三国の介入という事になると、いろいろ障害も起るので困る。また九カ国会議とか国際聯盟の介入とかいう事になるのも、御同様困るので、日本政府としてはイギリスだけに話しかけている事にして貰いたい」

「なるほど、第三国の介入という形になると日本にとっても迷惑な点もあろう。それはよく分るから善処しよう。ついでに、貴国からの申し入れの内容を検討して見たのだが、大体趣旨は諒承出来るが、ただ一つ、防共協定承認というのは、イギリスとしては困る。イギリスとしては思想問題には触れない立て前なので、この防共という事は、日本と中国との間の直接の密約にして貰いたい」

このような会話のあとで、広田は次のような感想を述べているのである。

「とにかく、イギリスを引っ張って置かない事には中国は動かない。陸軍あたりでは『公然とアメリカに介入をためめ』と焦って云う者もあるが、それはイギリスに頼んでうまく行かなかった後でも遅くはないので、今はその時機でないと思う」

ところが、有田八郎が新たに外務大臣に就任すると、早速クレギー大使がまた訪ねて来て、こんな事を有田に尋ねた。

「一体、どこの国が日本と中国との間を仲介するのに、この際一番よいのですか」

「それは決まっていますよ。イギリスが一番よいのです」

「いや、日本の様子を見ると、イギリスは非常に嫌われているから、どうかと思うが」

「それでもイギリスが一番適任にきまっています。だからこそ、この間うちから貴官に下話をしきりに持ちかけているじゃありませんか」

「そう云われれば、この頃中国の様子を見てみると、蒋介石の周囲には、何とかして日本と話のキツカケを作りたい様子が見えます」

「それならなおさら御努力が願いたい。ドイツやイタリイが介入しても結局駄目ですよ」

これは昭和十二年十二月の会談であるが、その後中国政府の様子を注意深く探つて見ると、端なくも東京のドイツ大使館の武官室から有力な情報が入った。それは漢口駐在のドイツ総領事の話なのだが、トラウトマン駐華ドイツ大使が蒋介石に会ったところ、蒋介石は、「現在はすでにブラッセルの会議（日本軍の攻撃に関して中国政府からの提訴を受け付けていた九カ国会議）も終ってしまったしする事だから、主義上は日本との話に乗ってもよいのだが」と云っていたという事である。このトラウトマン大使の仲介工作によって蒋介石も和平受け入れの心持になり、前線の主な指揮官たちの意嚮を徴したところ、「日本政府の呼び掛けが真実ならば、最早抗戦の要なし」という満場一致の内諾を得た事は、すでに屢々私の記したとおりである。そして日本政府も、国内に抵抗の多いイギリスの仲介よりは、先ずドイツの仲介を選んだのだ。

天皇陛下もこの時は大分心配されたと見えて、有田外務大臣に対して、「この交渉は相当なゆとりを持って、第一回の交渉で様子が悪ければ、またゆっくり考えて出直すと云う風に、間を置いてやれないものか。それとも一度きりのものか」というお尋ねがあった。有田はこれに対して、その趣旨に副うように努力するとお答えした。陛下はまた平沼首相に対しても、「反英運動は取り締まるわけに行かぬのか」と反問され、木戸内大臣には「反英運動は shame (恥さらし) だったな」と憤懣を漏らされたという話が、一連の事実として原田日記に記載されている。

そして話はさらに、昭和十三年一月十五日になるのだが、この日は閑院宮参謀総長、伏見宮軍令部総長の

列席のうへ御前会議が開かれたのである。主題は中国政府から日本政府の和平呼び掛けに対する返答の来るのを待つて審議しようとするのであった。

ところが蓋を開けて見ると、外交部長王寵惠からは、「ドイツ大使を通じて申し出のあった日本政府の条件というのは、あまりに抽象的でよく判らない。もう少し具体的に、文書によって説明して貰いたい」という返事であった。そこで外務大臣は、「もう既に参謀本部からドイツ大使館の武官を通じて何度も話してあるのだから、よく内容を知りぬいて居るに拘わらず、先方がこのようにトボケるのでは到底望みはない。こちら第二段の策に出て、長期戦争の腹をきめてかかるより他に道はない。いつまでも引き擦られているという事は堪えられない」と云い出した。ところが参謀本部はこの意見には反対であつて、「たとい、会議を五日か六日延ばしても、この際は是非話をまとめたい。今まで決定した事を多少覆しても、一日も早く中国との戦争を切り上げて、ソ聯に対する準備を整えたい」という熱意に燃え、この点だけを取り上げれば、偶然にも陛下の意嚮と一致するような奇妙な現象を示したのである。

陛下もこの参謀本部の熱意のほどを奇異に思われたのか、閑院総長官に対して、「一日も早くソ聯に対する準備を急ぎたいというのはどういふ意味か。ソ聯が国境を越えて出て来る危険があるか」と云うのか。

と尋ねられたが、総長官は、「いや、これは結局、陛下の行幸の時の御警衛と同じようなもので、万一の事があつては責任者として申し訳がないという意味であります」と答えて、当時笑話の種——と云つては云い過ぎだが、一挿話の種になつたほどである。

一方、イギリスのリースロスであるが、彼はチェンバレン蔵相を取り巻く親近者の一人として、保守党の若手の中心人物であり、親日グループの代表者の一人であるが、来日に際して英国皇帝ジョージ五世のわが天の目的は中国の再建——特にその幣制改革と鉄道建設について日本朝野の協力を求める事にあつた。彼が日本の援助を期待していた証拠には、最初に予定していたアメリカ経由の来日の旅程を急に変更して、カナダ経由にしたという事でも窺われる。これはもともと、アメリカへ中国の銀が多量に流出したために、中国の銀本位の貨幣制度が危機に見舞われたのであつて、それを改革しようとするリースロスは、アメリカとは、利害相反すると思つたわけで、彼は専ら日本の援助に頼ろうとしたのである。しかし、日本政府も軍部も財界も、リースロスの期待に添うような協調は示さなかつた。というのは、日本としては、ワシントン会議以来の反動で、もう列国会議というものにいささか懲りており、中国に關係した事柄も第三国の手を煩わさず、日華兩國の直接交渉による方がよいという一般の空氣であつた。一方、リースロスは特に前大蔵大臣の高橋是清翁に対しては敬意を表していたが、その高橋翁も、中国に於ける中央銀行制度の確立という事には大賛成で、かねてからこれを強く主張していたくらいであつた。しかし、その高橋翁も、リースロスの考へている幣制改革の費用捻出方法に対しては不賛成であつた。なぜならば国民政府はリースロスの指示に基づいて「銀本位幣」という名称の新らしい銀元を鑄造して流通させたのだが、この新銀元は従来の国幣條例に規定された銀元にくらべると、鑄造費と称する百分ノ二・二五だけ純分を減らしたものである。しかもこの鑄造費なるものは実費ではなく、仮想のうへに立つ「政策的な」費用であつた。果せるかな利に敏い一般の商人はこの二種類の銀元を比べて見て、いつの世の中にも見られるとおり、悪貨は良貨を駆逐し、国民政府は居ながらにして古い銀兩を流通圏外に追いやる事に成功したが、同時に、孔祥熙や宋子文なその当事者は、さまざまの町のなかの噂話で取り沙汰されたのである。こういう事が、高橋翁の清廉な氣質に合はず、この点について特に反対の態度をとつた、というのが真相である。しかし、ともあれ、リースロスは日本の援助が期待出来ぬと見るや、独力であの幣制改革の大仕事をやってのけた事実には変りはない。これから見ても、

彼は相当の実力を備えた男であつたらしい。彼は実に意気揚々として、心中、「日本陸軍思い知ったか」と叫んだらうと思う。ともかくもこの結果、彼は、「中国の改革は日本の協力無しでも出来る」という新たな確信を抱いて彼はロンドンに引き上げて行つた。そして引き上げて行くに際して、特に日本陸軍に対する悪印象を露骨にあらわし、「どうも彼等の態度は不可解だ。中国を一度やつつけなければ気が済まぬという風だ」との一語を残して行つた。この事は在日英国大使館筋の対日接近活動にも少なからぬ悪影響を与えようと思われる。

さて、イギリスの対日和平仲介の打診はクレイギー大使の手ばかりではなく、駐華イギリス大使のサー・アーチボルト・カーによつても並行して継続されて来た。昭和十三年の夏のことであるが、カー大使は上海在勤のわが谷公使を訪れて、

「日本にとつて非常に有利過ぎるような条件で中国との間の仲介が出来そうに思われる。それで、もしも日本がそれを受け容れるならば、自分は喜んで蒋介石を説く自信がある」

こう云つて、カーはその内容をくわしく谷に説明した。谷はすぐにこれを近衛に取次いだ。しかし近衛は未だに武力による中国の打倒という事に望みを抱いていて、谷の話については決断を欠いていた。たとえば彼は当時、山下亀三郎の内輪の招宴の席上で、

「もうひと息で中国が参りはせんかと思つてゐる矢先きに、この話を受け容れて、もしも蒋介石に寝返りでも打たれては『事』だし、さればと云つてこのまま引き擦られて、『もう参りはせんか、参りはせんか』と思ひながらも深みに引き込まれるのも困る。やはり或る場合は蒋介石を相手に始末をつけなければならぬかも知れない。その点はいま研究中なんだが……」

と云つてゐる。しかし、いざ具体的処置という事になると、近衛もその相談相手の木戸も終始消極的であつて、

「参謀本部なぞの和平熱望論も一応尤もではあるが、しかしここまで事を起してしまつた以上は、中途半端というのが一番わるい。何でもかでも向うに引き擦られてしまつて、まるで敗戦国のようにこちらからワザワザ肚を見せた態度でもつて、『こんな条件で講和したらいかでしようか』と問い合はせるような事は、連戦連勝の国の側から示すべきものではない。そんな事をすれば、『日本はよほど弱つてゐるようだ。もう既に危いのじゃないか』という風に内兜を見透かれ、そのために対外的には為替の暴落とか公債の下落という事になつては商売も何も出来なくなる」

と歎く範圍を出なかつた。結局、米内海軍大臣、山本五十六海軍次官、それに池田(成彬)大蔵大臣あたりが依然としてイギリス接近論の孤塁を守るかたちであつた。かれこれするうちに、東京都内の排英運動は、日を迫うにつれて甚だしく、裏面では陸軍が資金を出し、憲兵が先頭に立つて指導する有様で、内務省の警保局も「合理的にやるものなら、やつても仕方があるまい」という軟論に變つて來てゐる有様で、米内、山本五十六、池田成彬、それに同様の親英論者である結城日本銀行総裁までが右翼の手による暗殺計画のリストに載るといふ風で、物情すこぶる騒然となつて來た。

この間にあつても、山本海軍次官は最も活動的であつて、一週間に一度は陸、海、外務の三大臣の会食を企画して意志の疎通をはかると同時に、海外の出先き部隊に対してもその指令は明快果斷をきわめていた。現に、揚子江の下流で海軍の航空部隊がアメリカの軍艦パネー号を撃沈し、陸軍の橋本欣五郎中佐の率いる砲兵部隊がイギリス軍艦レディーバード号を故意に砲撃した際も、山本海軍次官は直ちにアメリカ大使を訪問して陳謝し、齋藤駐米大使とも連絡をとつてアメリカ政府にも公的に遺憾の意を表明させたが、これは実は、陸軍の場合の橋本中佐事件に対して率先して範を示したつもりであつたのである。ところが名だたる右翼の巨頭であり、陸軍クーデターの企画者である橋本は、なかなか陸軍中央当局の云う事など聞くものではない。業を煮やした山本次官は、パネー号を撃沈した海軍航空隊の指揮官三並少将をいち早く左遷転勤せしめ

てそれとなく陸軍当局のやりよいように範を示して見せたが、その折りに、海軍大臣に対しては、「橋本の
ようなやつは弾にあたってくれると国のためになるのですが、そうなると弾はなかなか当らぬものですな
と、元気のいい報告を行なったという事である。

以上は長く横道に外れたような観はあるが、日本の対イギリス関係はこのような経過をたどって来ている
のであるから、汪精衛としても、もう少し公式論的な外交ばかりに拠らないで、重点をねらった対英活動を
やって貰いたかった。たとい内外の事情が事情だから具体的な収獲を得るには至らなくても、英国との間に、
互いに地下の坑道だけは通じておいて、いつでも時機が到来すれば話し合いの緒は直ちに作れるという工作
ぐらいは不可能ではなかったと思う。なぜそれすら出来なかったのか。

この原因は、第一には汪精衛の考え方から生じていると思う。近衛がイギリスの問題に関しては西園寺の
思想上の後継者ではなかったのと対照的に、汪はこの点で孫文のよき門弟であった。この孫文は一八九八年
からしばらくの間東京に寓居をかまえて私の家にも絶えず出入りして居り、私などはその膝のうえに抱かれ
て菓子を買ったりして居たものだが、孫文のイギリス嫌いはその頃から有名であった。広東の土地に生れた
彼は眼のあたりイギリスの植民地政策の暴圧を目撃して悲憤していたのである。「孫さんもいいが、イギリ
スの話になると人が変わる」と私の家人に噂をされるほど、事イギリスに関するとなると、孫文は内に秘めて
いる激情を面にあらわした。その持論である三民主義のうちの民族主義の主張にしても、革命前には満洲人
の王朝打倒を意味していたが、革命成功後は先ず何よりも百年にわたるイギリス帝国主義打倒を意味したの
である。このような因縁でイギリス嫌いは汪精衛にとつては師匠譲りのものであった。

第二の原因は汪の周囲にイギリス人と接触の出来る適任者がいなかったという点である。汪の周囲には皆
仲鳴をはじめフランスに親しむ者は多かったが、あとの中心人物は、周仏海も康紹武も日本で勉強した者で

あって、この方面では一つの弱点を露呈していた。汪の和平運動関係者としてはわずかに松本重治が、リー
ス・ロスの協力者で駐華イギリス大使館の財政顧問格であった、ホール・パッチ——現在の東アフリカ銀行
総裁のホール・パッチ卿——と密接な連絡をとり、絶えず往來をしていたくらいのものであった。丁度この
頃は宇垣外相の対英接近時代で、その結果は孔祥熙とも相当のところまで話がすすんだかのように見え、或
いは孔が日本海軍からの軍艦出迎えを待って東京へ乗り込むのではないかと予想された時期もあったのだ
が、結局は日本国内のすさまじい排英運動の抵抗を受けた宇垣の失脚で、万事ケリがついてしまった。

しかし、この対孔祥熙交渉の場合も、松本は動かなかった。彼は孔の動きの出どころをよく観察していた
のである。元来松本は孔の最も信頼している秘書の喬輔三夫妻とは尋常一様の間柄ではなかった。この喬は
孔の信任が厚く、あの西安事変の際にも絶えず孔から喬へ直接長距離電話がかかって来て、喬もまた実に忠
実に秘書の任務を果していたのである。実を云えば喬以外の孔の秘書はみな反日思想の持ち主であるうえに、
それぞれ秘書としての役得かせぎの方が忙しかったに反して、喬は大して敏腕ではないが、信頼の出来る重
厚な人物であったからである。この喬は、西安事変に際しては、長年の友情のしるしとして、あの大事変に
関する一切のホット・ニュースを松本に提供して、同盟通信社シナ総局長としての松本の仕事に花を持たせ
た。おかげで松本は大手を振って、アツケにとられる中国勤務の世界各国のニュース・サービスの連中の間
を潤歩したのである。

しかし、こういう事情は決して汪精衛の言い訳にはならない筈である。ことに——私が日本人の立場とし
てこんな事を云うのはおかしいが——汪精衛は日本政府からたびたび重大な違約の被害を受けていたのだか
ら、どうしても第三国のなかに汪の保証人をつくるという事は必要であった。且つ、日本に対しても、「イギ
リスとの連絡ならば汪には一つチャンネルがある」というような強みを握っていて、それを活用するくらいの
工作はあるべきであった。たとえば、イギリスが日本海軍の沿岸封鎖に手を焼いた時にも、イギリスがいよ

いよ対日緩和政策に見切りをつけた時にも、そして、最後に日本陸軍が海南島に上陸して南進の口火を切った時にも——好機は汪の活躍ために至るところに転がっていたように思われてならない。このようにして汪一派の対英工作は無為無策のうちに終始したのである。

私はここで、冒頭にちょっと触れたウィンストン・チャーチル英首相のことに戻りたい。しばしば東洋方面の出先き大使に命じて日本と中国との和平の仲立ちを試みたチャーチルも、日本軍が南進の火蓋を切つて仏印に進駐するに至っては、明確に日本をイギリスのきわめて手強い正面の敵国として認めるようになった。彼の決心は今ではただ一点に集中された。それは他でもない。日本軍がこのうえ南へ下って南部仏印からタイ、マラヤ半島、シンガポールと、イギリスの大切な勢力圏内を侵して来た場合には、アメリカから必ず対日戦に参加するという確約を取りつけようという一事であった。彼は以前からしばしばネイヴアル・パーソン（海軍の人）という匿名を用いて、ルーズベルトに遠慮のない親電を打っていた間柄であったが、今やこの目的にむかって極めてねばり強く、一步一步ルーズベルトに迫って行った。日米開戦の年の八月にニューファウンドランド沖の軍艦の甲板上でルーズベルトと会談した時も、彼は、もはや日本にむかって激しい警告を発する以外に残された道はない、と強硬に主張した。そして万一日英間に戦争がはじまったならば、太平洋と印度洋に浮んでいるすべてのイギリスの船舶は破壊されて、イギリス本国と各自治領との生命線はたちまち断ち切られるであろうと訴え、ルーズベルトに向ってあらかじめ自分で筆を執つた対日警告文の原案をまですした。しかし、ルーズベルトは、そのチャーチルの文章が日本に対してあまりにも刺激を与え過ぎるという意見を抱いた結果、渋るチャーチルを無理にも説いて、文意を温和なものに訂正させた。

丁度そういう英米間の情勢の頃に、東京ではしばらく閑職に退いていた東郷茂徳が引き出されて外務大臣に就任した。彼は最近の事情に疎くなっていたので、秘書官の加瀬俊一に命じて日米交渉の顛末を再検討さ

せた。加瀬の検討の結果は万事絶望の二字に尽きた。しかし、加瀬は最後に残された一案を考えついた。彼は麴町のイギリス大使館に出かけて行って日本の理解者であるクレイギー大使を訪ね、最終の妥協案を共に作る申し出をした。クレイギーも喜んで加瀬と膝をつき合わせて文案を練つたらえ、ロンドンの外務省へ急送した。ところがロンドンの返事は冷たいものであった。——「太平洋の問題はすべて現在には本省がみずから扱うから、出先きの大使はこの際動かぬように」という意外な内容であった。クレイギーは失望した。

ところがこの嵐の前の低迷状態を一瞬にして打開してくれた天啓があらわれた。それが日本の航空艦隊のハワイ奇襲であった。十二月七日の夕方、チャーチルは首相の別邸のあるチェッカーズで、ルーズベルト大統領の特別顧問のアヴリル・ハリマンや駐英米大使のワイナントと共に休日にくつろいだ晚餐を楽しんでいた。そこへラジオの短い戦況ニュースが三つ四つあって、最後に、「日本がアメリカ軍艦を攻撃している」の簡単なニュースで終わった。ハワイとロンドンとの間の時差がそんな時刻になるのである。ところがハリマンが食事の手をとどめて、「アメリカの軍艦を攻撃中」とはただ事でないとい出した。（一説には料理を運んで来た給仕長が「いま、日本軍のハワイ攻撃のニュースを調理室で聞きました」と、チャーチルに告げたという事になっている。）そこでチャーチルはすぐにワシントンのルーズベルトへ長距離電話を申し込ませた。ルーズベルトは二三分の後に電話口に出た。

「日本は何か攻撃に出たのですか」

「とうとう真珠湾を爆撃しましたよ。これでわれわれはみんな同じ舟に乗ったわけですよ」

「すべての事が大変単純になりましたね。あなたのために神の加護を祈ります」

三人は広間に引き返して、この「息もはずむほどの性質の衝撃」に対処しようとした。二人のアメリカの友人は毅然とした態度でこの衝撃に堪えた。彼等は非難や悲歎などで時間を浪費はしなかった。否、ふたりとも長い間の苦悩からこれで救われたように思われなくてもなかった。

チャーチルはさらに、その回想録「大いなる同盟」で次のように書き綴っている。

「アメリカをわれわれの側に持つ事は私にとって最大の喜びであったと私が云っても、私を不都合だと思ふアメリカ人はないであろう。今やここに至って、私はアメリカが完全に、死に至るまで戦争に入った事を知った。かくてわれわれは遂にその時、戦争に勝ってしまったのである」

チャーチルはその夕、「満身これ感激と興奮という状態で床に就き、救われて感謝に満ちたものの眼を眠った」と、まるで靈感につかれた詩人のような華々しきで光彩にみちた名文を書き綴っている。そして、チャーチルは眼が覚めるとすぐにルーズベルト大統領に会いに行く決心をした。アメリカに着いたチャーチルはまるで家族のようにホワイトハウスに迎えられ、三週間もそこに滞在した。このようにして日本のハワイ奇襲が英米の間に横わる重苦しい行違いを一挙に吹き飛ばしてくれたのである。日本は汪一派に劣らず、あまりにも対英工作が無策であり過ぎた。

日本政府が和平工作のために汪を引き出しておきながら、終始これを謀略の対象として扱った事は、ひとり汪に対してばかりでなく、中国国民を一段と見下す伝統的な心理のあらわれとして、まさしく日本の恥辱であった。日華の戦局が思わしくなく、汪が打ち砕かれた心を抱いて名古屋の帝大病院に入院した時、さらにそこでの外科手術が失敗して肉体の堪え難い苦痛と闘いながら永眠した時、私はたまたま軍機保護法違反に問われて巢鴨の拘留所につながれていたために、彼の臨終を看取る事の出来なかつたのは千載の恨事であった。私は保釈処分を受けて外界へ出て、はじめて事のすべてを知った。汪に対する罪の心持がいつまでも私を苦しめた。自由の身になってはじめて外を歩いた時、私は獄中で読んだばかりのポール・ヴァレリーのマラルメを追憶した一節——「秋になって私が野に出た時、彼はもうそこに居なかつた」という美しい一節を思い出した。

陳璧君女士(汪精衛夫人)小伝

云うまでもなく汪精衛夫人であつて、女傑としても有名である。陳女士が女傑でなく、汪精衛が蒋介石より年少で後輩であつたならば、蔣汪の關係も大分變つていたのではないかと云う人があるくらいである。私は陳女士とは実に奇妙な初対面をした。それは汪精衛が脱出先きのハノイから上海へ乗り込む時に、雇つたフランス籍の船があまり小さ過ぎて南シナ海の風波に堪えられず、遂に汕頭に近い碣石湾という名の入江で私たちの乗船の北光丸に乗り移つた時のことであつた。先ず汪精衛がタラップに飛び移り、それから陳夫人とつづいたのだが、船が横波を受けて揺れるために肥満した夫人の足もとは困難をきわめて登れない。その時に夫人は、すぐ後に続く私に向つて怒つたように「腰を押して下さい」と叫んだのである。それで私は夫人の大きな腰部を力の限り押し上げる事から交際がはじまつた次第であつた。ところが中段に達した時、彼女は苦しさに堪えかねて大切にかかえていた小さなトランクを私に手渡した。このトランクは人間の常識を外れた重さであつた。私は、危くトランクごと、南シナ海の藻屑になりそうになつた。後で考えて見ると、これは中国の要人が身辺に異変のある時に必ず持ち出すという純金か純銀の延べ棒の入つていたトランクであつたらしい。タラップの登り口でこの私の苦しみを発見した汪精衛は、狼狽したような態度で、陳夫人に私を紹介して、私の労に対して夫妻二人前の礼を述べてくれた。これが私の夫人に対する初対面である。

ところが、上海に着いたその晩に、夫人はまた私たちを驚かした。汪先生自身がおとなしく一夜を北光丸の船室で明かすというのに、この老婦人はどうしても日本軍の支配している日本租界に留まっているのは厭だと云い出した。たとい日本租界と外国租界との境界を流れているドブ河を泳いで渡っても、今夜のうちにフランス租界に行くのだと云い張ってきかない。第一、広東に残してある汪の軍隊の操縦は自分でなければ出来ないのだという。こんな押し問答のあげく、彼女はとうとう上陸第一夜の良人を置き去りにして、危険きわまりない暗殺の本場の夜の上海の街を単身フランス租界へ乗り込んで行った。私たちはその頑固さにあきれ、その勇敢さに心中大いに恐れをなした。同時に、日本占領軍に対してあくまでも一步も退かぬその氣魄を尊敬する氣持になった。これはなかなか出来るものではない。

南京政府樹立後の陳女士は、正直のところ、私を対蔣介石直接和平論者と見たのか、公式的な挨拶以外の交りは遂になかった。しかし二三度最高会議の席上で顔を合わせた事がある。その時の女士はきまってるソダ・ビスケットの大きな罐を膝のうえに載せ、絶えず音を立てて頬ばりながら、時おり大きな声で他の発言に異論を述べた。この異論が適切であるばかりでなく、発言の間のタイミングが天才的とも云うべきものであった。私は歌舞伎芝居の立ち見席からの「何々屋」と声をかける、あの通人の掛け声の間のよさを思い出した。それゆえ、夫人の反対をくらった発言者はいつも度胆を抜かれて黙ってしまった。周仏海などは私に、

「あの小母さんが居たのでは会議になりませんよ」と歎息していた。なるほどこれでは蔣介石時代の中央監察委員という公職にあった夫人の活躍振りは、並居る男をへきえきさせた事であろうと想像される。

やがて陳夫人は医学志望の令嬢の文彬さんを東京に留学させ、共同通信社長の岩永裕吉の家庭にあずけた。岩永家は私にとっても姻戚の間柄であった。すでに岩永氏を病で失っていた岩永未亡人は、亡き良人を神のごとく尊敬していた純情のクリスチャンであったから、岩永氏と親交のあった汪精衛氏の愛娘の来てくれ

る事は、淋しい家庭に明るい燈火をとぼすように考えて、心の底から文彬さんを歓迎した。文彬さんは両親に似て恠潑であるばかりでなく、どこか氣宇の大きい豪胆さを具えていた。年のゆかぬ同級生の怖がる動物の解剖実験など、平気でやってのけるような所があった。間もなく文彬さんは平穩裡に結婚したが、突然離婚して、こんどは白衣をまとしてカトリックの尼僧になった。激情の赴くところ、生涯の進路を突如変える性格には父君の倂があった。

私が心から陳璧君女士を尊敬するに至ったのは、女士が日本の敗戦後、南京に於て蔣介石政府によって戦犯に問われ、獄中にながれて以後の事である。人の価値というものはいざという時に現われるものだとつくづく思う。自己弁解と哀訴の多い戦犯裁判のなかにあって、陳女士は敢然として良人汪精衛の信念の正しかった事を反駁して譲らず、大声疾呼して卓を叩いて検事を逆に追及したという。その信念と氣魄に打たれたためか、しまいは傍聴席の一隅から拍手すら起ったという事である。実に常人では為し得ない事だ。私は遅れ走せにこの逸話をきいた時、亡き汪精衛のためには最上の供養であったと思ひ、一種の限りない安堵を感じた。壮烈鬼神を哭かすという中国の古い言葉は、こういう時に使うのではないだろうか。

しかし、そのために憎まれたわけでもあるまいが、死一等を減ぜられたにも拘らず、この年老いた寡婦は国民政府の台湾移動の時も釈放せられず、そのまま陳夫人の身柄は中共政府の監視下に置かれた。わずかに日本に居る昔ながらの同志が時おり困難を冒して秘密裡に彼女にとどける持病の医薬品が、獄中の彼女にとって唯一の慰めであった。本年——昭和三十四年の春、彼女は十数年の孤独な生活の後、しかし一片の悔もない生活の後に、ひとり永眠して行った。それにしてもすでに良人を失い、政治力をも完全に失っていた一老婦人を何故に釈放して、せめてカトリックの尼僧として俗世を離れている令嬢の看護に守られて余生を送らせなかったのであろうか。心ある日本人のすべてが深刻な批判の眼を台北と北京の方に向けている事を一言公表して置く。

ところが、今年の初夏であった。海外の会議に臨席した、中国に縁の深い太田一郎全權大使が帰途香港に立ち寄った時、偶々陳璧君女士の最期の様子を知る機会を得たらしい。太田大使は早速、当時慶応病院に入院中であつた私にわざわざその詳細を知らせてくれた。私はこの大使の便りによって、蒋介石夫人宋美齡女士が病の篤い陳女士のために釈放の事を奔走した事実を知つた。この話は中国民族を親愛している私に、何とも云えぬ安心感を与えた。その時の私の心持は「あゝよかつた」の一言で尽きる。しかし、その蔣夫人の厚意をも辞退して獄中で死んで行つた陳璧君女士には、これも生涯を貫く骨節（骨節）があり、やはり汪精衛未亡人としては最上の道を全うしたとしか思われてならない。

陳公博小伝

陳公博のことを考えると、古い形容詞だが、男の中の男という言葉が頭に浮ぶ。それで彼に触れる事は愉快である。衆知のように彼は戦後、中国政府の戦犯裁判によって死刑になつた。それにも拘わらず、いま机に向つて筆を執っている私は、あまり陰惨な気持ちにならない。それほど彼はカラッとした男であつた。

彼は汪精衛と同じく広東人である。若い時はニューヨークのコロンビア大学で勉強したそうである。蔣汪合作内閣当時の実業部長（商工大臣）をしていたから、上海でも事業家や銀行家に知己が多い。気さくな性で、彼の逸話は盛り場のダンサーにまで及んでいる。それではアメリカ仕込みの能率本位の敏腕家で、社交家でもあるかという、そうでない。どちらかと云うと無愛想な方に属するが、落ち着いた豊富な話題の持ち主である。彼の経歴を見れば分るように、第一革命当時は国民革命軍総司令政治訓練部主任として北伐の際に各地に転戦している筋金入りであるが、外見はそうは見えない。眼鼻だちの大きい、彫りの深い顔で、一見して頼もしい気持を起させる美丈夫である。陳の実業部長時代は役目柄、洋式のパーティーを盛んにやつたものだが、当時上海に近代的な美貌で名を売つた黄小姐（カフ）という舞姫がいて、これが陳公博の коктейルパーティーなどを手伝っているうちに近づいた。実は彼女は諜報活動に従事している内縁の夫を持っていたのである。ところが近づいて見ると、陳の人柄がいかに男らしく、またどっしりとしていて万事鷹揚なので、

とうとう黄のほう釣りが釣られ、自分の計画も、夫のことも、その属している諜報網のことも全部打ち明けたあげく、このうちは上海にいたのでは自分も危いし、陳にも迷惑がかかるというので、義理の姉のいるハワイへ去って行ったという逸話を、私は周仏海から聞いた事がある。なるほどそんな話のありそうな男である。或る時、会議の終わった後で陳は私をしかめつらしく呼び留めた。そして私に香奠をねだったのである。聞いて見ると、幼い頃に東京赤坂の榎町で育ったことのある陳美麗チンメイリンというダンサーが短銃で暗殺されて老母が困窮しているから、君も日本の縁で割り前を出せという。なるほどこの美麗の死は当時十銭本のパンフレットになって停車場などで売っていたくらいだから、よほど上海でも指折りの舞姫であったのだろう。私も一度バラマウントという舞踏場の小人数の会で陳から引き合わされた事がある。この美麗嬢は幼時の縁故でか、陳の和平運動の労苦には同情的であったと云われていた。陳の気さくな半面はこんな具合である。

陳は大分遅れて、広東から南京の汪精衛の和平運動に身を投じた。理由はただ一つ、汪の周囲が寂しうだからせめて補佐でもしたいという心事であった。陳が上海へいよいよ出向くという直前に、元の総理でもあり外交部長でもあった王寵恵が送別の挨拶に来た。この王はその当時、オランダのヘーグに本部のある国際司法裁判所の判事に当選して、自身も赴任の旅に出るところであった。王はあの駐華ドイツ大使トラウトマンの仲介による日華和平工作の際の外交部長であったから、対日外交には苦勞をした体験者であった。王は同病相憐れむという友情から、それに、実は訣別という心持を隠して陳公博を訪問したらしい。ところが陳の方から卒直に心事を打ち明けた。陳は、「どうせ外国の占領軍のまんなかへ行つて政治をやるうというのだから、な事はあるまい。しかし汪先生の周囲の参加者がいつまでたっても少ないので、慰問かたがた腰をもちあげるのだ。それに、日本軍相手ではどうも汪先生は品が好過ぎる。近衛首相の声明というものも汪さんは善意に解釈し過ぎている。それで、私がひとつ、日本に対して憎まれ者になろうか、と思つている」——こう心の底を打ち明けたという、これは上海へ来て間もない頃に、陳が私にした直話であった。

陳公博が上海に出て来て最初に引き受けた仕事は、海南島に於ける日本海軍の基地設定の問題について、海軍代表の須賀少将と差し対あひまいの折衝をやる事であった。これは引き受けたというよりは、汪精衛が彼の上海到着を待ち兼ねるようにして、雲行き険悪なこの問題の処理を彼に一任した形であった。(この事情については、私はくわしく本文の二七七頁以下に述べてある。)果して陳は一步も譲らず、話し合ひは決裂寸前というところになり立ち到った。その時、最後に乗り出して陳公博をなだめ、遂に譲歩させたのは他ならぬ汪精衛その人であった。これには中国側は勿論、日本側の「内約」折衝委員も失望した。陳公博が王寵恵に訣別の言葉として漏らした予言は適中したのである。……

さて、陳公博が広東の家を出る時に、かねて覚悟していたように、太平洋戦争の結果は日本も汪精衛も惨敗した。この時にはすでに陳は、病死した汪精衛に代つて行政院長(首相)の職に就いていた。いよいよ首都南京を引き渡すという直前、陳は国民政府軍總司令何応欽上將に置き手紙を書いた。「平穩裡に首都接收の行われるためには、自分が暫時居ない方がよいと思う。自分は日本の旧都京都へでも行つて居る所は必ず明らかにして置く。必要な時には直ちに命令を發して召喚して貰いたい」——こう走り書きして、汪精衛親近の所謂公館派の首脳部数名を同行したうえ、南京から飛行機で出發した。彼は空のうえから最後の日の南京市を一望した。それから、紫金山の麓の汪精衛の新しい墓標を見納めに眺めた。そのあとは米子よこの飛行場に着くまで、同行の者の心持を引き立てるようになり、いつもと少しも変らぬ落ち着いた態度で談笑した。これは彼の傍を最後まで離れなかつた秘書の追懐談である。京都では、彼は一行とともに町外れの寺院に滞留して、静かに南京からの知らせを待った。

遂に何応欽總司令からの召喚状が来た。その直後、近衛首相は遠路陳を訪れて、過ぎた日の尽きない話に時の移るのを忘れた。やがて米子を發つて南京に着くと、何応欽の參謀將校は礼を篤うして彼を逮捕し、そ

のまま獄に投じた。

私たちの予期して疑わなかったとおり、陳公博は戦犯裁判の法廷で、沈着で立派であった。これを傍聴した或る中国の抗戦文人は、陳の態度をフランスの戦犯法廷に於けるペタン元帥の莊重さに比較して、敬慕のいろを隠そうとしなかった。陳公博は裁判長に対して日華兩國の因縁を説き、和平運動の精神を説き、東亜の大勢を説き、しかし一切は自分の責任であると結んだ。彼が死刑台に登る時、先ず獄中の隣室に囚われている汪政府の外交部長であった老友褚民誼に訣別し、獄吏に対しては長らくの世話を感謝し、刑場に到着してからも、係り検事にこの日の手数を謝して握手を交わし、眼かくしの白布を辞退して銃弾を受けた。陳公博という男はこのとおり、立派に彼らしい終りを全うしたのである。

戦後、東京の中華民国代表部に顧問として勤務していた私の懇友の某氏の話によると、何応欽総司令は陳の人となり深く好意を抱いて、減刑歎願のために蔣総統との連絡に奔走したが、あいにく蔣総統は戦後山積している残務のために前線に向いていて連絡がうまく取れず、何総司令の心づかいは遂に実らなかったという事である。この私の友は東京での勤務中にシナ事変の裏面史を書いた男であるが、仮りに彼の話に陳公博を悼むあまりの誇張が混っていたとしても、これによって大体の陳の旧友間の空気の一部は察するに難くない。しかし、地下の陳はその友情に感謝しながらも、「いや、これでよいのだよ」と云っているように思われる。

元来、汪精衛の和平運動の建て前として、それが決して国民政府に対する反逆ではなく、つねに全面和平を予期しつつ、その法的伝統を一時的に継いでいるのだという意志表示のために、国民政府主席林森に対しては終始これを主席として仰ぎ、汪自身は太平洋戦争勃発までは、自身は主席にならず、行政院長でどまっていた。しかし正直のところ、日本相手の行政院長としては、日本の軍部を軍部とも思わぬ剛毅の陳公博の方がもともと適任であった。しまいには、日本軍人のなかにも陳の男らしさを褒める者すら出て来た。陳

公博は実にそういう男であった。ともあれ、陳の最期は汪精衛夫人陳璧君女士の法廷に於ける勇敢きわまる駁論と相俟って、和平運動の終末を飾る一大光彩であった。彼は日本人に中国民族の何者であるかということとを教えた点で、永久に中国の功労者であった。

褚民誼と林柏生の死刑台に臨む態度も立派であった。剛毅であり、沈着であった。やはり苦境時代から汪精衛に私淑していた人々は、信念によって一生を貫いていた。

周仏海に会っていると、私には外国人の傍に在るといふ感じが起らない。昔から湖南省の人間の気質は日本人のそれに似ていると云われているが、周はその典型的なものである。大体中国の大官になると多少とも体裁をつくらう人が多いが、周は相手が私だから気を許していた故もあろうが、子供のよう感情むき出しであった。腹が減ると奥さんに早口で「開飯、開飯」——（食事だ、食事だ）——と湖南なまり丸出しで催促をする。そうかと思うと、食事の最中でも何度も中座して用事の電話に出るなり、問題を即決して席へ戻って来る。私はこんな風の彼に気安さを感じて、しまいに家族の一員のようになってしまう。私の娘もまた彼の家に住み込み、彼の息子や娘は私のことを「犬養伯々」（伯父さん）と呼ぶまでになっていた。周仏海は脊が高く、眼が円らで、なかなか感じのいい大官だが、書生っぽうという印象の方が強く、いつも身なりは構わず、長衫の袖ぐちなぞ、しばしば汚れっぱなしになっていた。

私は彼に会う前から彼とは縁があった。というのは、第一次近衛内閣の当時、かねてから近代中国の根本的な研究が日本で欠けている事を痛感していた風見内閣書記官長が、首相官邸のすぐ崖の下の溜池通りに小さいビルを見つけて、その一室に「シナ研究室」というものを設けた。そしてどういふ訳か、一番素養の浅い私が代表名義人になった。この研究室で最初に研究課題として取り上げられたのが、三民主義であった。

なぜならば当時の日本では、三民主義の排日的な特徴を攻撃するか、さもなければその理論上の欠陥をほじくって侮るか、どちらかの傾向が圧倒的に多く、三民主義の近代中国国民への総合的な影響を見抜いて、これを理解している「中国通」は、ほとんど数えるほどしか居なかつたからである。それで、シナ研究室では孫文の三民主義そのものを研究しはじめ他に、中国人による好い解説書を翻譯する計画を立てた。その結果、周仏海の著わした「三民主義之理論的体系」といふ論文が、他の同種のものにくらべて、現代中国の空気を一番よくとらえていて適當だろうという事になった。この翻譯書もまた私の名義で岩波文庫から出版されたのだが、当時の私は、そのわずか二年後に周仏海の家で一時起居をとるようになるうとは、夢にも思わなかつた。

周仏海はシナ事変勃発当時は国民党の中央宣伝部長であつたが、その前には蔣介石の侍従室第二主任を勤めて、蔣の信任も至つて篤かつた。それゆゑ、周仏海というものは蔣の直系中の直系であつた。ところがその周は、シナ事変がはじまるとすぐに南京西流湾の自宅に「低調クラブ」といふ名の秘密のクラブをつくつて、日華和平の運動に着手したのである。これには官吏や文化人や実業家ばかりでなく、前線の軍人も加わつた。たとえば浙江方面の総司令であつた顧祝同上將なども、絶えず周に連絡をとつていた。この「低調クラブ」といふ名は逆説的な意味を含んでいる皮肉なものであつた。つまり、その当時の風潮として衆座のなかへ出ると「抗戦々々」と心にもない高い調子で絶叫して大衆に媚びるオポチュニストが横行していたので、これを揶揄してわざとその反対語を名称に使つたものであるが、この名付け親は中国近代文化運動の生みの親である胡適博士だといふ事になつてゐるのだ。

周はそればかりではない。やがて彼は、恩師蔣介石の永年の政敵である汪精衛の和平運動にすすんで身を投じて、その最高の補佐役たる事を引き受けたばかりでなく、後々には一歩進んで汪政府の実権をにぎる第一人者にまでなつてしまつたのである。これは大きな研究課題だ。恐らく周は一二年後の情勢を分析して、

日華兩國の和平による蔣汪合作必至という見透しをつけ、その場合にひと役買うのは自分を措いて他にはないと自認していたのではあるまいか。どうもそう思われる節がある。なぜならば、周は平常でも来客のいな折には、しばしば蔣介石の古い親筆の手紙を机の引き出しから二三枚取り上げて、「懐かしいねえ」と嘆息をめた声を放ちながら、私の顔いろを見守っていたからである。この一事から推し量っても、私は周が必ず蔣介石周囲の旧の同僚たちと、いつ何時でも連絡のとれる態勢にあると信じていた。しかもその連絡先きは多方面であって、陳布雷を窓口とする蔣の身辺は勿論のこと、顧祝同總司令官をはじめ軍系統のみならず、CC団のような特殊な党組織にまで及んでいると睨んでいた。そればかりではない。そもそも周が蔣の和平陣営に加わる時も、あれだけの間柄でありながら侍従室主任の陳布雷に一片の断わりも無しに事を決行したとは、どうしても考えられなかった。従って私の関心事は、このような立場にある周が、いざ蔣汪合作という時に、どのようにして日本との間を取り持つか、且つ、汪の地位保障という点についてどのような奔走をやり遂げるか、細心の注意をはらっていたような次第であった。実は、私はこの周の心理を逆用しようと考えていた。——つまり、われわれの誠意と努力とを周のチャネルを通じて逆に蔣の身辺に伝えさせ、日本人というものを疑っている蔣に対して常に日華和平の問題を忘れさせぬように仕かける事であった。私は日華の和平運動に参加している数年のあいだ、周に対しても康に対してもこのやり方を一日たりとも、変えた事はなかった。

周は大雑把な男のように見えて、実はなかなかの理論家であることは、その著作の「三民主義之基本的問題」にもうかがわれる。和平陣営に投じてから書いた「回顧と前瞻」という一文もまた、優れた名文である。これを汪精衛の文章にくらべて見ると、汪のそれは三段論法的な組立てと、中国古来の対句法を近代化したような華麗な品格とを兼ね備えているが、周の書くものには、どこかアケスケな、胸を開いた気安さがあり、

読む者を何となく親しませた。この点、康紹武は文章を一向書かなかったから、周は対外宣伝の役割においても汪とならば重要な人物になっていた。

ところが、周はこの理論家としての特徴とまったく相反する他の一面を持っていた。それは政治のやり方が実戦的だという事である。これを剣法に喩えれば、周は何々流の奥許しをありがたく頂戴する秀才型ではなく、敵の背中でも向うツネでもたたいて倒してしまえば、それで文句はないのだろうという実戦型である。丁度吉川英治氏の書いた若い頃の宮本武蔵流に似たところがある。この流儀から、周はその和平理論とは別個に、汪陣営中の早期政府樹立論の急先鋒になったのである。そもそも周が康からの報告をうけて、いざ和平運動に乗り出して見ると、日本の陸軍や興亜院の態度が予想よりも遥かに強硬なのを見てとった。そしてこんな有様では到底中国の民心をつかむような和平条約は作れそうもない、と直感した。それよりは一日も早く汪政府を作ってしまったって、日本占領軍の手から中国人所有の会社や工場や商店や住宅を取り戻した方が、現実を尊ぶ中国民衆にとってはずっと実地的な魅力がある。こう彼はいち早く決心した。——要するに政府さえ作ってしまえば後はこっちのものだ。そうなれば対蔣工作にしても、汪政府が何の気兼ねもなく自由イニシアティヴを取る事が出来る。ことに汪政府の中でもただ一人、自分がその資格者となれる。こゝう周は考えた。そしてさまざまな計画を胸に秘めて和平運動を推進して行ったのである。

周は前述のように、蔣介石の政治組織の中核である侍従室にいたから、特務工作とか秘密警察組織とかいふものには当然詳しくあった。従って彼は汪陣営のなかにあって、特務警察を實際に監督し得る唯一の人間であった。且つ、財政部長のほかに行政院副院長（副首相）をも兼ねていたから、彼は特務警察を監督する権限を法的に有する上長官でもあった。周が汪陣営中の実力者ナンバーワンの地位にのし上った事は当然であった。そのうえ、彼は汪の秘密警察の責任者である丁黙邨とは、互いに陳立夫の傘下に属するCC団の党務

の前歴から云っても、じきに懇親な間柄になり易い立場にあった。果して丁は間もなくレッキとした周の直系の人物となつてしまつた。

ところがここに問題となつたのが李士群である。

そもそも汪陣營の特務警察の首脳のふたりのうち、丁黙邨の経歴は、以前からはっきりしていた。丁は蔣介石の腹心中の腹心である調査統計局長（特務警察の指揮者）陳立夫の下で、あの悪名高い戴笠と並んで少将待遇として第三処長を勤めた男である。しかし副頭目の李士群の方の経歴は一向明瞭でない。何でもウラジオストックの共産大学に学んだ事があるという話である。一時広東在勤の中村総領事へ情報を届けていた事があり、その中村の紹介状を携えて上海勤務の清水董三外務書記官を訪れて、しばらくその下で情報提供者になつていた。そのうちに今度は丁黙邨と連れだつて「暗黒の頭目」と云われていた土肥原中將を訪ねて、何か「仕事」を与えてくれと頼んでいた矢先、仏印へ脱出した汪精衛がいよいよ上海へ乗り込む事となつたが、何しろ行く先きが世界有数の暗殺の本場である上海であつたうえに、仏印では秘書の曾仲鳴が戴笠一派の手で暗殺された直後でもあるので、汪陣營でもこの戴笠に対抗し得る中国人の秘密警察組織が必要になつた結果、ここに丁黙邨と李士群とに任務が托された。——こういう事情から、丁と李はにわかに重要人物として脚光を浴びるに至つたのである。

ところが、この丁と李とは全く対照的な人柄であつた。丁は發育不全と云うのであろうか、小柄な瘠せた男で、永い間の肺患に悩んでおり、いつも疲れた青白い顔つきをしていた。この男にこのような強靱な精神力を要する仕事がよくも出来るものだと思ふに驚かぬ訳に行かない。これに反して、李は若くて健康で、精神的愛嬌に富み、燃えたつような野心を抱いて権力の座にあらがはれている。わずかな隙でもあればこれを逃さず、上役の丁に取つて代らうと待ちかまえている。だから、部下の暴れ者一同に対しても平常から世話行き届いていたに相違ない。かれこれしているうちに、遂に李にとって待望の機会が来た。李は丁のわずかな職務

上の失敗をとらえて、間髪を容れずこれに取つて代つて汪政府の警政部長となり、丁を社会部長の地位に追い払うことに成功した。次いで彼は清郷工作と称する、南京上海間の都市村落にひそむ共産党や重慶側の反汪分子を掃蕩する重要な仕事の主任を兼ねる事になつた。

李がこのように新しく権力を握つて見ると、どうも煙たいのは一枚上^う手^ての周仏海である。勢い、李の足はしばしば汪精衛夫人の許に向けられるようになった。汪夫人の方でも、広東ですでに経験があるように、軍隊とか特務警察とかいうものをいじるのは好きであつた。その結果——というわけでもあるまいが、清郷工作も、汪自身の主宰のもとにあつて、李はその直属の清郷督察公署主任として、実際の仕事をすべて総括する事務総長のような地位にのし上つて来た。

清郷工作は李の精力的な活動によつてなかなかの成果をあげた。蘇州から常州にかけて十県の小都市と農村の、人口五百万がその対象にあげられたが、例えば常熟のような米産地の小都市では、住民が十数年ぶりの平穩にみちた日々を過したと云われている。しかし、何分にも李は若いのだから、行き過ぎも自然伴なう。時には誤つて平和な良民を逮捕する事もある。ところが逮捕された者は身の一大事であるから、中国古来からの習慣に従つて、李の部下に裏面工作をする。つまり賄賂である。すると今度は、李の部下が味をしめて、故意に良民を捕えて賄賂を待つ。こんな事から、日の経つにつれて上海近郷の住民の李一派に対する批難の聲は急激に昂まり、それが汪精衛に対する人心離反というかたちに移つて行つた。ここに至つては、周仏海は和平運動全体の危機を救うために、この暗黒の一角にメスを入れる決心をした。そして周と李士群との間には目に見えぬ激しい正面衝突の偵察戦が開始された。

丁度この頃である。日本政府は汪精衛をさし置いて、本文にも書いたとおり、二種類の対蔣介石直接和平交渉をはじめた。そして松岡外務大臣は南京の阿部全權大使に命じて、この直接和平交渉の目鼻のつくまでは汪との日華和平条約の折衝を足踏みさせるように命令して来た。ところがこの日華和平条約はすでに九分

どおり出来あがってしまったので、この噂はたちまち南京でも上海でも街なかの大評判となり、汪陣営という大きな建物にはようやく落日の斜陽が差して来たような印象を、一般の中国人に与えてしまった。

こういう事情の折から、周の情報網には或る重大な秘密の報告が入って来た。それは汪政府に最後の危機が来た際には、李士群はその特務警察網を挙げて重慶に降伏し、周に先手を打って恭順第一号となる計画を抱いているという情報である。周はこの日から、実に長い時日をかけて、しかも用心深く、李の一挙一動を調査しはじめた。そのうちに、彼は重慶の戴笠の諜報機関でも李の奇怪な動向を警戒しはじめている事を知った。これによって周は決心をかため、腹心の羅君強と熊劍東に命じて李を倒す緻密な計画に着手した。

遂に或る日、それは九月九日の重陽節の前日だったと云われているが、李は岡村憲兵中佐から午餐の招待をうけた。丁度この日に李は清郷工作の中心地蘇州へ出向く予定になっていたが、「それでは午後の急行列車の発車時刻までお付き合ひしましょう」という事になり、中国料理の振舞いを受けた。すると汽車が上海を離れてから間もなく、李は激しい腹痛に襲われた。あいにく進行中の列車のなかの出来事であるから、どうにもならない。李が蘇州の駅で汽車から転げ落ちるようにして医師の診断を受けた時は、すでに彼の肉体のところどころに紫いろの斑点が生じていた。李は間もなく死んだ。

ところが、周は李と一戦交える決心をきめた頃から、彼自身の生活にも不思議な陰影が差しはじめた。それはあの開けっ放しの周がだんだん占師を信じるようになって来た事である。私は一度この占師を周の書齋で見かたけ事がある。劉復之という名の、怪異な容貌の老人であった。この占師はかつて周に、「あなたは将来財政を司る人になります」と云った事がある。その時周は笑い出して、「冗談云うな。私はおよそ財政とは縁のない男だ」と答えて気にも懸けなかった。ところが汪が政府を組織すると、他に適任者がないう理由で、周を財政部長に任命した。周はたちまちあの占師の予言を思い出した。

その後、周がいよいよ秘密警察の李士群と一戦交える決心をした時に、身边の安全をひそかに案じて、この占師を招いて見た。すると占師はこう云った。「いや、剣難の相はありません。しかし、それとは別に、あなたは五年経たぬうちに権力の座から落ちます。あなたの権力は永く続きません」——周は一瞬顔色を失った。周はこの日の事を日記に書いている。彼は私が入れ違いに書齋を訪れた事を覚えていて、その日記にも、「——この時犬養が入って来た」と記している。私は周から占師の予言のいきさつを聞かされて、シェークスピアの悲劇のなかの、常に運命の足音におののいている国王の恐怖を目のあたり見るような心地になり、思わず慄然とした。

ここまで書いて、終戦後の周を語ることになるのであるが、私の筆はつい鈍らざるを得ない。日本の敗戦が確定すると同時に、周はいち早く第三戦区の総司令顧祝同上将と連絡した。やはり私の想像したとおりであった。顧は本文にも書いたとおり、初期の上海戦以来の古い和平運動の同志であったからである。周は同時に開封地区の第二方面総司令の孫良誠上將にも密使を送って、孫の軍隊が蘇北地方へ移動して南京上海間を警備する態勢を固めるために要する八千萬元を手交している。一方、周は調査統計局長の戴笠に書面を寄せて、蒋介石主席に自首を申し出る場合の取りなしを依頼し、その結果蔣から自首を許す旨の電報を貰っている。この多忙を極めている最中に、彼は青帮の有力者である杜月笙に乞うて、故郷の湖南省沅陵にいる老母の身辺保護を依頼している。これだけの手続をとった後、彼は突然蔣主席から上海地区特別総隊司令に任ぜられて、混乱期の治安維持を引き受けたのである。この功勞で、彼は戦犯裁判では死一等を減ぜられた。上海の市民はあまりの事の意外に驚き、噂は噂を生んだ。

この辺まではまだよいのだが、戦犯裁判の記録を読んでも見ると、周は顧祝同総司令に宛てて、米軍の上陸作戦に呼応する彼の計画の詳細を書き送っているのである。のみならず、汪精衛の仏印脱出の際の和平通電

も、太平洋戦争の場合の米英に対する宣戦布告も、すべて汪の一存で行われたのであって、自分は事後にはじめて相談を受けたのだと主張している。また、さまざまの政務についても、これがかつての親友の梅思平や林伯生の責任に転化している。周が庇ったのは、同じ特務警察関係の直系の丁黙邸と羅君強の二人だけであつた。私はそこに生きる動物の生きようともがき廻るむき出しの本能の姿を見るように思い、彼の裁判記録を読みつづけるに忍びなかつた。私はあの、占師をしばしば自宅に呼び寄せていた哀れな弱い人間としての周を思い浮べた。

強いて周のために同情して云えば、この頃にはすでに周が義理を感じるような友人——後ろ髪を引かれるような思いのする盟友が身边に一人も居なくなつていたという事実である。彼は汪の直系からは、もともと異端者のように見られていた。苦楽を共にした影佐禎昭は東条首相によって左遷されて、戦死は必至といわれていた南海の離れ島ニューブリテンのラバウルに去つていた。家族同様に暮らした私も東条によって巢鴨の拘置所にほうり込まれ、空襲下で裁判を受けつつあつた。周が良心にとがめるような人的関係はもはや何一つなくなつてしまつていた。彼はその点気軽でもあり、しかし、実は人間として真に孤独であつた。

彼は獄中で特別の優遇を受けていたが、一年ほど経つて突然原因不明の死を遂げた。毒殺ではないかと云われている。私を「伯父さん」と呼んでいた周の息子幼海は、彼の父を苦しめた興亜院の態度に憤激して、夙うに羅君強の息子とともに延安の共産軍官学校へ去つて行き、彼の妻の淑恵女士は周の死について激しい怨恨を抱いて、これもまた共産軍に加わつた。あの世話女房だつた婦人が、何んでも中共将校の軍服を着ているという話である。誕生日のたびに私からの贈り物を楽しみにしていた彼の娘の慧海は香港で結婚して、これは今でも時おり私に便りを寄こしている。

康紹武小伝

康紹武については影佐禎昭とともに本文の方でほとんど語り尽している。ただ、彼がそもそも董道寧に次いで自ら日本に密行して来た動機——その背景となつてゐる浙江財閥について本文では少し書き足らぬ点がある。ここに補足する。或いは本文と重複するところが出来ても知れない。

もともと浙江財閥は、蒋介石の率いる国民革命軍が上海に入城した以後というものは、イギリス財閥とならんで国民政府を助ける両翼のようなかたちになつていた。ところがシナ事変が上海に飛び火をして以来、はじめこの浙江財閥と国民政府との間に利害の喰いちがいが生じて来たのである。なるほど日本軍は南京を占領するとすぐに揚子江や海港を封鎖した。しかし上海が孤島のようなかたちで取り残されても、奥地の物資はあの網の目のようなクリークの水路を伝つて、丁度清水が岩間を漏れるように、秘かに租界の外国商人に流れ込んで来た。この数が物を云うクリークの小舟は、夜間を待つて外国商品を再び奥地へ運び去つて行つた。

こんな訳で、中国の対英米の貿易はあまり減らなかつたばかりでなく、昭和十五年になると事変前と同じくらいに恢復しており、品目によってはさらに増加する傾向を見せていた。

しかも占領地の工業が衰えるにつれて多くの中国実業家が香港へ逃れてしまつたので、外国の企業は嘗て

見ないほどの繁栄に酔う有様で、従って金融業も恵まれた結果、たとえば香港上海銀行などは上海の為替業務をひとり占めにしてしまった。ここに上海在住の中国人の銀行家筋が立ち上って、和平のためにすゝんで一役を買った最初の要因が生れた。

そればかりではない。奥地へ都を移して行った国民政府は、日本軍に対する抵抗の必要のほかに、租税収入を殖やさねばならぬ関係もあって、上海や広東などの占領地域の工業の奥地移転を強制的に奨励しはじめたのである。しかし、これは口で云うほど容易い仕事ではなかった。敵軍の占領地から工場の機械を取り外して持って行くという事はほとんど不可能であったから、事實は奥地の旧式の工場を土台にして新式設備をほどこすか、或いは全く新しい機械を購入しなければならぬ。これは大変な資本の浪費である。それでも、昭和十五年頃までには一〇四経営ほどが約六千百萬元（實際は八千萬元にもぼると云われるが）を費して奥地の工場建設に発足して見たが、なかなか急にうまく行くものではない。再び上海へ舞い戻るものが増加して来た。これに対して、国民政府は銀行に命じて為替手数料を一割前後という法外な高額に吊り上げさせて、喰い止めに必死となる有様で、ここに外国資本の羨やむべき繁栄を他所に、民族資本は国民政府と戦わねばならないような奇妙な現象を来していた。

こういう背景のもとに、外交部亞洲司日本科長の董道寧が先ず一番手として和平の打診のために東京へ密行したのである。彼に東京行を強行させたのは南京に於ける浙江財閥の頭目とも云うべき中国銀行南京総理の呉震脩である。ところが董が東京に来て見ると、日本の参謀本部では上級幹部を挙げて、「蒋介石を相手にせず」という近衛声明に反対である事が分った。董は有頂天になって漢口に引き返し、揚子江対岸の武昌に大本営をかまえている蒋介石のもとに日参したが、蔣は警戒してどうしても面会してくれない。已むを得ず、董は最後に漢口に居る国民党副総裁の汪精衛に会い、委細を報告した。汪は非常に熱心な態度を示して董の話を書いたばかりでなく、強い言葉で董を激励した。これで元気のついた董は、さらにこの経緯を最近

までの上司であった康紹武に報告した。

その頃、康紹武は南京陥落と同時に、蔣からの命を受けて外交部亞洲司長（アジア局長）の職をやめると同時に、香港に出て来て日本の政情を詳細に研究していた。機密費も十分に貰って事を欠かなかった。そこへ董道寧があらわれて東京行きを報告したのである。康はこの報告を握るが早いか、かねて親しい浙江財閥のリーダーたち——交通銀行総経理の銭永銘や金城銀行総経理の周作民や浙江興業銀行常務理事の徐新六に詳細を説明した。あたかも前述のような事情で弱り果てていたこれらの銀行家たちは、にわかには生色を取り戻したように見えた。このようにして董を最初に東京へ押し出した浙江財閥は、康を二番手の偵察者として東京へ押し出したのである。それゆえ、康は実質上は浙江財閥の特派大使でもあったのである。

一方、蔣の周囲の和平論者も元より康の東京行きには大賛成であった。たとえば、蒋介石の前の侍従室の第二主任であり、次いで国民党の中央宣伝部長になっていた周仏海のごときは、「あとは万事引き受ける」と云って康を激励した。しかし、周は侍従室第一主任の陳布雷と相談したのであろう、康の東京行きは蔣委員長にはしばらく秘して置くことにした。当時康は蒋介石にも汪精衛にも目をかけられていて、たとえば開戦直後にもこの二大先輩を前に置いて、「事、日本外交に関してはしばらく私に委せておいて下さい」とタシカを切った事があるくらいであった。燃え立つような功名心を抱いている彼は、董道寧をさし置いて、自分ひとりで東京に乗り込む決心をした。

こんな経緯で上海に出て行った彼は、董の東京行きの時にも万事世話になった同盟通信社上海支局長の松本重治に相談を持ちかけた。しかし松本の話を書いて見ると、近衛はたしかに「蔣を相手にせず」の声明を後悔して居り、参謀本部の最高幹部も熱心な和平論者であるが、日本政府の面子もあって、或いは一時蔣に下野して貰うことになるかも知れない、決して永久とは云わぬが、それも止むを得ぬだろう、という話であった。康はだんだん自分の使命の重大性を振り返る気持になって、出発ぎりぎりという晩には東京行きに躊躇

踏のいろを見せはじめた。そこで松本は声を励まして康を元気づけたうえ、同盟通信社の社旗をつけた自動車に康を同乗させ、海軍の歩哨の厳重な誰何に対しては松本が康に代って「同盟通信」と大声で身分をあかして、波止場のドタン場まで送りどけたのである。

この康と浙江財閥との深い関係については、私にも身に覚えがある。康が二度目に日本へ密行して来たおりに、箱根のホテルで私と数日のあいだ一緒にくらしただことがある。その時彼は、私のために香港の対岸の九竜^{カオロン}に家を一軒借りて置くから是非来て貰いたいと云い出した。そしてこの住居には警察へ直通する電話を取り付ける予定だと云って、私を安心させた。そのうえ、香港へ上陸する時は、海関の役人には温州人だと云って、出デタラメな会話をやってくればよい、と入れ智恵をつけた。なぜならば温州語というものは他のいかなる方言ともまったく違うのだそうである。このようにして私が時間をかせいでいるうちには、康一派の手先の者が波止場へ馳せつけてうまく私の身柄を引き受ける。——こういう計画であった。私はどうもちと心細いとは思ったが、和平運動の使命には替えられないので康の話を承知したが、そのおりに康の用いた暗号電報の宛名がすべて香港の交通銀行宛てとなつてのを見て、私は康のこの計画に要する費用のすべてが中国政府ときわめて縁の深いその銀行から出ているものと推察した。このようにして、揚子江下流の豊饒な地帯を外国資本の独占から守りぬきたいという浙江財閥の焦慮が、康を東京に送り出したのである。康は前述のとおり、実質的にはこういう背景を持った特派大使であったのである。ただ、彼のために弁護すべき事が一つある。それは彼が和平条件については、少しもこのような浙江財閥の背景に拘束されず、終始強硬であった事である。この点、彼は私に対しても、かつて一度も妥協した事はなかった。これは、一つには臨機応変主義の周仏海に対抗する気持もあつたろう。しかし、根本はやはり彼が若い世代に属して、中国の輿論をよく掴んでいたからである。

ここにひと言つけ加えれば、元來事変前の中国の政治家や実業家が日本人に向つて蒋介石を弁護する場合には、いつも「蔣でなくては共産党を押しつける力のある者はありません」というのが常であった。勿論イギリスにしても浙江財閥にしても、蔣を援助する第一の理由はそこにあつた。ところが国民政府が敗戦の結果、南京から漢口、漢口から重慶へと移転する頃には、おもて向きは国共合作とは云うものの、内実は国民党の中堅層青年層と中共との合作であつて、蔣は次第にそのお神輿^{みこり}のうえに乗せられた象徴的な看板というような色合いが濃くなりつあつたのである。蔣の将来の後継者と目されていた陳誠すら、国共合作推進論者の先頭に立っていて、軍政部長の何応欽などは絶えず摩擦を生じている有様であつた。こんな事情だから、対日和平に乗って来ない蔣の態度は、単に意地から出ているというような単純なものではなく、もっと根本的な転換期が彼の身のうえに振りかかっていたのである。この点を考えると、「事態がここまで進まぬうちに」と憂慮して対日和平を急いだ汪精衛の態度には、それなりの理由が十分にあつた訳である。但し、中国国民全体が国共合作のレールに乗って抗日一色になつてしまつたシナ事変の後半期に至つては、すでに汪陣営はあまりに貧弱であつた。やはり南京陥落前後がヤマであつた。——従つて、事変の初め頃にあれほど対日和平の斡旋について熱心であつたイギリスが、中途からは奥地中国開発という風にその外交方針を変えたのも、日本の反英運動で厭気がさしたという事も勿論あるが、根本問題としてはやはり中国の老若男女を風靡しているこの抗日一色の傾向に、英国と雖も順応せざるを得なかつたのである。

このような大勢の推移を振り返つて見ると、シナ事変のヤマであつた南京陥落前後の大切な時期に當つて、あくまでも対英工作に知囊をしぼり、イギリスを自分の方に引きつけて置く努力を怠つた汪精衛の和平運動には、一つの大きな欠陥を内蔵していた。そしてこの欠陥を埋め合わせる事のないままに對日打診を行った康紹武の東京潜入が、とうとう実を結ばなかつたのも、また已むを得ない事であつた。

終戦後、ワシントンにいる康紹武のところへ、東京のマックアーサー司令部の追放調査係の役人がはるばる訪ねて行った事がある。当時はまだ蒋介石の国民政府が戦勝に酔っている際ではあり、康もあまり真相は語れず、大ぶん弱ったらしい。事の起りは、私がアメリカ占領軍の追放処分を不服を申し立て、国民政府に対し、私が軍国主義者ではなかったという証明を求めたためである。私は南京では日本の軍人から毒殺を計画され、東京では東条内閣によって巢鴨の拘留所に抛り込まれ、やっと裁判で無罪になって外へ出て見ると、今度は軍国主義者だという康で追放される。——これでは、あまりに話がヒド過ぎると考えた。幸にも私は、東京の中国代表部の取りなしによって国民政府にその証明を求めたのである。すると、国民政府からまことに古典文めいた回答書がマックアーサー司令部に届いた。その文意は「犬養氏が中日戦争中、国民政府が日本に対して和平の打診を行なったと思っっているのは、氏の誤解である。しかし、犬養氏がそのように誤解をした原因は、必らずしも、無くもない」——というのであって、*not likely*、云々と英訳してある。恐らく「無きにしも非ず」という、われわれが中学校の漢文の課目で習ったような言い回しが、原文であったろうと思われる。しかし、この妙な表現の一文で私は追放解除になった。

ここで、康紹武と私とに關係した最近のエピソードになるのだが、どこの国も同じだと見える。私がこの書物の本文の第一章に、ニューヨークでの康紹武との十二年ぶりの再会の光景を描いて、二人とも抱きあって泣いたと書いたところが、早速文藝春秋社宛てに中国人の匿名の投書があつて、「あんな男に泣いてやる価値はない」と言つて来たそうである。どうもこの匿名氏の長い文章から判読すると、この人は汪精衛直属の一人であるらしい。それにしてもこの匿名氏は気が早過ぎる。なぜならば私はその後本文の各章を重ねるにつれて、康紹武の性格や行動について冷静な批判のメスを用いているからである。康には少し気の毒なくらいである。元より、康の性格から云つて、あの当時多くの政敵を作つていた事は想像に難くない。それにして匿名氏の憎しみが風雪二十年、というのは驚き入った事である。これは康も反省を要する。しかし

筆者としての私の立場は、あくまでも和平運動の同志としての友情と礼儀を保ちながらも、書くべき事は後世のために書くのであって、匿名氏の望むような単なる罵倒は私の採るべき道ではない。

更にまた、私が康をはじめ周仏海に対しても警戒心が甘過ぎた、と言つて来る人がある。これも全く当たらない。何と言つても血は水より濃しで、中国人は中国人である。日本人ではない。いくら親友でも、日本人の私たちだけに忠誠を守つて、同国の友人には一言も秘密を漏らすな、と言う方が無理である。堤防の石垣から漏れる水ぐらゐは気にかげずに、堤の草のうえにどっかりあぐらをかいて、大きい川の方向だけを注目する度胸がなければ、この和平運動のような仕事は一日も勤まるものではない。それどころか、仮りに私たちが重慶側と一つも連絡もとれぬような中国人の相手を選んだならば、それこそ当時華北あたりに次ぎ次ぎに出来ては消えて行つたロボット地方政権のようなものを掴むに過ぎなかつたであらう。私たちの覬つたは、むしろ康や周が重慶側に親友のあるのを逆用して、日本側の誠意と努力とを伝えさせようという所にあつた。私たちがから見れば、康や周は有能な伝書鳩であつた。但し、この企図の根本となるべき日本政府の誠意そのものが崩壊してしまつたので、この覬いの全部が御破算になつた事は残念千万であつた。

昨年暮から今年の春にかけて、私は病氣のために長い間慶応病院で暮らした。康はそれを私の娘から聞いて、遠いワシントンから贈花空輸会社を煩わして花束をはるかに私の病室までとどけてくれた。美しい薔薇のひと束で、その花は私の室の窓の日向で数日の間咲きほこつてくれた。ルノアールの絵のように豊かであつた。そればかりではない。私の娘がこの春アメリカからヨーロッパへの旅の途中、ワシントンの康夫妻を訪ねたところ、康は大人になった私の娘をしみじみ眺めて、「ゆうべはうれしくて眠れなかつた」と言つたそうである。そして、「この頃になつて、やっと人生というものが分つて来た」とも言つたという事だ。嘗て功名心に燃え立つた友人康紹武として、貴重な一言である。娘がワシントンを去る時に、康はどうしてもホ

テル代を払わせてくれと言い張ったが、康夫妻の質素なくらしを見てとって、娘は自分でホテルの会計を済ませてしまった。ところが、秋になって娘が日本へ帰って見ると、康からまた手紙が来て、「あのホテル代はまだ保管してある。何でも欲しい品を手紙で教えてくれ。買って送ってあげる」と言ってきた。古い友というものは掛け替えのないものだ。私はこの康との友情を一生涯、大切にしようと思う。

石原莞爾小伝

石原莞爾という人物を研究するのは興味の深い仕事である。たしかに、めったに出て来る人物ではない。彼は天才型の人間の持つ魅力と欠点とをさらけ出して、彗星のように長く尾を引いて早く消えて行った。彼は誰も知っているとおりの、所謂満洲事変の計画者であり実行者であった。昭和六年九月十八日の午後十時過ぎに、奉天付近の柳条溝という地点にある南満洲鉄道の線路が二メートルほど破壊されたのをキッカケに、忽ち当時の満洲の主権者である張学良を追い出してしまったのがこの事変である。明らかに典型的な下剋上の風潮の現われた出来事であって、何も知らぬ満洲派遣軍の司令官の本庄大將は出張先きの旅順で事件の勃発を電話によって知り、あらかじめ監視役として中央から奉天に派遣されていた建川少將は宵のうちに料亭で多量の酒でつぶされていた、というのが真相である。国際聯盟から派遣された調査団のリットン委員長がユーモラスに報告しているように、「九月十九日の朝、奉天市民がいつものように平穩に起きて見ると」彼等の支配者は一夜のうちに変わっていったという迅速さであった。

しかし、私はこの事をここで論じるのではない。あれほど石原が生涯の智謀と情熱を傾けて敢行した満洲国の建設について、数年たたぬうちに石原自身が幻滅を感じはじめていた事実を重要視したのである。第一に、彼は満洲国成立に対する中国国民の反感が予期したよりもはるかに深刻なことに気がついていた。第